

福岡市

ARI

TA

KO

TA

BE

有田・小田部

第15集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第307集

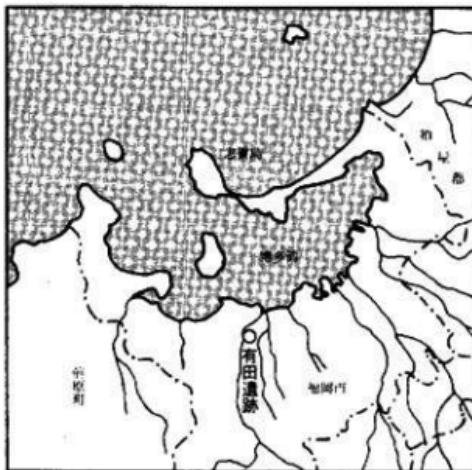
1992

福岡市教育委員会

有田・小田部

—第154次・159次・163次・165次調査の記録—

第15集



1992

福岡市教育委員会

序

福岡市の西南部に位置する早良平野は、近年、人口増加が著しく、都市開発がめざましく進んでいる地域です。それについて、埋蔵文化財の調査も増加し、王墓級の墓が発見された古武高木遺跡や東入部遺跡を始め、学術的価値の高い発見が相次いでいます。

有田遺跡群は、この早良平野の北側、有田・小田部・南庄地区にある、旧石器時代から江戸時代にかけての大遺跡です。昭和41年の九州大学による区画整理に伴う調査以来、今年度まで、168次に及ぶ発掘調査が行われました。その結果、板付遺跡と並んで、日本で最古期の弥生時代前期の環濠集落の発見を始め、多大な成果を上げています。

今回報告する第154・159・163・165次調査は、平成元・2年度に調査が行われたものです。調査では、弥生時代から中世にかけての各種の遺構・遺物が発見されました。特に第154次調査では、弥生時代から古墳時代にかけての祭祀遺物が、第163次調査では、古墳時代の初期須恵器を伴った住居址が発見され、貴重な成果を得る事が出来ました。

発掘調査から報告書作成に至るまで、ご理解とご協力を頂きました地権者を始めとする関係各位に、深く感謝の意を表します。

また本書が埋蔵文化財保護の理解を深める一助となり、併せて研究資料としてご活用いただされることを願うものです。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本書は、早良区有田・小田部・南庄地区に所在する有田遺跡群内における民間開発に伴って、事前調査を行った第154・159・163・165次調査地点の発掘調査報告書である。
2. 本書報告の調査地点の担当者は以下の通りである。
 - 第154次 …… 山崎龍雄
 - 第159次 …… 加藤良彦
 - 第163次 …… 松村道博
 - 第165次 …… 山崎龍雄
3. 本書使用の遺構・遺物実測図は各地点の担当者と平川敬治・英泰之・黒田和生・井上加代子・入江のり子・浜石正子・撫養久美子・清原ユリ子・金子由利子・宮原邦江が作成した。
4. 本書使用の遺構・遺物写真的撮影は、各担当者が行なったが、一部平川が行なった。
5. 本書使用図面の製図は、各担当者と平川・井上加代子・入江のり子・浜石正子・撫養久美子が行なった。
6. 本書の執筆は、第1章の遺跡立地と歴史的環境の項を山崎が行ない、各次調査については、各担当者の責任において執筆した。また第154次調査遺物111は埋蔵文化センターの小畠弘巳氏に実測・原稿を依頼した。
7. 本書で用いた方位は磁北であるが、一部国土座標系の方位を用いている。磁北は座標北よりも6°西偏している。
8. 本書は、各担当者との協議を経て、山崎が行なった。
9. 本書に収録した遺物及び記録類は、保存と公開普及活用を図るために、福岡市埋蔵文化センターに収蔵する予定である。

本書調査地点概要

調査次数	調査番号	調査地地番	申告面積(面積)	申請者	調査期間	事務番号	遺跡略号
第154次	8961	早良区有田1丁目24-2	450 ³³	382 都築修二	1989年12月5日～90年1月22日	63-2-421	ART154
第159次	9027	〃 小田部3丁目251番	207	185 ヒットワイ	1990年8月7日～9月11日	2-2-86	ART159
第163次	9036	〃 小田部1丁目123番	197	150 近藤 熊	〃 年9月17日～10月11日	2-2-113	ART163
第165次	9047	〃 有田1丁目21-11	198	184 倉府食品	〃 年12月2日～91年1月11日	2-2-171	ART165

本文目次

	本文頁
第1章 遺跡の立地と歴史的環境.....	1
1. 遺跡の立地.....	1
2. 歴史的環境.....	2
3. 調査の経過.....	4
第2章 第154次調査の記録	5
1. 調査に至る経過.....	5
2. 調査体制.....	6
3. 調査の記録.....	6
4. 小結.....	31
第3章 第159次調査の記録	33
1. 調査に至る経過.....	33
2. 調査体制.....	33
3. 調査区の位置と概要.....	34
4. 道構と遺物.....	35
5. 小結.....	43
第4章 第163次調査の記録	45
1. はじめに.....	45
2. 道構と遺物.....	46
3. 小結.....	53
第5章 第165次調査の記録	55
1. 調査に至る経過.....	55
2. 調査体制.....	55
3. 調査の記録.....	56
4. 小結.....	69

挿図目次

Fig. 1 有田遺跡群周辺の遺跡 (1/25,000)	2
Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点 (1/5,000)	折り込み

Fig. 3 有田・小田部台地の旧地形図 (1/5,000)	3
Fig. 4 調査区位置図	5
Fig. 5 第154次調査区遺構配置図 (1/200)	折り込み
Fig. 6 SC10・20と出土遺物 (1/4・1/60)	7
Fig. 7 SB09・17~19 (1/100)	8
Fig. 8 SK06 (1/30)	9
Fig. 9 SK06出土遺物 (1/4)	10
Fig. 10 SK07・08 (1/30)	11
Fig. 11 SK07出土遺物 (1/2・1/4)	11
Fig. 12 SE05と出土遺物 (1/60・1/4)	12
Fig. 13 SB09・SD01出土遺物 (1/3・1/4)	13
Fig. 14 SD01・02・14土層 (1/40)	14
Fig. 15 SD02出土遺物 (1/4)	14
Fig. 16 SD11・14出土遺物 (1/4)	15
Fig. 17 SX15出土遺物出土状況 (1/60)	18
Fig. 18 SX15出土遺物 I (1/4)	19
Fig. 19 SX15出土遺物 II (1/3)	20
Fig. 20 ピット出土遺物 I (1/4)	22
Fig. 21 ピット出土遺物 II (1/4)	23
Fig. 22 SP162 (1/20)	23
Fig. 23 ピット出土遺物 III (2/3・1/3・1/4)	24
Fig. 24 調査区西壁土層 (1/60)	26
Fig. 25 包含層出土遺物 I (1/4)	27
Fig. 26 包含層出土遺物出土状況 (1/60)	28
Fig. 27 包含層出土遺物 II (1/4)	29
Fig. 28 包含層出土遺物 III (1/4)	30
Fig. 29 包含層出土遺物 IV (1/3)	31
Fig. 30 遺構面出土遺物 (2/3)	32
Fig. 31 調査区位置図 (1/4,000)	34
Fig. 32 第159次調査区遺構配置図 (1/200)	34
Fig. 33 SC01 (1/60・1/40)	36
Fig. 34 SC02 (1/60)	37
Fig. 35 SC03 (1/60)	38
Fig. 36 SC04 (1/60)	39

Fig. 37 SB01~04 (1/100)	40
Fig. 38 出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/4)	42
Fig. 39 調査区位置図 (1/4,000)	45
Fig. 40 第163次遺構配置図	46
Fig. 41 1号住居址実測図 (1/60)	47
Fig. 42 1号住居址出土須恵器実測図 (1/3)	48
Fig. 43 1号住居址出土鉄器実測図 (1/2)	49
Fig. 44 1~3号溝南壁土層実測図 (1/60)	50
Fig. 45 1・2号溝出土須恵器実測図 (1/3, 1/8)	51
Fig. 46 1号掘立柱跡物実測図 (1/60)	52
Fig. 47 ピット出土須恵器実測図 (1/3)	53
Fig. 48 調査区位置図	55
Fig. 49 第165次調査区遺構配置図 (1/200)	57
Fig. 50 SK05・07~09・11 (1/40)	58
Fig. 51 SK05・08・SE12出土遺物 (1/4)	59
Fig. 52 SE06 (1/60)	60
Fig. 53 SE12 (1/60)	61
Fig. 54 SE06出土遺物 (1/4)	62
Fig. 55 SX01出土遺物 (1/4)	63
Fig. 56 調査区北壁・東壁・南壁上層・SX01土層 (1/60)	64
Fig. 57 SD02・04出土遺物 (1/4)	65
Fig. 58 SD10出土遺物 (1/4)	66
Fig. 59 麦土出土遺物 (2/3)	68
Fig. 60 有田遺跡群井戸分布図	70

図版目次

- PL. 1 (1)第154次調査区全景(南西から) (2)同(東から)
 PL. 2 (1)SC10(東から) (2)SC20(東から) (3)SE05(南から) (4)調査区西壁土層(東から)
 PL. 3 (1)SK06(北から) (2)SK07(東から) (3)SK08(西から) (4)同完掘状況(西から)
 PL. 4 (1)SB09(南から) (2)SB17(東から) (3)SB18(東から) (4)SB19(北東から)

- PL. 5 (1)SD01~03 (南から) (2)SD04 (南から) (3)SD14 (東から)
- PL. 6 (1)SX15 (東から) (2)同遺物出土状況 (3)同遺物出土状況 (4)焼上面 (西から)
- PL. 7 (1)包含層遺物出土状況 (西から) (2)同上 (3)遺構面遺物出土状況 (4)SP162遺物出土状況 (北東から)
- PL. 8 住居・溝・土坑出土遺物
- PL. 9 SX15・遺構面出土遺物
- PL. 10 包含層出土遺物
- PL. 11 (1)第159次調査区全景 (南から) (2)同 (東から)
- PL. 12 (1)調査前状況 (南から) (2)調査協力者 (3)SC01上面 (南から) (4)同 (東から)
 (5)SC01貼床断面 (北東から) (6)SC01下面 (南から) (7)SC01窓検出状況 (南から)
 (8)SC01窓横断土層 (南から)
- PL. 13 (1)SC02 (南から) (2)SC03 (南から) (3)SC02・03土層断面 (北東から) (4)SC04 (南から)
- PL. 14 (1)SB01・04 (南から) (2)SB01・SP19柱痕 (南から) (3)同SP20柱痕 (南から)
 (4)同SP21土層断面 (南から) (5)同SP23土層断面 (南から)
- PL. 15 (1)SB02 (北東から) (2)SB03 (東から) (3)出土遺物
- PL. 16 (1)調査区全景 (東から) (2)調査区西側全景 (東より)
- PL. 17 (1)調査区西側全景 (東から) (2)1号溝 (北から)
- PL. 18 (1)1号住居址出土須恵器 (1)1号掘立柱建物 (東から)
- PL. 19 各造構出土遺物 ((1)~(4)…1号住居址 (5)…2号ピット (6)…1号ピット (7)…1号溝)
- PL. 20 (1)第165次調査区全景 (南から) (2)同打ち返し後 (南から)
- PL. 21 (1)SK05 (南から) (2)SK07 (南から) (3)SK08 (南から) (4)SK09 (東から)
- PL. 22 (1)SK11 (北から) (2)SD04 (南から) (3)同礫群 (南西から) (4)調査区東壁 (西から)
- PL. 23 (1)SE06 (南から) (2)同井筒 (北から) (3)SE12 (南から)
- PL. 24 (1)井戸掘り上げ風景 (南から) (2)出土遺物 I
- PL. 25 出土遺物 II

表 目 次

Tab. 1 掘立柱建物一覧表.....	9
Tab. 2 有田遺跡群井戸出土地点一覧表.....	70
付図 1 有田遺跡群遺構配置図III (中世)	

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

有田遺跡群は福岡市早良区有田・小田部・南庄地区に所在する、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡で、早良平野を代表する遺跡である。

早良平野は、南を背振山系、西側を背振山から派生する長垂丘陵、東側を油山山塊とそれから北へ派生する七隈・飯倉丘陵に囲まれた範囲で、北に博多湾を望む、扇形の形態を呈す。この平野は主に室見川を中心として、十郎川・金屑川などの中小河川によって形成されたもので、上流域は扇状地、中下流域はその堆積土によって形成された沖積地、沿岸部は博多湾を流れる海流によって形成された海岸砂丘と島の名残りの残丘部からなっている。

有田遺跡群は、この早良平野の室見川中・下流域の洪積世の独立台地上に立地している。この台地は南北長1.5km、東西幅0.8kmを測り、北方向から幾筋かの深い谷が入り込み、西側は室見川に、東側は金屑川によって侵食を受け、あたかも北へ八手状に広がるような複雑な形で、島状にまとまっている。この台地の標高は区画整理によって大規模な削平を受け、若干低くなつたが、元々最高で15m前後あった。遺跡はこの台地全域に広がっている。

この有田遺跡群のある有田・小田部地区は昭和40年代初め迄は、「小田部大根」で有名な近郊農村地帯であったが、福岡市発展の影響をもろに受け、市街地化が急ピッチで進み、それに伴つて埋蔵文化財の調査が急増している。

2. 歴史的環境

有田遺跡群が所在する早良平野は、地域的には従来から室見川上流域、室見川中・下流域・十郎川流域・海岸砂丘部という地域割で、遺跡の在り方が述べられて來ている。ここでは有田遺跡群を中心とする地域について述べる事にする。

有田遺跡群は室見川中下流域に所在する。この地域では、沖積微高地、洪積世の段丘上を中心に、旧石器時代から各時代の遺跡が発見されている。

旧石器時代では有田遺跡群で数ヶ所包含層、又は遺物が出土する地点が知られている。しかしそれ以外ではまだ遺物の出土はない。縄文時代は晩期には沖積微高地にも遺跡は進出する。中期から後期の貯蔵穴群が有田遺跡群第5次・116次調査で見つかっているし、後期から晩期にかけては、田村遺跡・次郎丸高石遺跡、稻作農耕が伝来する晩期末には有田七田前遺跡・鶴町遺跡などがある。

弥生時代に入ると、有田遺跡群では縄文時代終末から弥生時代前期初頭頃に長径300mを測る環濠集落が出現する。前期の環濠集落は周辺の他遺跡では、今の所見つかっていない。稻作農



1. 有田遺跡群 2. 松浦故城 3. 有田七田前遺跡 4. 原遺跡群
5. 鮎町遺跡 6. 次郎丸高石遺跡 7. 横田遺跡 8. 五島山古墳(消滅)
9. 沢六町平田遺跡 10. 藤崎遺跡 a. 第163次地点 b. 第159次地点 c. 第165次地点 d. 第154次地点

Fig. 1 有田遺跡群の周辺の遺跡 (1/25,000)

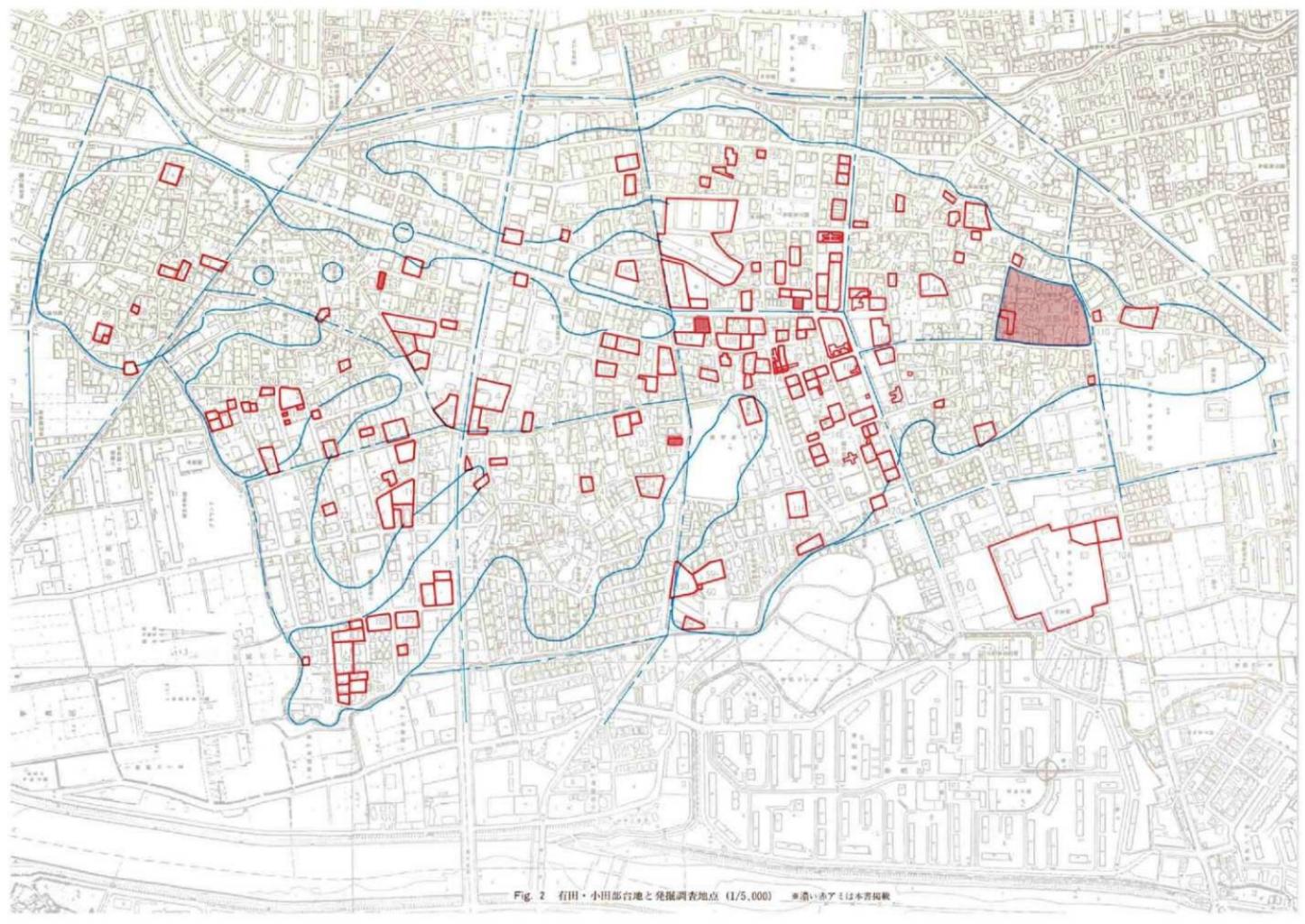


Fig. 2 石田・小田部台地と発掘調査地点 (1/5,000) ■調査点とは本書掲載

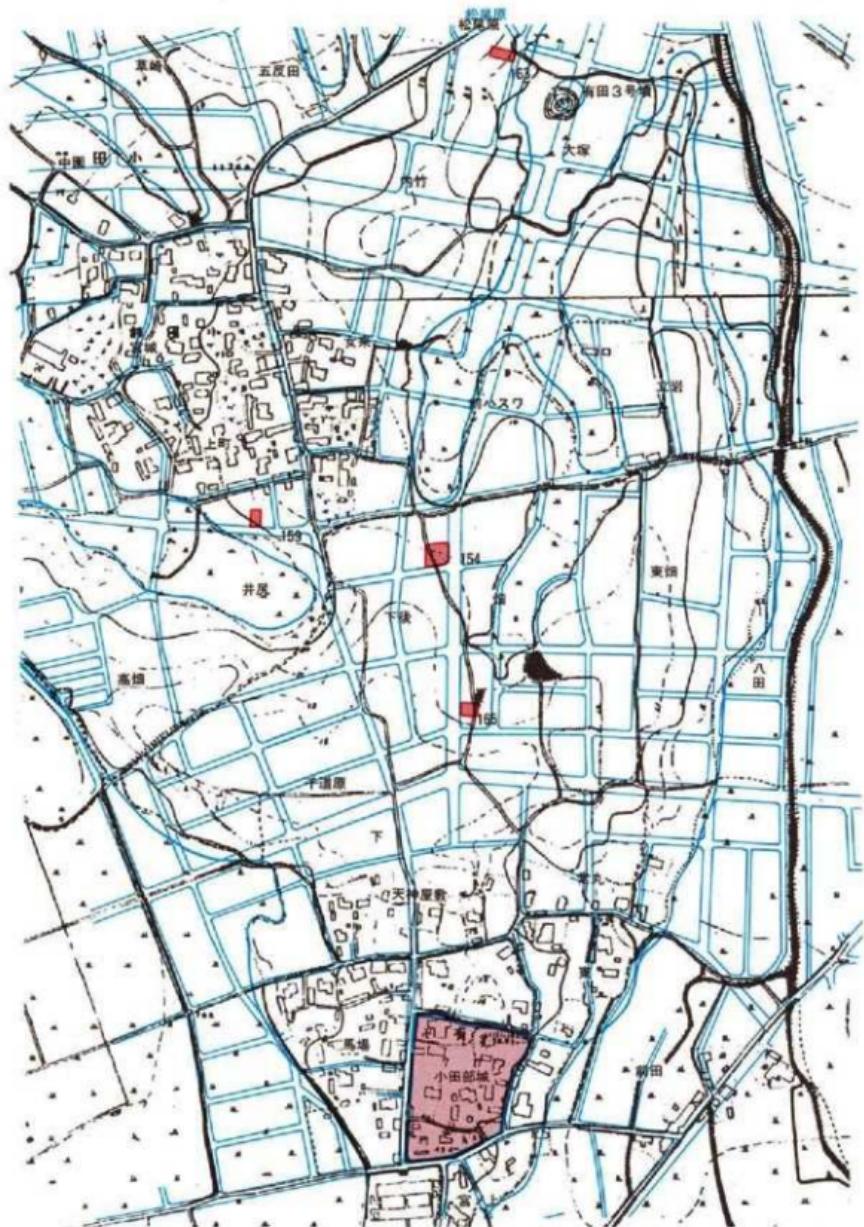


Fig. 3 有田・小田部台地の旧地形図 (1/5,000)

遺跡の立地と歴史的環境

耕の進展と共に、遺跡は低湿地、砂丘地迄進出する。有田遺跡群の東側には分村的性格を持つ原遺跡群や、また東側の飯倉丘陵では、細形銅劍の出土で知られる飯倉丸尾遺跡、砂丘地では藤崎・西新町遺跡などがある。

古墳時代も概ね前代の立地を踏襲するが、丘陵部を中心に古墳群が出現し、有田遺跡群内では、有田古墳群の筑紫殿塚、松浦殿塚・東側の飯倉丘陵では飯倉古墳群、砂丘上の藤崎遺跡では方形周溝墓が発見され、三角縁神獸鏡が出土している。

古代以降、律令制の進行と共に、早良郡がこの地に置かれ、有田・小田部地区は田部郷の中に組み入れられた。早良郡衙の所在地は現在迄見つかっていないが、有田遺跡群では有田地区に後期の大形建物群が発見されており、役所相当の施設があった事が判つて来ている。また中世後半代の下克上時代には、早良地域は大内氏や大友氏の影響下に入り、大友氏の被官であった小田部氏の居城小田部城が有田の地に築かれたと言われている。

3. 調査の経過

有田遺跡群の調査の歴史は、1966（昭和41）年の区画整理による調査から始まるが、それ以前から遺跡の存在は知られていた。1898（明治31）年には、台地南端にある現在の西福岡高校内から甕棺墓が発見され、1949（昭和24）年の同校内の調査では、金海式の甕棺から銅戈が出土している。また現地での話であるが、北側の小田部一丁目の將軍神社の北側では、昭和4年・30年に中期の甕棺墓がそれぞれ発見され、細形銅劍・細形銅戈がそれぞれ1振り出土したと言う²¹。

有田遺跡群は以上のような歴史的経験を持つが、本格的調査が始まったのは、今宿バイパスが開通後の、昭和50年以降であり、宅地開発の増加と共に、調査件数も増加し、現在では168ヶ所を数える調査が実施されている。

註1 「有田遺跡—福岡有田古代集落遺跡第二次調査報告」1968

第2章 第154次調査

1. 調査に至る経過

調査区は早良区有田1丁目24-2に所在し、調査前の状況は駐車場であった。

昭和63年度に申請番号63-2-421で、該地に店舗建設の開発申請が提出された。これを見て、事前審査班が試掘調査を行ったところ、埋蔵文化財を確認した。この結果を基に申請者と保存協議を行ったが、開発変更は出来ず、記録保存の為の発掘調査と、その報告書作成を申請者の負担で行なう事となった。

発掘調査は1989年（平成元年）12月5日の重機による表土持出し作業から1990年（同2年）1月22日の発掘調査終了迄実施し、報告書作成作業は1991年（平成3年）度実施した。調査実施面積は申請面積450.35m²中382m²である。

なお本調査・整理にあたっては、申請者の都築修三氏と施工業者の富崎工務店には多大な御理解と御協力を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

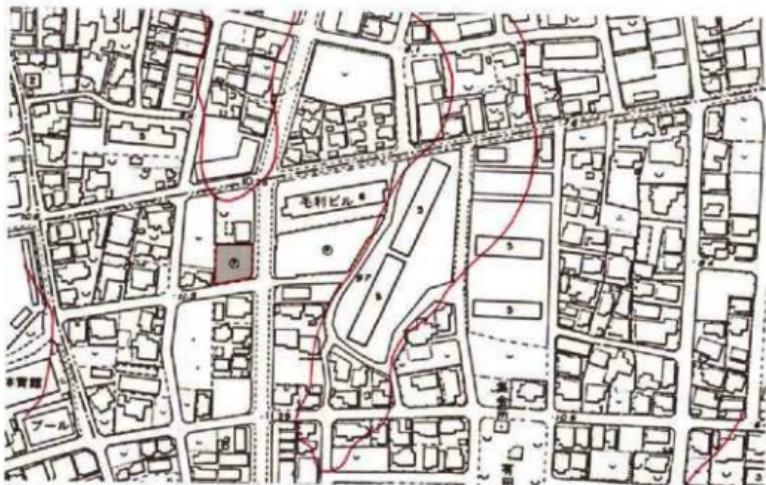


Fig. 4 調査区位置図

2. 調査体制

調査委託 都築修三

調査主体 福岡市教育委員会教育長 佐藤善郎（当時）

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾学（現）、柳田純孝（当時）、同課第2係長 飛高憲雄（現）、柳沢一男（当時）

調査庶務 埋蔵文化財第1係 吉田麻由美（現）、安部徹（当時）

調査担当 埋蔵文化財第2係 山崎龍雄

調査・整理作業 平川敬治（九州大学）、井上加代子、神尾順次、三浦義隆、岡根なおみ、金子由利子、佐藤テル子、坂口フミ子、柴山常人、徳永ノブヨ、舍川ハルエ、中原尚美、西尾タツヨ、堀川ヒロ子、松井フユ子、松井邦子、松尾キミ子、松尾鈴子、門司弘子、萬スミヨ、井上マツミ、池田礼子、内尾トミ子、松下節子、吉田祝子。

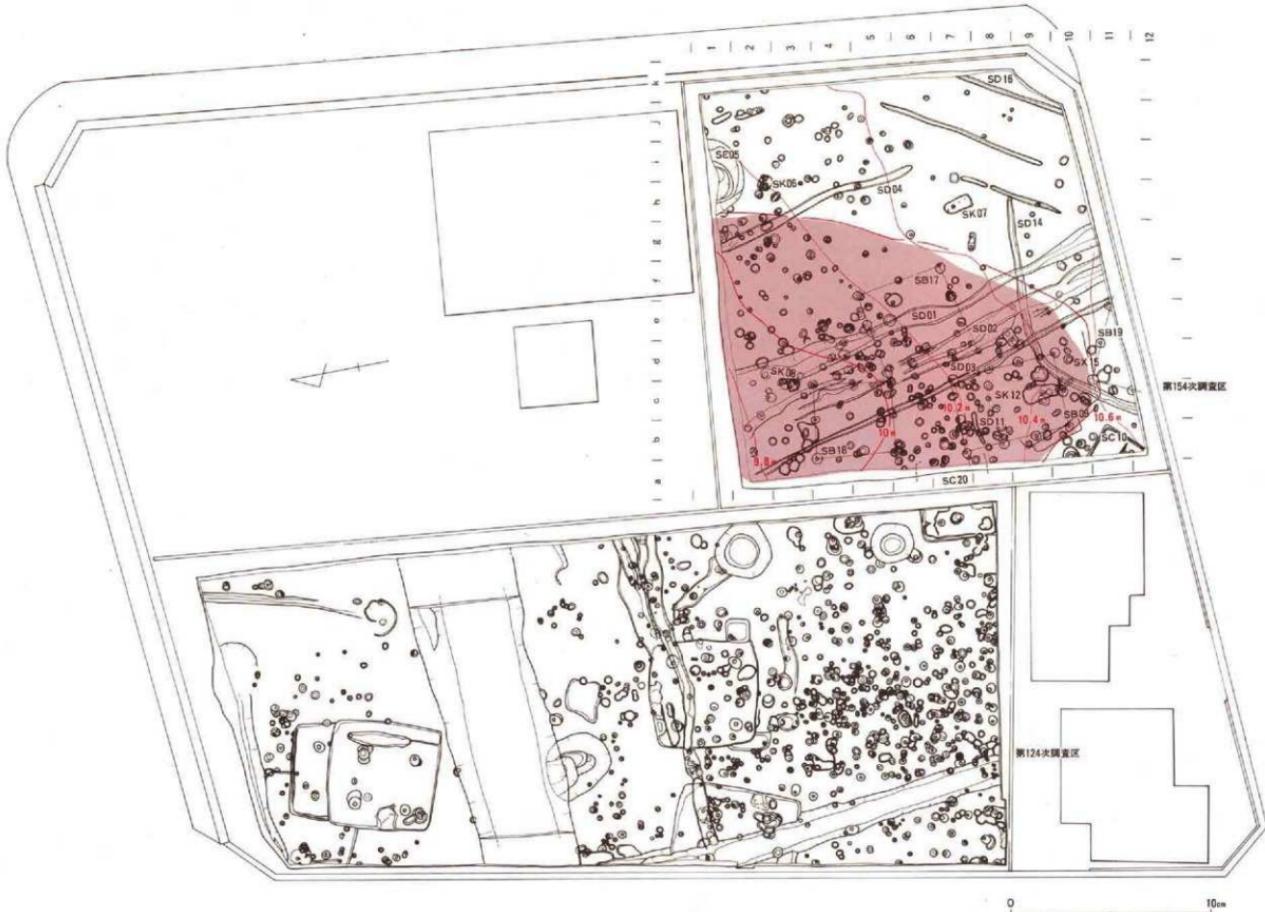
3. 調査の記録

1) 調査の概要

調査区は、有田・小山部台地のほぼ中央、北から谷が入り込む谷頭の斜面上に立地する。周辺地区は有田遺跡群内で、最も調査が多く行なわれており、弥生から古墳時代にかけての大規模な集落が検出されている。

調査区の標高は、造構面で10~10.7mを測り、南から北西方向へ緩やかに低くなっている。造構面迄の深さは、南側が30cm、北側が150cmと深くなる。北側の深くなる部分には黒褐色粘質土を主体とする包含層があり、造構は地山ローム上面で検出したが、包含層部分では包含層上面とその下の地山ローム上面の2面で検出された。造構の地山ロームは南側では明褐色ローム、北側では明黄褐色ロームである。造構は全域で検出されたが、南東側はやや薄かった。主な検出造構は、溝6条、土坑1基、竪穴住居址2棟、井戸1基、木棺墓1基、火葬墓1基、据立柱建物4棟、包含層中の祭祀造構、ピット群である。

出土遺物は包含層出土を中心に、弥生時代中期中頃の上器から古墳時代の土師器・須恵器、中世の陶磁器・石塔類などがコンテナ20箱出土した。また包含層下の造構面直上で、旧石器時代の石器を1点検出したので、最後に2×2mの試掘トレンチを設定して、旧石器包含層の確認ため押調査を行なったが、包含層は確認出来なかった。



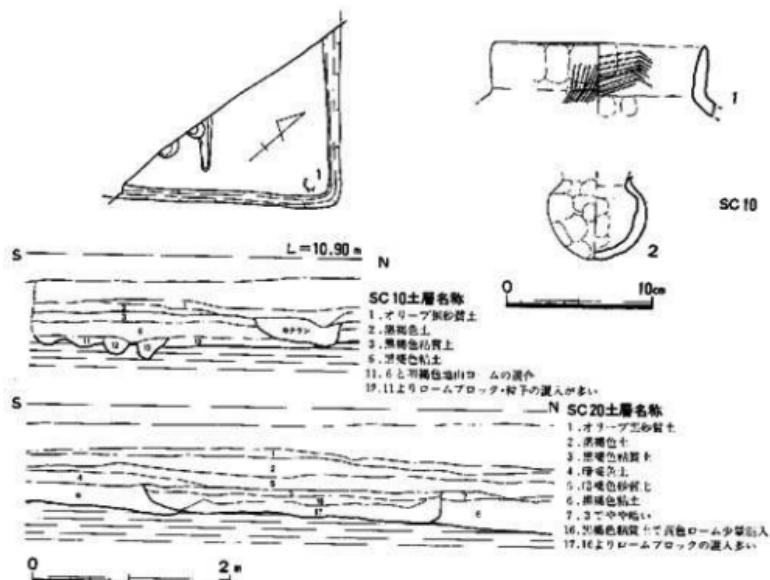


Fig. 6 SC10・20と出土遺物 (1/4・1/60)

2) 遺構と遺物

住居址

SC10 (Fig. 6, PL. 2)

西側境界地で検出した住居址。コーナー部分のみ確認した。確認規模は南東壁長が2.25m以上、北東壁長1.9m以上、深さ20cmを測る。コーナー部のみで、住居址の詳細はわからないが、壁下には周溝が巡り、床面は明黄褐色の地山ローム土と黒褐色粘土の混合土を用いて貼付けしている。住居址埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 (Fig. 6, PL. 8)

出土量は少ないが、弥生土器から上師器・須恵器の細片が出上している。

1は土師器の甕口縁部片。復原口径14.4cmを測る。口縁部は直立し、内外面指ナデのち粗い刷毛、指圧痕が明瞭に残る。胎土に石英粒を多く含む。床面上出土。2は壺形のミニチュア土器。西側調査区壁中から出土。口縁部を欠失する。体部最大径6.8cm、現存高5.6cmを測る。指

第154次調查

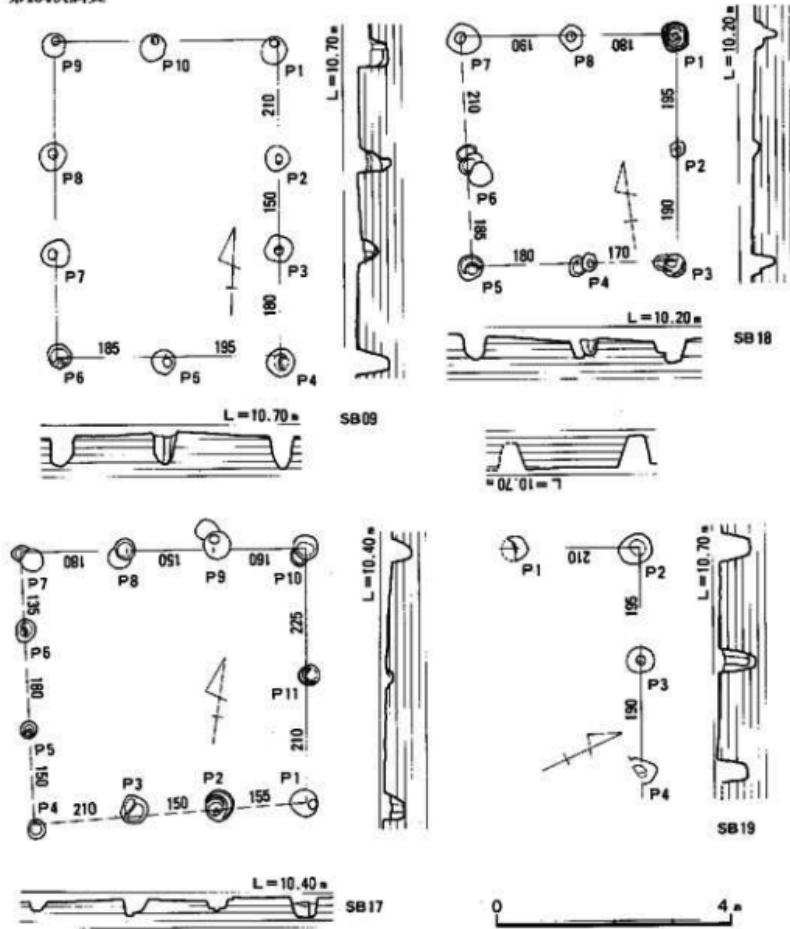


Fig. 7 SB09-17~19 (1/100)

Tab. 1 振立柱建物一覧表

方位は磁北である。

建物番号(SB)	規模(間数)	主軸方向	梁間(cm)		桁行		床面積(m ²)	主軸方位	備考
			実長(cm)	柱間寸法(尺)	実長(cm)	柱間寸法(尺)			
09	2×3	東西	385	6.2・6.5	540	6.5・7	20.8	N-2°-W	
17	2×3	東西	435 ~465	7.7・5 5.6・4.5	465 ~485	5.2・5.7 5.3・5.6	21.4	N-80°-E	
18	2×2	東西	350 ~370	6.5・7 6.3・6	385 ~395	6.3・6.5 6.2・7	14.0	N-6°-E	
17	1×2?							N-66°-W	

※尺については30cmを基準としている。

おさえ仕上。胎土は石英粒を多く含む。

SC20 (Fig. 6, PL2)

西側境界地で検出した。西隣の第124次地点から続く住居址である。包含層上の為、プラン確認が困難で、平面的に調査出来なかった。土層断面のみで確認した。南北長3.7m、東西4m以上を測る。住居址埋土は黒褐色粘質土に地山ローム土を混入する。

出土遺物は包含層のものと混在し、不明。

振立柱建物

4棟検出したが、柱痕跡を残す柱穴は他にもあり、建物はまだ存在する可能性がある。

SB09 (Fig. 7, PL 4)

西側で検出した主軸方位をN-2°-Wに取る2×3間の側柱建物。包含層上面で確認した。梁間全長3.80m、桁行全長5.40mを測る。柱穴掘方はほぼ円形で、直径は40~45cm、深さは30~55cmを測る。限柱がやや深く、しっかりしている。柱径は痕跡から10cm前後である。掘方は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 (Fig. 13, PL 8)

各柱穴から弥生土器・土師器・須恵器の細片が相当量出土している。大半が弥生土器片である。他に石錐1点、石包丁片1点、黒曜石の剝片が2点出土している。

24は扁平な橢円形状の石錐。全長7cm、幅2.3cm、厚さは1.5cm、重さ33gを測る。全体擦り調整。石質は玄武岩である。

SB17 (Fig. 7, PL 4)

中央包含層上で検出した主軸方位をN-80°-Eに取る2×3間の側柱建物。西側に1間分の廊が付く可能性もある。梁間全長4.35~4.65m。桁行全長4.60~4.85mを

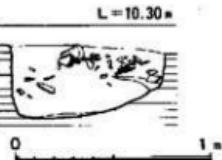
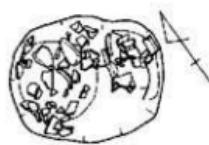


Fig. 8 SK06 (1/30)

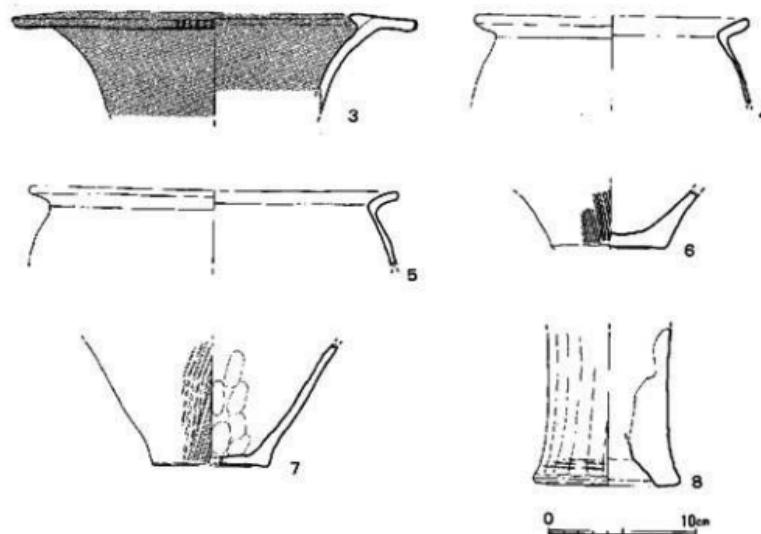


Fig. 5 SK06出土遺物 (1/4)

測る。柱穴掘方は円形又は梢円形で、直径は30~50cm、深さは10~35cmを測る。柱径は痕跡から10~15cm位である。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物

各柱穴から弥生土器・土師器・須恵器片が出土している。弥生土器が大半であるが細片で図示し難い遺物はない。

SB18 (Fig. 7, PL 4)

中央で検出した主軸方位をN-6°-Eに取る2×2間の建物である。包含層上で検出しており、最終確認は地表面迄掘り下げる段階である。棟間全長3.50~3.68m、桁行全長3.85~3.95mを測り、ややゆがむ。柱穴掘方は円形又は梢円形で、直径は25~55cm、深さ10~60cmを測る。四隅の柱穴がしっかりしている。柱穴埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物

各柱穴から出土している。弥生土器が大半で、土師器・須恵器・黒曜石の剥片が各1点ずつ出土している。

SB19 (Fig. 7, PL 4)

南側境界地で検出した主軸方位をN-66°-Wに取る1×2間以上の建物である。東西長3.85m以上、南北長2.20m以上を測る。柱穴掘方は円形、直径は30~45cm、深さは45~60cmを測る。

柱径は痕跡から10cm前後である。埋土は黒褐色
又は黒色土を主体とする。

出土遺物

各柱穴から出土している。大半が弥生土器であるが、少量土師器片も含む。細片が多く、図化出来るものはない。

土坑

SK06 (Fig. 8, PL 3)

北側境界地近くで検出した隅丸長方形状の土坑。規模は長さ0.79m、幅0.65m、最大深37cmを測る。壁は直立し、底面は西側小口部に向って深くなる。埋土は黒色粘質土と淡橙色地山ロームブロックの混合土で、下の方が粘性が強くなる。遺物は大半が小片で、上層から中層にかけて廃棄されたような状況を示している。

出土遺物 (Fig. 9, PL 8)

弥生時代中期後半代の土器が大半で、甕・壺・器台などの器形がある。

3は動先状口縁を持つ壺の口縁部小片。復元口径27.6cmを測る。口端部に刻目を持つ。内外面舟塗りである。4・5は甕の口縁部片。いずれも字状を呈す口縁部を持つ。口縁部器壁は

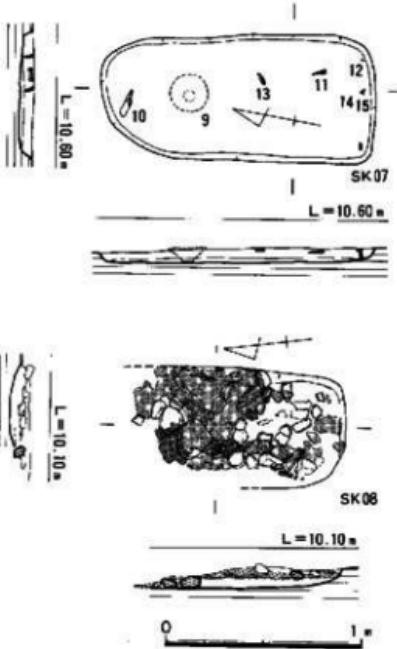


Fig. 10 SK07・08 (1/30)

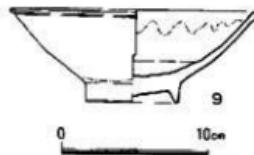
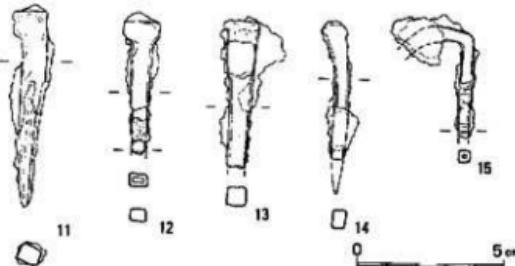


Fig. 11 SK07出土遺物 (1/2・1/4)



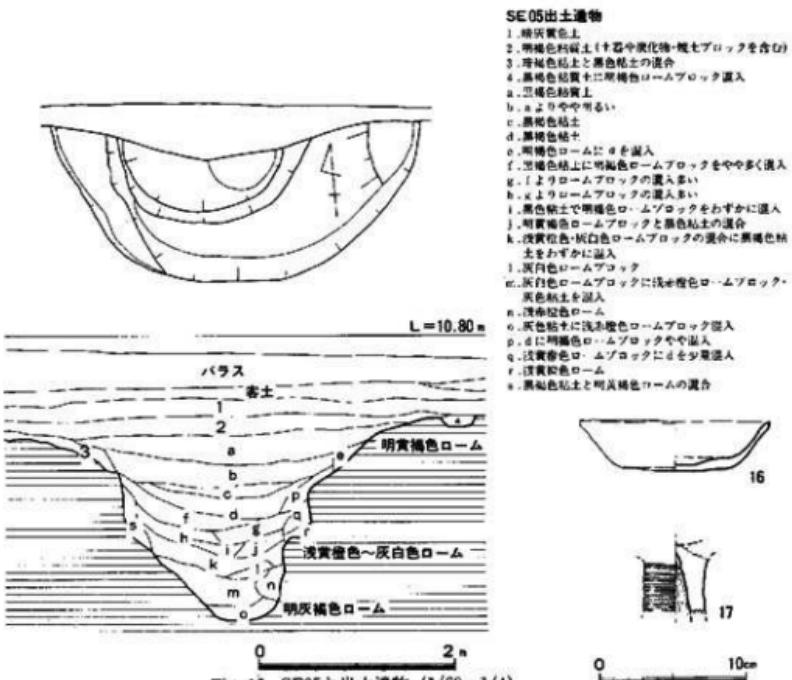


Fig. 12 SE05と出土遺物 (1/60・1/4)

胴部に比し厚手である。復元口径は 4 が 18.6cm、5 が 25.0cm を測る。4 は胎土に石英粒を多く含む。6 は腰の底部 1/2 片で、底径 8.0cm を測る。胴部外面は斜め刷毛、内面は磨滅が著しく、調整は不明。7 は 1/2 片で、復元底径 7.8cm を測る。胴外面は粗いタテ刷毛。胴内面と外底部に指圧痕が残る。8 は支脚か器台の底部 1/3 片。復元底径 10.0cm を測る。体外面は板ナデ、内面は指圧痕が残る。底部は磨滅が著しい。胎土は石英粒を多く含み、質感がある。色調は淡橙色を呈す。余り類を見ない器形である。

木棺墓

SK07 (Fig.10, PL 3)

調査区南東隅で検出した主軸方位を N-10°-W に取る隅丸長方形状の遺構である。全体に残りは悪く、規模は長さ 1.4m、最大幅は南小口部で 0.66m、深さは 8 cm を測る。床面は北側に向ってわずかに低くなっている。埋土は黒灰色粘質土であり、南側小口部に鉄釘が 3 本、北小口部に刃先が欠けた鉄製刀子が 1 点、中央から北寄りに、床より少し浮いて白磁碗が 1 点出土して

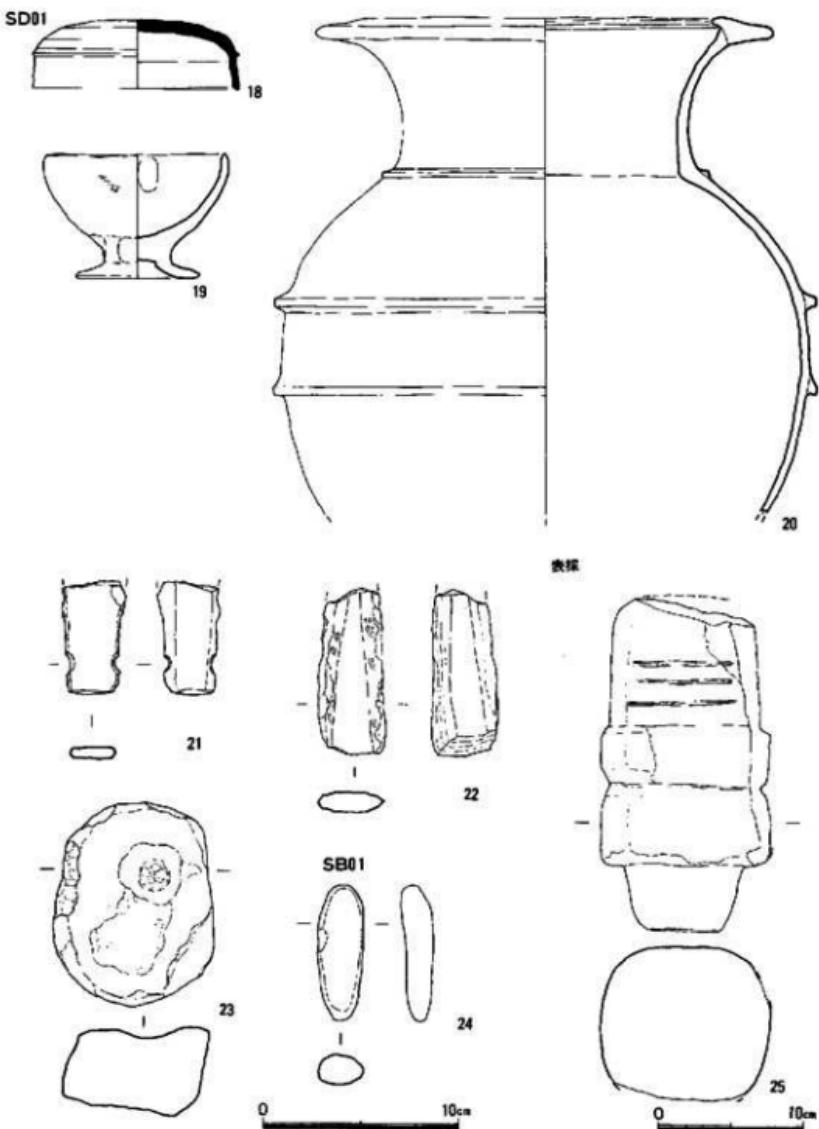


Fig. 13 SB09・SD01出土遺物 (1/3・1/4)

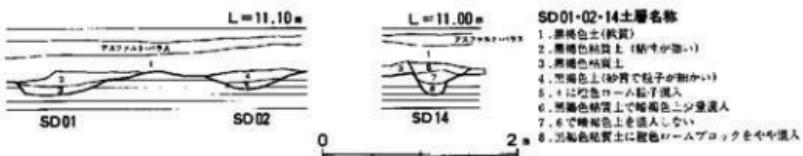


Fig. 14 SD01・02・14土層 (1/40)

いる。白磁碗は重機による表上除去作業中に、バケットにかかって上げられた。原位置はとどめないが、スタンプが残っており、それから正位置に据えられていた事がわかる。釘には木質が付いており、それから木棺墓と判断した。

出土遺物 (Fig. 11, PL 8)

弥生土器・須恵器の細片と、白磁碗1点、鉄製刀子が1点出土している。

9は白磁碗で、口縁部の一部を欠失する。口径17.0cm、高台径6.4cm、器高6.3cmを測る。白磁IV類のものである。高台部は縮胎、その他は灰白色の光沢を持った釉がかかり、内面は釉だれする。

10~15は鉄器。10は刀子の刃部から茎片。3片に分かれるが、残存長14.4cm、刃幅2.3cmを測る。全体に錆が進んでおり、残りは悪い。11~15は釘である。いずれも錆がひどい。11はほぼ完形。全長6.8cmを測る。断面は方形を呈し、最大径は0.6~0.7cmを測る。先端は尖るが、頂部は錆がひどいため、はつきりはわからない。木質が残る。12は先端部を欠失する。残存長3.1cm、直徑0.6cmを測る。木質が残る。13は先端を欠失する。残存長5.0cm、断面は方形で、径は0.5~0.7cmを測る。14も先端を欠失し、頂部はやや曲がる。残存長4.7cm、直徑0.5~0.7cmを測る。身の断面は方形である。15は曲った釘と思われる。両端を欠失する。錆がひどいが、断面は方形、木質が残る。

火葬墓

SK08 (Fig. 10, PL 3)

調査区北西隅の包含層上面、SD01掘下げ中に検出した。遺存状況は悪く、底面しか残っていないが、限丸長方形状のプランと考えられる。主軸方位を略南北のN-7°-Eに取る。残存規模は長さ1.09m以上、東西幅0.6m以上、最大深10cmを測る。上面には炭火物、焼土、拳大の礫を交えた層と、その下に人頭大から拳大の大きさの花崗岩を中心とした礫群があり、礫群は西端が比較的擴っている。礫石の中にはかなりの石が焼けており、焼土・炭火物の中には骨片も混

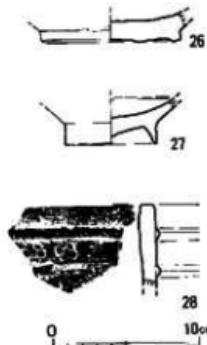


Fig. 15 SD02出土遺物 (1/4)

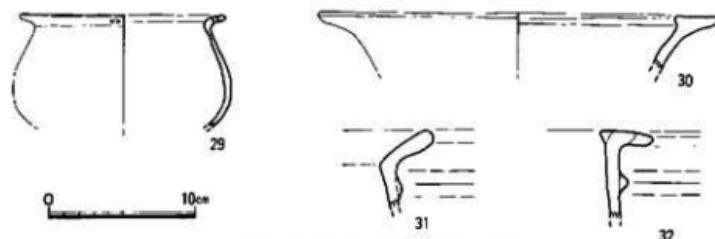


Fig. 15 SD11・14出土遺物 (1/4)

入していた。当地で棺を茶毘したのであろう。

出土遺物

弥生土器・須恵器の細片が少々、叩石と思われる石が1点出土した。

井戸状造構

SE05 (Fig.12, PL 2)

北側境界地で検出した円形の素掘りと思われる井戸である。検出したのは半分のみで、井筒は確認出来なかった。井戸の断面は湧水による壁の崩落の為か、凹凸があり、井戸底は上面に比べて、はるかに狭くなっている。確認規模は、北壁で3.45m、深さは2.15mを測る。埋土は凸レンズ状に堆積しており、大きく上下2層に分かれる。上層は黒色粘質土又は粘土を主体とし、比較的固くしまるが、下の方ほど粘性が強くなる。下層は軟質の灰白色から赤褐色の地山ロームブロックを主体とする。湧水点は中程の深さの壁が抉れたあたりであろう。

出土遺物 (Fig.12, PL 8)

大半が弥生土器である。他には黒曜石の剥片が4点、鉄滓が1点出土している。

16は土師器の杯1/2片。復元口径13.0cm、器高3.4cmを測る。器壁の荒れは著しいが、内面はナデであろう。胎土は石英粒を多く含む。平安初期のものであろう。17は須恵器の脚筒部片。外面はカキ目、内面はしばり痕が残る。胎土は石英粒を多く含む。体外面の色調は黄橙色。16は下層、17は上層出土である。

溝状造構

7条検出した。その内SD11は包含層上面の浅い溝状の窪みのようなもの。

SD01 (Fig.14, PL 5)

調査区を略南北方向に並走する浅い溝。北側でSD02と合流する。検出面は南側で地山ローム土上、北側で包含層上面である。溝幅は北側合流部で3.75m、南側で1.3mを測り、深さは20~30cmと浅い。溝断面は皿状を呈す。埋土は暗褐色から黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 (Fig.13, PL 8)

弥生中期の上器から土師器・須恵器・陶器片が大量に出土している。大半が弥生土器である。石斧・砾石・石劍・叩石なども1~2点ずつ出土している。

いずれも溝の時期とは別のものであるが、残りが良いので報告する。

18は須恵器の杯蓋で、口径14.0cm、器高4.7cmを測る。口縁部と天井部の境に明確な段が付く。口縁内面にも稜を持つ。作りはシャープである。ろくろ回転は時計回り、色調は外面が赤褐色、内面が青灰色を呈す。19は弥生終末頃の台付鉢である。復元口径12.0cm、器高8.5cmを測る。底の深い鉢部に外に大きく開く短い脚台部が付く。脚台部と鉢部の接合部には指圧痕が残る。胎土に石英粒を多く含み、色調は灰白色を呈す。20は弥生土器の蓋の1/3片。復元口径23.4cmを測る。口縁部は鋤先状を呈し、頸部と胴部の境に三角突帯が1条、胴部上半の最大胴部径付近にコ字状突帯が2条付く。調整は器壁の荒れがひどく、不明である。21は石劍の莖部片で、両側刃に抉りが入る。残存長5.7cm、最大厚0.6cmを測る。色調は青灰色を呈す。石質は細粒砂岩か。22は石劍の再利用品と思われる。残存長8.5cm、器厚は1.0cmを測る。両側面が刃部であるが欠損が著しい。色調は桃色を帯びた灰白色を呈す。石質は頁岩である。23は叩石。上面と右側面に使用による凹みがあり、その他の部分は擦っているが、こまかい敲打痕が残る。現存長10.3cm、最大幅8.1cmを測る。石質は白っぽい砂岩である。

SD02 (Fig.14, PL 5)

SD01と並走する溝で、北側はSD02と合流する。溝幅は南側で1.0m、深さは20cm前後を測る。溝断面は南側で浅いV字状である。埋土は暗褐色粘質土から黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 (Fig.15, PL 8)

弥生土器・土師器・須恵器・陶器類の小片が出土するが、大半が弥生期のものである。他に黒曜石の剣片・鉄滓が2点出土している。

26は白磁の楕円皿の底部片。復元高台径9.6cmを測る。高台部は削り出し、疊付き部分は擦ったものか磨滅している。高台部以外は施釉されており、光沢を持っている。博多分類の白磁IV類である。27は白磁楕の高台部片で、復元高台径6.4cmを測る。高台部は細く高く削り出されている。高台部外面は研磨でスベスベしている。見込みに施釉されているか、焼成がやや甘く、釉の発色が悪い。博多の白磁IV類である。28は瓦質土器の火舎の口縁部片。円形の火舎と思われるが細片で、口径は不明。口縁直下に2条の三角突帯が貼り付き、その内側に梅文がスタンプされる。表面は磨滅が著しい。色調は灰色で、胎土に石英微粒を多く含む。

SD03 (PL 5)

SD01-02と並走する小溝である。溝幅は30~40cm、深さは15cm前後である。埋土は暗褐色粘質土である。

出土遺物

弥生土器が圧倒的に多いが、土師器・須恵器・白磁・陶器・キセル1点などもわずかである

が出土している。

SD04 (PL 5)

SD01～03とは並走する小溝。途中削平によるものか消滅する。確認長10.4m、溝幅は最大で60cm、深さは25cm前後を測り、溝断面は略V字形を呈す。埋土は暗褐色から黒褐色粘質シルトを主体とする。

出土遺物

弥生土器が大部分であるが、他には須恵器1点、鉄滓1点などがある。

SD11出土遺物 (Fig.16)

29は弥生土器の短頸壺である。復元口径14.0cmを測る。胴部外面に丹塗り痕跡が残る。口縁部には1対の穴が穿たれている。弥生時代中期後半代のものか。

SD14 (Fig.14, PL 5)

調査区南側で検出した南からカーブを描いて東へ延びる浅い小溝で、中途で消滅する。SD01～03に切られる。溝幅は最大で60cm、深さは35cmを測る。溝断面は浅い逆台形を呈す。埋土は2層に分かれ、上層は暗褐色土を混入する黒褐色粘質土、下層は黒褐色粘質土である。

出土遺物 (Fig.16)

弥生土器片が大半であるが、土師器・須恵器片、黒曜石の剝片などをわずかに含む。

30～32は弥生土器である。30は壺の口縁部小片・復元口径は27.4cmを測る。口縁部は鋤先状を呈す。器壁は磨減が著しく、調整は不明。31・32は壺の口縁部細片。31はくの字状、32は逆L字状を呈す。

SD16

調査区南東隅で検出した北東から南西方向に走る溝。埋土は近世以降の灰色っぽい土である。外にも同方向に並走する溝がある。近世から近代にかけての畑の歴跡であろう。

出土遺物

弥生土器から古墳時代の土師器・須恵器、中世から近世にかけての陶器・磁器・鉄製品などが出土しているが、量は少ない。

不明遺構

SX15 (Fig. 17, PL 6)

調査時住居址と考えてSC15とした遺構である。調査区南西側で検出した。埋土は黒褐色粘質土で、包含層と変わらない土で、明確なプランや、掘り込みは確認出来ない。中央部に焼土・炭火物が集中する部分があり、その部分は浅く円形ピット状に窪む。その周辺に、須恵器の杯身・蓋・高杯・甕や不明土製品などが集中する。須恵器はIII b期のものが多い。

出土遺物 (Fig.18・19, PL 9)

33～44は須恵器。33～36は同形態の杯蓋。33は口縁部片で、復元口径14.0cm、器高4.7cmを測

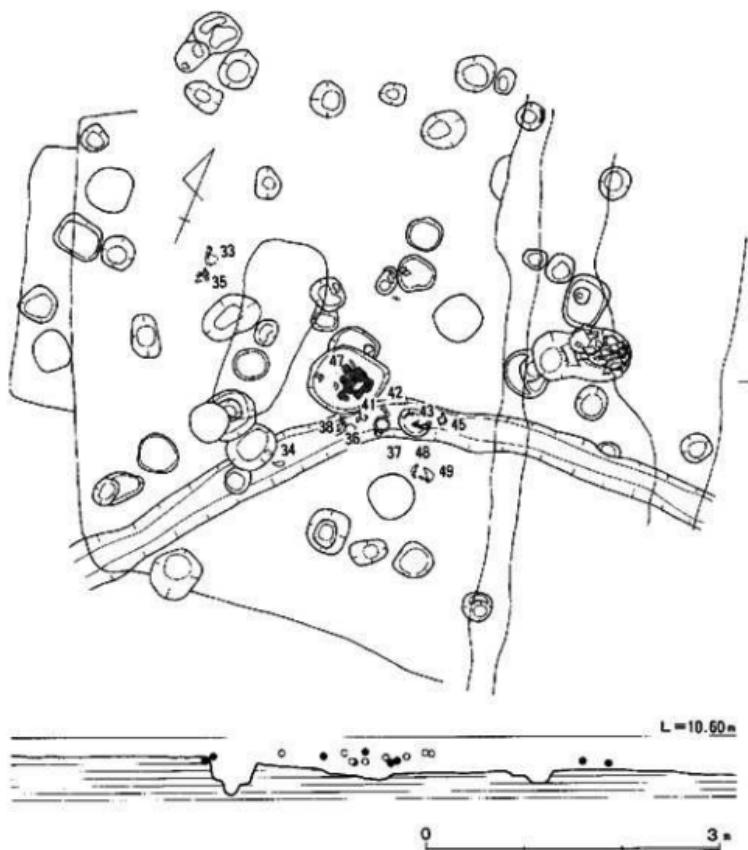


Fig. 17 SX15遺物出土状況 (1/60)

る。天井部と口縁部の境に浅い段が付く。34は1/4で、天井部は回転ヘラ削りで平坦に仕上げる。ろくろ回転は時計回り。35は1/2片で、復元口径13.8cm、器高4.0cmを測る。天井部は静止ヘラ削りで、メ状のヘラ記号が入る。調整は天井部外面以外、ナデである。36は口縁部を欠失する。天井部は回転ヘラ削りであるが、その後ナデたような感じでスベスベしている。天井部には36と同様、メ状のヘラ記号が入る。37~41は杯身である。37は完形。口径11.6cm、受部径14.2cm、器高4.5cmを測る。口縁部立ち上りの内傾具合は強い。体部2/3から底部は回転ヘラ削

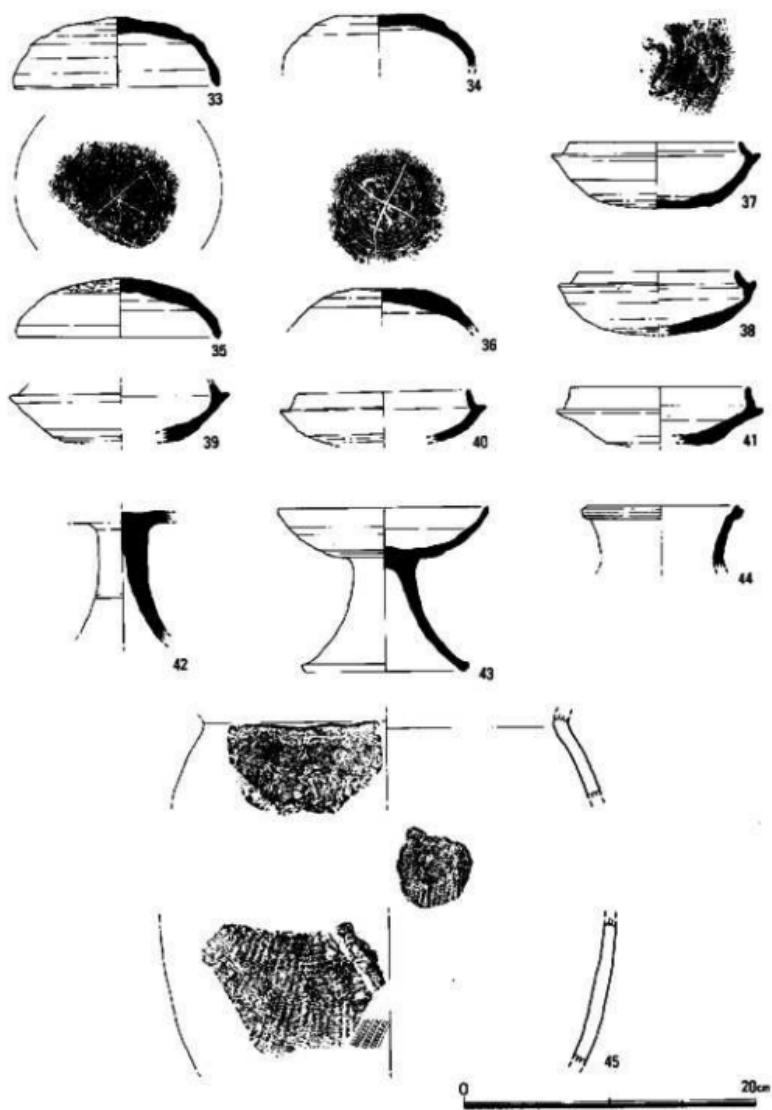


Fig. 18 SX15出土遺物 I (1/4)

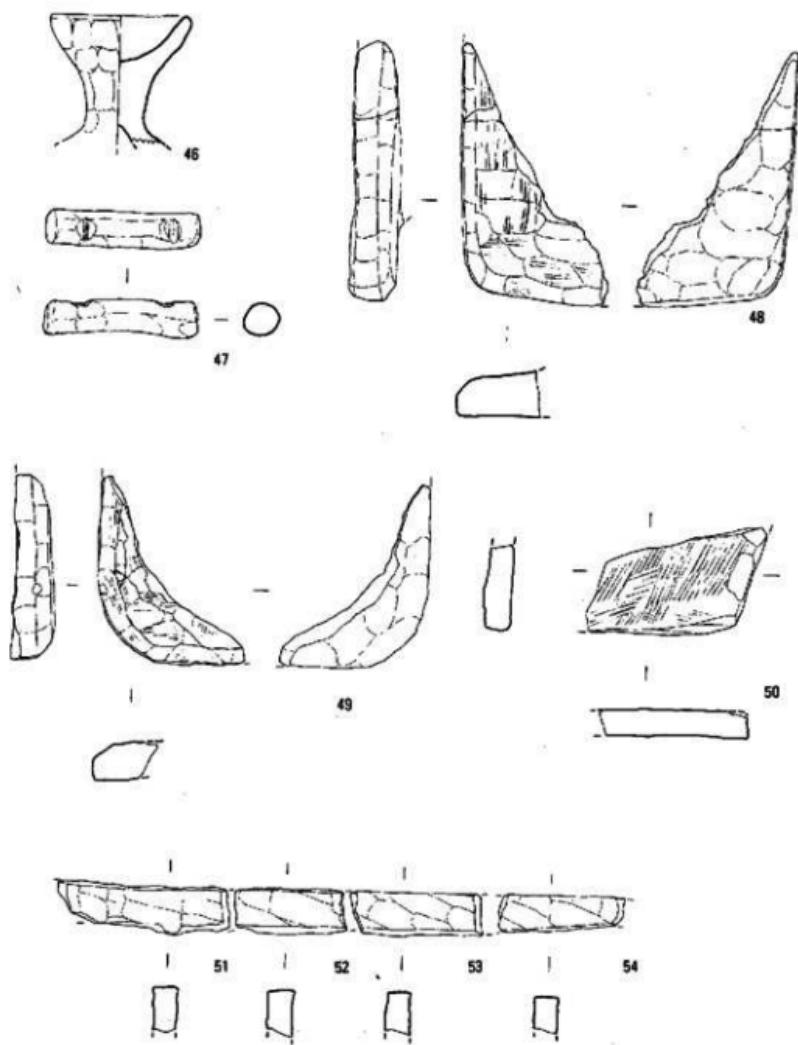


Fig. 19 SX15出土遺物II (1/3)

0 10cm

り、その他はナデ。内底面にはヘラ記号が入る。ろくろ回転は時計回りである。39も口縁部を欠失するが、ほぼ前述のものと、同様の形態。復元受部径15.0cmを測る。体部下半1/3から底部は回転ヘラ削りで、その他はナデ。40~41は37~39に比べ立ち上がりの内傾具合が弱い器形である。40は1/4片で、復元口径11.8cm、復元受部径14.0cmを測る。体部1/2から底部は回転ヘラ削り、その他はナデ。ろくろ回転は時計回り。41は1/3片で、復元口径12.4cm、復元受部径14.1cmを測る。底部はほぼ平坦である。体部下半から底部は回転ヘラ削り、その他はナデ。ろくろ回転は時計回りである。受部迄自然釉が重ねている。胎土は石英粒を多く含み、胎上は不良。42・43は高杯。42は脚筒部片である。43は楕円形の杯部にラッパ状に外へ開く脚部が付く形態である。復元口径12.0cm、器高11.2cmを測る。生焼けで器壁の磨滅は著しい。44は壺か提瓶等の口縁部小片で、復元口径11.0cmを測る。45は軟質土器の壺の体部片。外面は木目直交の叩き、内面はタテ刷毛痕がわずかに残る。胎土には石英粒を多く含み、色調はにぶい橙色を呈す。

46は高杯状のミニチュア土器である。口径7.0cm余を測る。器壁は磨滅するが、指おさえ仕上で、指圧痕が残る。47は棒状の土製品で、全長8.0cm、直径1.8cm、重さ32gを測る。断面は円形を呈す。器壁は磨滅が著しいが、指おさえ仕上で、赤色顔料が所々残っている。上面には2ヶ所浅い抉りが入る。48~54は埴輪の不明土製品である。48~49. 方形の板状の土製品。48はコーナー部分で、長辺13.2cm、短辺7.5cm、最大厚2.4cmを測る。内側は盛り上がる状態を示す。上面と左・下側辺はヘラ削りのち粗い刷毛、底面は指おさえ仕上である。底面以外丹塗りである。49は48より一通り小さいコーナー部分の破片で、長辺9.6cm、短辺7.5cm、器厚2.0cmを測る。48とほぼ同様の作りである。50も扁平な板状の土製品の破片。長辺8.5cm、短辺5.3cm、器厚1.4cmを測る。上面は斜めの粗い刷毛、内面はヘラ削りで、割れ口以外赤色顔料を塗る。上面には黒斑がある。51~54は同一個体の破片である。長さ5.8~8.7cm、厚さ1.3cmを測る。断面は長方形状を呈し、下側側辺は接合面とも考えられる。上面・底面及び上側辺はヘラ削りで、赤色顔料がわずかに残る。胎土は石英粗粒を含むが、質量感がある。当初家形の埴輪の一端とも考えたが、付近には古墳などもなく、埴輪と考えるのもやや問題がある。出土状態は底面を上にして方形状に形づくって検出された。祭祀に伴うものであろうか。

ピット出土遺物 (Fig. 20~23)

包含層と切り合っている為、包含層の遺物が混入し、遺物は比較的多い。埋上から黒色・黒褐色土系と暗褐色・黒灰褐色系の2種類のピットがある。大半のピットは土師器・須恵器の破片を含むが、弥生土器のみのものもある。

55~76は弥生土器。55はSP13出土。袋状口縁壺の口縁部1/6片。復元口径は18.5cmを測る。丹塗りである。56はSP17出土。口縁部が逆L字状を呈す壺の口縁部1/6片で、復元口径33.8cmを測る。口縁部下に一条の三角突帯が付く。胎土は石英粒を多く含む。57~58はSP18出土。57は支脚の底部片。復元底径10.0cmを測る。厚手の作りで質量感がある。胎土は石英粒を多く含む。

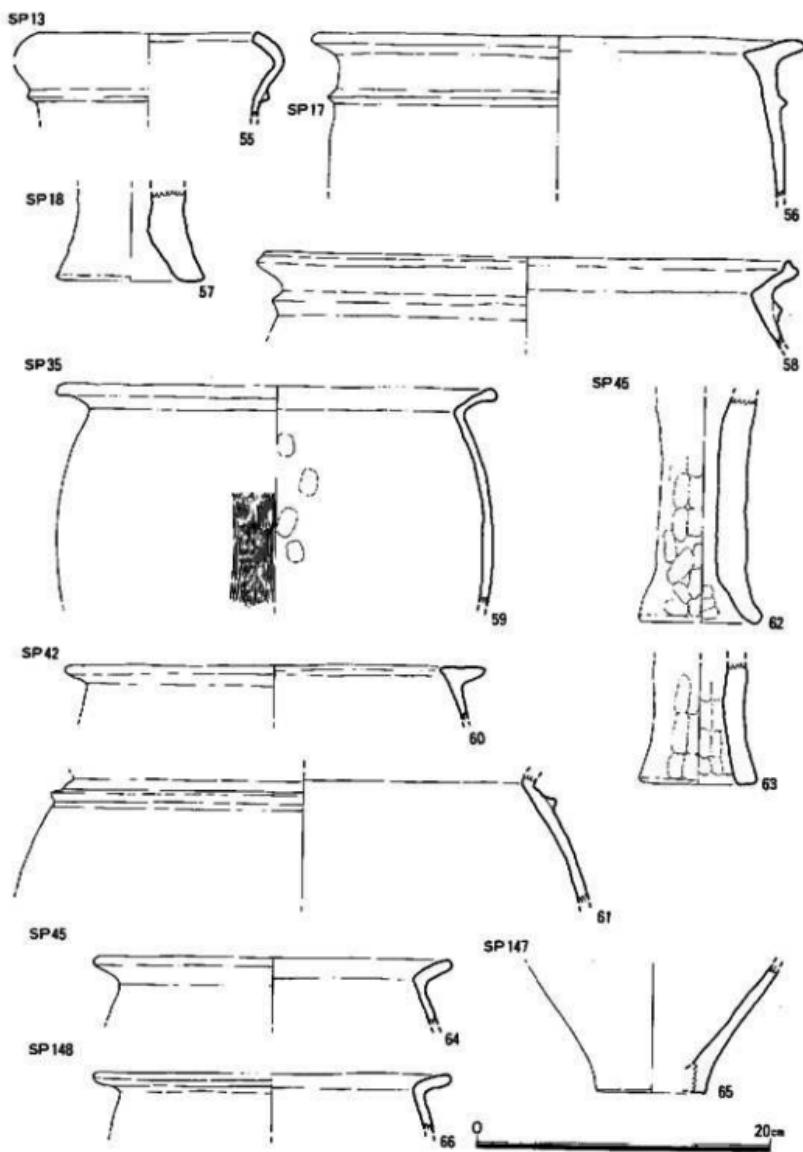


Fig. 20 ピット出上遺物I (1/4)

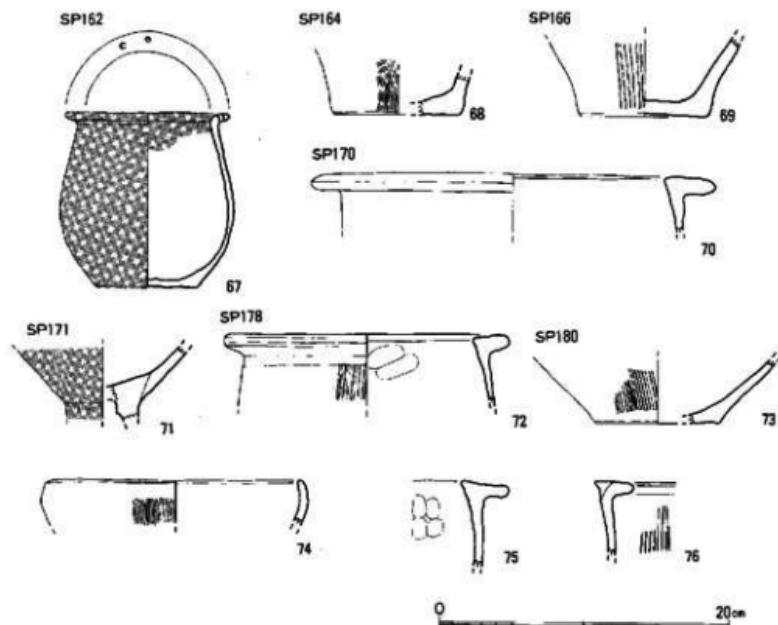


Fig. 21 ピット出土遺物II (1/4)

58は甕の口縁部1/12片で、復元口径27.0cmを測る。口縁端部を上方につまみ上げる。59はSP35出土。甕の口縁部1/2片で、復元口径30.0cmを測る。口縁部はく字状に外反し、端部は丸く膨れる。胴外面はタテ刷毛、内面は指圧痕が残る。60・61はSP42出土。60は甕の口縁部1/10片で、復元口径は28.6cmを測る。口縁部は逆L字状で、水平に外折する。内外面ナデで、胎土に石英微粒を多く含む。61は泰頭部1/8片。復元頭部径は31.4cmを測る。頭部には三角突帯が1条巡る。内外面ナデ調整。62~64はSP45出土。62・63は支脚の底部片である。62は中空状の細長い形態で、器壁はやや厚手である。底径8.3cmを測る。内外面指おさえ痕が残る。63は62に比して器壁は薄い。復元底径8.0cmを測る。指おさえ成形である。62・63の胎土は石英粒を多く含む。

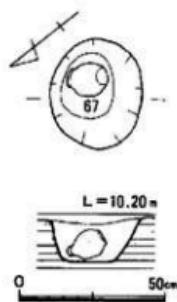


Fig. 22 SP162 (1/20)

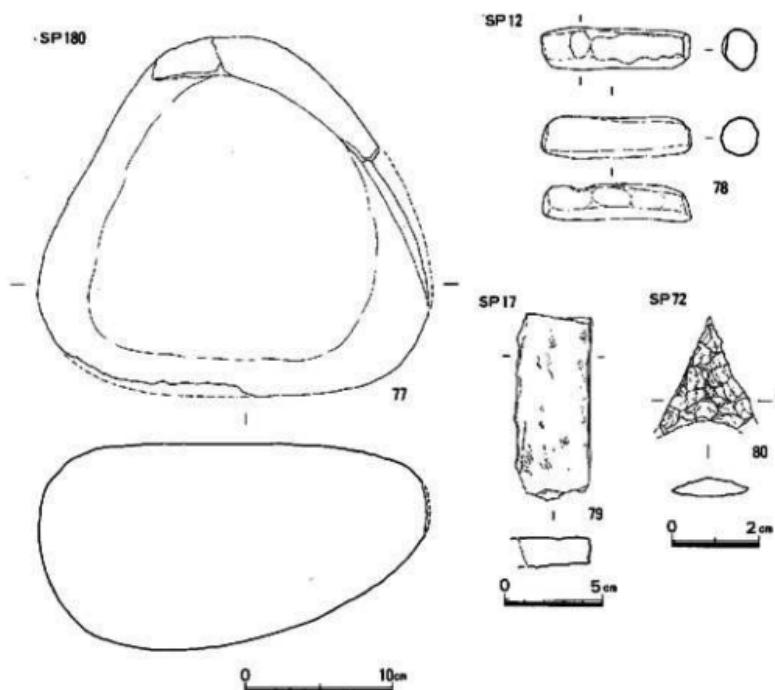


Fig. 23 ピット出土遺物III (2/3・1/3・1/4)

64は甕の口縁部1/10片。復元口径24.4cmを測る。口縁部はく字状を呈す。器壁は磨滅し調整不明。65はSP147出土の甕底部1/4片で、復元底径は5.0cmを測る。胎土に石英・金雲母を多量に含む。66はSP148出土の甕口縁部1/8片。復元口径24.4cmを測る。口縁部はく字状を呈し、器壁の調整は不明。67はSP162出土の月童無頸甕である。復元口径11.2cm、器高11.8cmを測る。胴部は下彫れの太鼓形を呈し、口縁部には2個1セットの孔が相対して穿たれている。体外面から口縁内面直下迄丹塗り、内面は指おさえのナデ。ピット底面にFig. 22のように据えられていた。地鎮の為か、根石代わりに使用されたのか、わからない。68はSP164出土。甕の底部1/4片。復元底径9.0cmを測る。胴外面はタテ刷毛、その他はナデ。69はSP166出土。甕の底部1/2片。復元底径8.4cmを測る。胴外面は粗いタテ刷毛、その他は指ナデ。胎土に石英粒を多く含む。70はSP170出土。甕の口縁部1/10片。復元口径27.6cmを測る。逆L字形の口縁部を持つ器形。調整は磨滅が著しく不明。胎土は石英・褐色・金雲母粒子を多く含む。71はSP171出土の高杯形部片。

底が深い器形で一見朝鮮半島の無文土器の高杯に似る。杯部内外面丹塗り、筒部内にはしづり痕が、その外面には指圧痕が残る。胎土は精良である。72はSP178出土。縁の口縁部1/8で復元口径19.6cmを測る。口縁部は逆L字形であるが、やや肥厚する。胴外面はタテ刷毛、内面に指圧痕が残る。73~76はSP180出土。73は壺の底部片で、復元底径8.4cmを測る。胴外面はタテ刷毛、その他はナデ。胎土に石英・金雲母の微粒を多く含む。74は鉢の口縁部1/6片で、復元口径は17.4cmを測る。体外面はタテ刷毛、その他はナデである。75は中形の壺口縁部小片で、口径は復元しがたい。口縁部は逆L字形を呈す器形。内外面ナデで、内面には指圧痕が残る。胎土は石英粒を多く含む。76も中形の壺口縁部小片で、75とはほぼ同様の器形。胴外面には粗いタテ刷毛、その他はナデ。

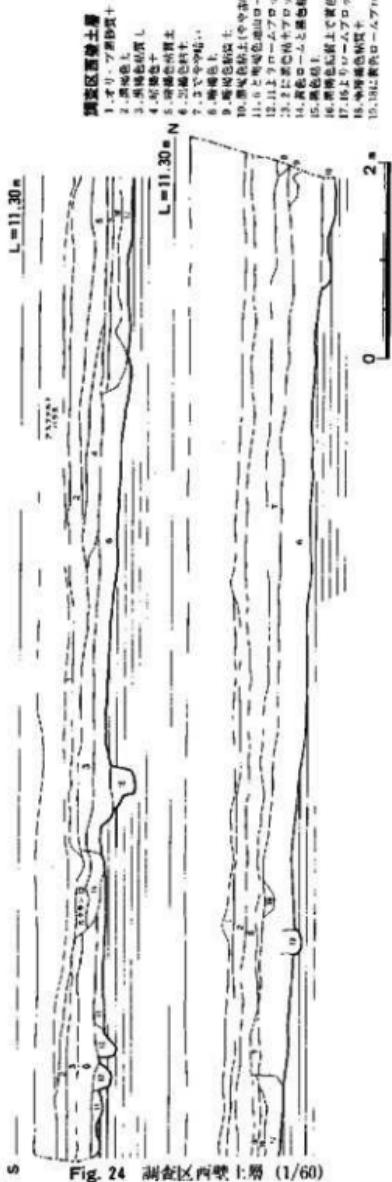
77はSP180出土。台石で根石がわりに使われたと考えられる。平面は丸いおむすび形を呈す。現存長26.6cm、最大幅24.5cm、最大厚14.1cmを測る。上面は平坦である。石質は花崗斑岩である。78はSP12出土の異形の棒状土製品である。全長7.6cm、直径1.6~2.0cm、重さ30gを測る。断面は円形を呈し、上面には浅い抉りが入る。SX15出土の46とはほぼ同様のものであろう。79はSP17出土。砥石の破片であるが、片刃石斧を再利用したものと思われる。3面を砥面として利用。石質は頁岩である。現存長8.9cm、最大幅3.5cmを測る。80はSP72出土。黒曜石の石鐵である。二等辺一角形状を呈し、基部の抉りは浅い。先端と基部端部を欠落する。現存長2.5cm、最大厚0.5cmを測る。

包含層の調査 (Fig. 24~29, PL 7 · 10)

包含層は調査区西側を中心に、地山の傾斜を覆うように存在する。厚さは最大で50cmを測る。包含層は上・下2層に分かれる。上層は暗褐色粘質土、厚さは10~20cm、中世の遺物を含む。下層は黒褐色粘質土で、厚さ30cm前後を測り、上層に比べて厚い。中世の遺構は下層の上面で検出した。

調査では都合上、包含層上層を重機で掘り下げ、以下の下層を人力掘削した。下層は厚みがあったため、2段階で掘り下げ、それぞれ上半・下半として遺物を取り上げた。包含層に含まれる遺物は大半が弥生土器であるが、上半には須恵器もわずかに含まれている。弥生土器は大半が中期後半頃のものである。他に石器類が若干出土している。

81は須恵器の杯身片である。復元受部径15.0cmを測る。器壁はやや磨滅する。焼成はあまり。82は土師器の鉢の2/3片である。底部は丸底で、口縁部が短く軽く外反する器形。復元口径13.4cm、器高5.8cmを測る。体底部外面はヨコ又は斜めの細い刷毛、その他はナデで指圧痕が残る。胎土に石英粒を多く含む。83は櫛の把手である。調整はヘラナデで、先端に指おさえ痕が残る。84~92は弥生土器である。84は鉢口縁部1/6片。復元口径13.6cmを測る。口縁部は直立し、丸くおさめる。調整はナデで、胎土は石英粒を多く含む。85は弥生中期後半の袋状口縁壺の口縁部1/4片。復元口径17.0cmを測る。器壁は磨滅し調整は不明。86は櫛先状の口縁を持つ壺の1/8片。



復元口径35.6cmを測る。器壁は磨滅し調整は不明だが、丹塗りの痕跡が残る。胎土に石英粒を多く含む。87は蓋のつまみ部片で、つまみ部径4.8cmを測る。器壁はやや荒れるが、外面はタテの粗い刷毛。つまみ部には指圧痕が残る。胎土には石英・金雲母微粒を多く含む。88は器台1/2片で、それぞれの破片を接合した。復元口縁径9.4cm、復元底径13.0cmを測る。器壁の磨滅がひどく、調整は不明。胎土に石英粒を多く含む。89は丹塗りのグラス形の土器である。口径8cm弱を測る。コップ形の杯部にラッパ状に聞く脚部が付く。ナデ仕上で杯部内面と脚部には指おさえ痕が残る。胎土は石英粒を若干に含む。類例を見ない器形である。90は器台の底部1/4片で、復元底径11.0cmを測る。外面は粗いタテ刷毛、内面は指おさえ後ナデである。胎土に石英粒を多く含む。91・92は蓋の口縁部片である。胴外面はタテ刷毛、胎土に石英粒を多く含む。92は1/4片で、復元口径22.0を測る。器壁は荒れ、調整は不明だが、内面に指おさえ痕が残る。81~88迄が下層上半、89~92が下層下半出土である。

93~104が下層下半の出土地点を記録し取り上げた遺物である。93は上師器の楕円の鉢で、復元口径13.0cm、器高6.2cmを測る。底部は右方向へのへら削り、その他は磨滅がひどく、調整不明。94は袋状口縁壺の1/4片。復元口径14.5cmを測る。器壁は磨滅し、調整不明。95は壺の口縁部1/6片で、復元口径23.6cmを測る。縮った頭部から外へや聞く口縁部が付く。頭部には1条の三

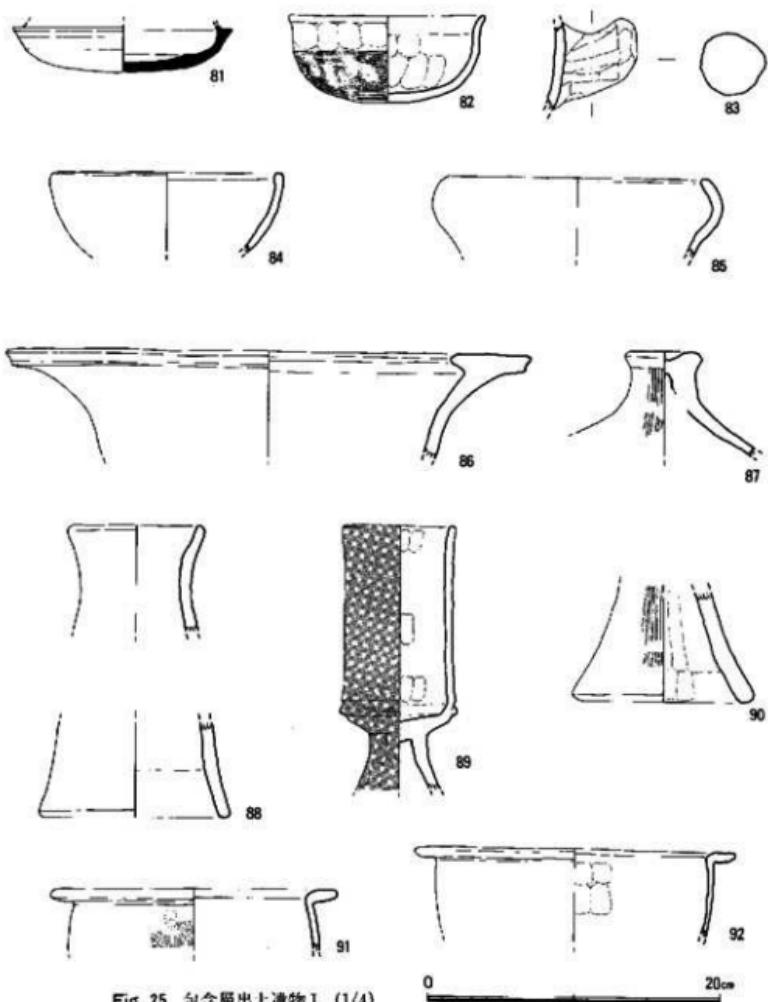


Fig. 25 包含層出土遺物 I (1/4)

角突帯が付く。外面は丹塗り。内面には指おさえ痕が残る。胎土に石英粒を多く含む。97は鉢の口縁部1/4片で、復元口径17.0cmを測る。口縁部はほぼ直立し、口端部が丸くおさまる。器壁の崩滅はひどく、調整は不明。胎土に石英粒を多く含む。98は高杯の脚部片。内側にしづり痕

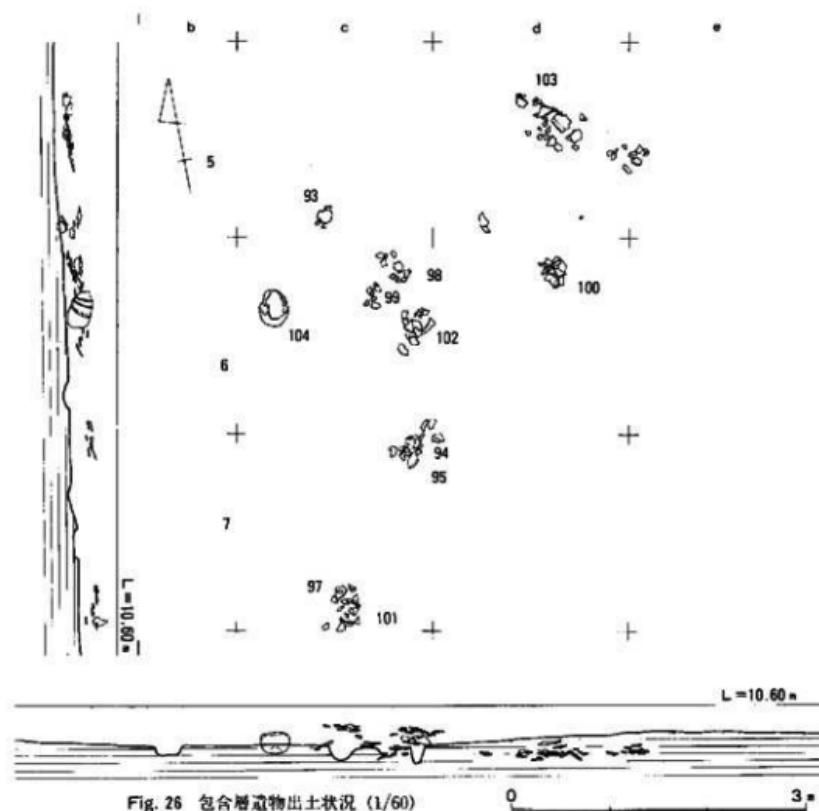


Fig. 26 包含層遺物出土状況 (1/60)

0 3

がある。器壁は磨滅が著しいが外面は丹塗りである。99は器台の口縁部1/2片で、復元口径10.6cmを測る。頸部のしまり方が弱い器形。器壁の磨滅は著しく、調整は不明。胎土に石英粒を多く含む。100~102は中形の甕で、いずれも同形態である。100は1/2片で、復元口径28.6cmを測る。く字状に外反する口縁部で、やや肥厚する。器壁の磨滅は著しく、胴外面の調整は不明。内面はナデ。胎土に石英粒を多く含む。101は1/2片で、復元口径27.2cmを測る。外面は粗いタテ刷毛。内面は指おさえのちナデ。102は口縁部1/2片で、復元口径28.0cmを測る。器形はゆがみがやや著しい。器壁の磨滅はひどいが、胴外面の調整は、斜めの刷毛目がかすかに残り、内

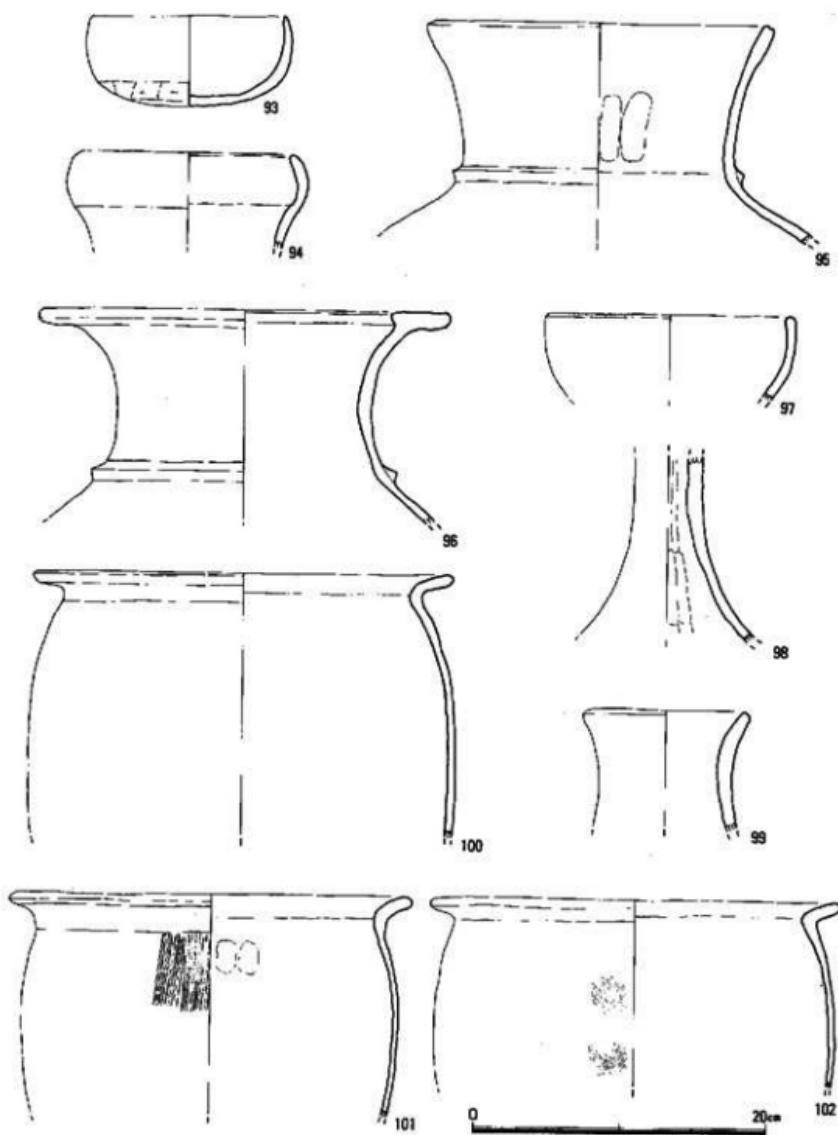
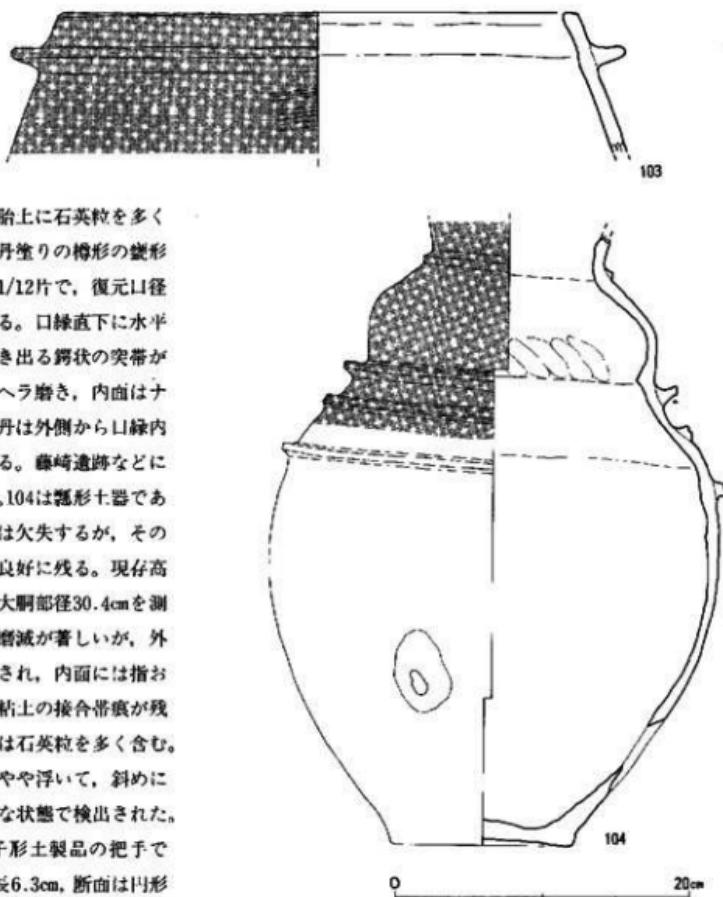


Fig. 27 包含層出土遺物Ⅱ (1/4)



面は不明。胎上に石英粒を多く含む。103は丹塗りの櫛形の變形上器口縁部1/12片で、復元口径35.2cmを測る。口縁直下に水平に細長く突き出る鉤状の突帯が付く。外面へラ磨き、内面はナデである。丹は外側から口縁内面迄塗られる。藤崎遺跡などに類例がある。104は櫛形土器である。口縁部は消失するが、その他は比較的良好に残る。現存高42.6cm、最大胴部径30.4cmを測る。全体に磨滅が著しいが、外面は丹塗りされ、内面には指おさえ痕が、粘土の接合帶痕が残る。胎土には石英粒を多く含む。地山面よりやや浮いて、斜めに倒れたような状態で検出された。

105は杓子形土製品の把手である。現存長6.3cm、断面は円形で直径1.8~1.9cmを測る。指おさえのちナデ仕上で、色調は黒

色を呈す。106は土器片利用の紡錘車である。直径4.0cm、厚さ0.8~0.9cm、孔径0.6cm、重さ14gを測る。土器片を丸く打ち欠いて利用している。107は石鎌又は石剣の破片である。現存長5.1cm、最大幅4.5cm、最大厚0.9cmを測る。全面に研磨を加え、刃部を研ぎ出している。108は小形の叩石で、長さ6.5cm、幅5.2cm、厚さ4cmを測る。断面は橢円形状である。上下両端部に使用痕が残る。石質は砂岩で、やや磨滅する。109は台石で、直徑13.6cm、最大幅11.8cm、最大厚

Fig. 28 包含層出土遺物III (1/4)

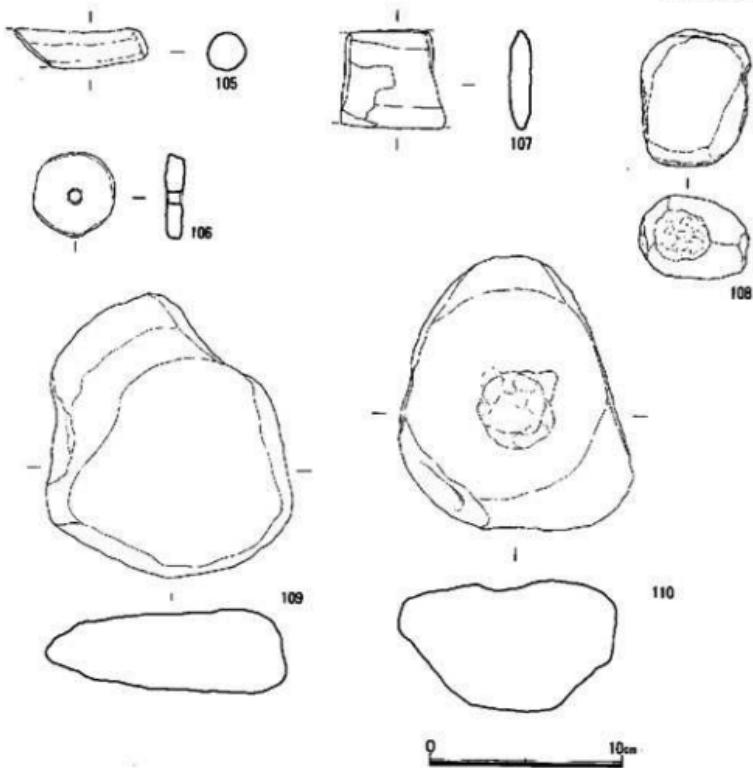


Fig. 29 包含層出土遺物IV (1/3)

さ4.4cmを測る。上面は平坦である。石質は花崗岩。110は叩石である。上面に使用による痕跡。その他は擦りである。最大長13.0cm、最大幅11.3cm、最大厚6.2cm、重さ1110gを測る。底部はやや不安定である。105・108は上層、それ以外は下層出土である。

表土出土遺物 (Fig.25, PL)

25は重機による表上除去中作業掘り下けたものである。宝塔・宝鏡院塔類の相輪部分と考えられるが、かなり様式が簡略化されている。残存長22.6cmを測る。表面は欠損、欠落が著しいが、上半には九輪らしき条溝、その下に諸花・伏鉢らしきものもある。基部にはさし込み部が付いている。砂岩製である。

造構面出土遺物 (Fig.30, PL 9)

111は造構面から出土したサヌカイト製の石器である。石刃状の縦長剣片の1側面にプラン

ティング状の急角度の連続する調整剥離を施している。先端は右側邊にも2~3回の剥離を加えており、意図的に尖らせている。この部分には幅1.5mm、長さ8mmの縦状剥離が認められる。

4. 小 結

当調査区で検出した遺構は、弥生時代、古墳時代、古代、中世の4時期に亘る。

弥生時代はSK06がある。SK06は遺物から見て、中期後半代が考えられる。調査区の東側台地部の第3次・51次地点には、該期の住居址群・井戸などが検出されており、当地の東側に中期から後期初め頃の集落が広がる事が確認されている。

古墳時代には、SC10・SX15などがある。SC10は出土した上師器の甕の形態から見て古墳時代中期以降のものである。SX15の須恵器は小田編年のIII b期のものが多い。SX15は祭祀遺構と考えたいが、玉類などの祭祀に伴う明瞭な遺物がなく、今一步、きめてにかける。

古代はSE05がある。土師器の杯の形態から、平安時代初期の9世紀前半代が考えられる。この時期の井戸は未報告であるが、東側の第124次地点でも2基検出されている。

中世は溝SD01~03、木棺墓SK07、火葬墓SK08がある。SD01~03は瓦質土器の火舎などから16世紀代である。SK07は白磁碗の形態が12世紀前半代のものであり、古くてもそれ以前のものでない。この種の中国産磁器を副葬する墓は、当遺跡群内では数ヶ所確認されている。SK08はSD01~03下で検出されており、それ以前の時期である。

掘立柱建物の時期は、いずれも時期を決めうる遺物がなく、決定打に欠ける。しかし、柱穴掘方に上師器・須恵器片を少量含む事や、SB09が6世紀後半代のSX15を切る事から、それ以降であり、中世の遺物を含まない事、柱穴埋土の色などから考えて、下限は古代でおさえられるであろう。

谷に堆積した包含層の時期であるが、出土している弥生土器群は中期後半から後期初頭のものであり、東側集落とは同時期である。丹塗りの瓢形土器や樽形土器は一般に祭祀に伴うものと考えられている。当遺跡群では第3地点の2号井戸¹から出土している。明確な遺構は伴わないものの、何らかの形で東側集落からの祭祀が行われたのであろう。包含層の遺物は古墳時代後期迄のものを含み、弥生からは古墳時代にかけて、次第に堆積し、包含層を形成していくのであろう。

註1 他地点として第3・49・56・77・80・101次地点などがある。

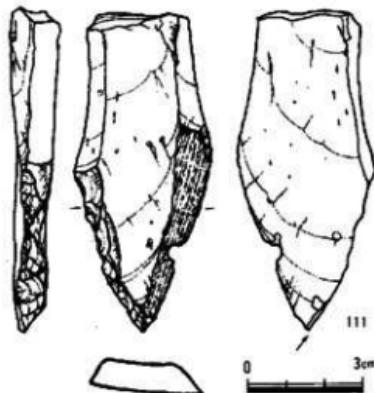


Fig. 38 遺構面出土遺物 (2/3)



(1)第154次調査区全景（南西から）



(2)同（東から）

PL. 2



(1)SC10 (東から)



(2)SC20 (東から)



(3)SE05 (南から)



(4)調査区西壁土層 (東から)



(1)SK06 (北から)



(2)SK07 (東から)



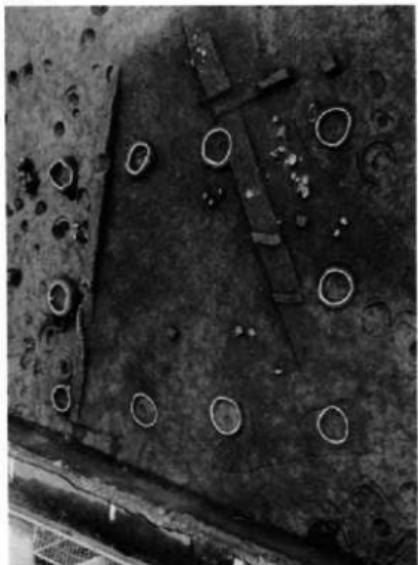
(3)SK08 (西から)



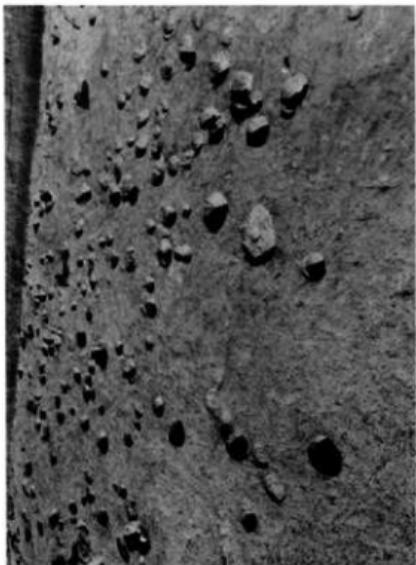
(4)同完掘状況 (西から)

—第154次調査—

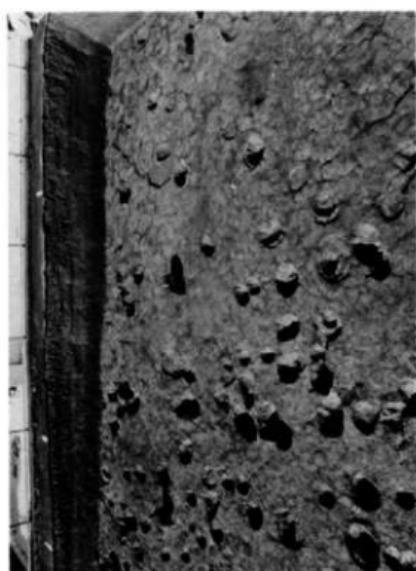
PL. 4



(1)SB09 (南から)



(2)SB17 (東から)



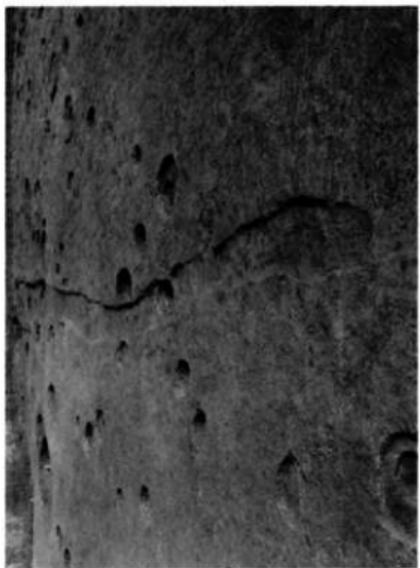
(3)SB18 (東から)



(4)SB19 (北東から)



(1)SD01~03 (南から)



(2)SD04 (南から)



(3)SD14 (東から)

PL. 6



(1)DSX15 (東から)



(2)同遺物出土状況



(3)同遺物出土状況



(4)焼土面 (西から)



(1)包含層遺物出土状況（西から）



(2)同上



(3)遺構面遺物出土状況



(4)SP162遺物出土状況（北東から）

— 第154次調査 —

PL. 8

SC 10



2



1

SB 09



24

SK 06



4

SK 07



|



9



10



11



12



13



14

SE 05



16



17

SD 02



|



21

SD 01



18



19



22



20



21



23

表土



25

住居・溝・土坑出土遺物



SX15・透構面出土遺物

PL. 10

SP 35



59

SP 162



67

SP 45



62

SP 12



78

包含層



82



93



88



89



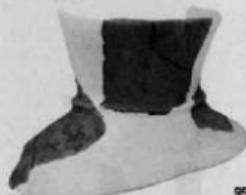
87



98



94



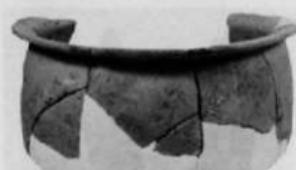
95



96



103



94



105



106



104

包含層出土遺物

第3章 第159次調査(調査番号9027)

1. 調査に至る経過

今回の調査は平成2年5月30日、福岡市早良区小田部3丁目251地内において鉄筋3階建ビル建設の計画が有り、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に事前審査の申請がなされた事により始まる。埋蔵文化財課では申請地が有田遺跡群内であるため同年6月20日試掘を実施し、6世紀中頃の竪穴住居址を検出した。

申請者と設計変更等で現状での保存が可能か協議を重ねたが困難であるという事であり、本調査を実施する事となった。

調査は同年8月7日から9月11日まで行なわれた。調査面積は185m²である。

尚、調査に際し、申請者株式会社ヒット・ワイには多大な御理解と御協力を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

調査番号	9027	造跡略号	ART-159
調査地地籍	早良区小田部3丁目251	分布地番号	原82
開発面積	207m ²	調査実施面積	185m ²
調査期間	90. 08. 07~90. 09. 11	事前審査番号	2-2-86

2. 調査体制

調査委託 株式会社ヒット・ワイ

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 片口雄哉

調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝（当時） 埋蔵文化財課第1係長 飛高憲雄

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 中山昭則

調査担当 埋蔵文化財課第1係 加藤良彦

調査協力 金子由利子、柴田常人、倉川ハルエ、松井フユ子、松尾鈴子、松尾キミ子、門司弘子、瀬戸啓治、黒田和生、英 豪之

資料整理 平川敬治（九州大学）、木村厚子、横崎多佳子、能美須賀子



Fig. 31 調査区位置図 (1/4,000)

3. 調査区の位置と概要

申請地は有田台地の中央部、北西から南東へ細長く開折する谷部を望む南側緩斜面に位置する。標高約10m。周辺では第14次^(E1)・103次^(E2)・117次^(E3)調査が行なわれ、近世井戸・土壌・溝が検出されている。

現況は宅地で、表土下30~50cmで赤褐色の鳥栖ロームの造構面に達するが、旧地形は南に緩傾斜しており調査区南側には暗褐色上の包含層が残存する。

家屋解体後の処理を区内で行なっているため攪乱が著しいが、検出した遺構は古墳時代後期の堅穴住居址4軒、奈良時代の大型建物を含む古墳時代後期から律令期にかけての掘立柱建物4棟である。周辺では近世の遺構しか検出されておらず今回の調査で台地稜線部を中心に広がる古墳時代及び奈良時代集落が西に100m程広がる事が確かめられた。遺物は、縄文時代の黒曜石製の石鏃2点と剝片数点、古墳時代後期から奈良時代にかけての土師器・須恵器を中心に総量でコンテナボックス1箱分検出した。

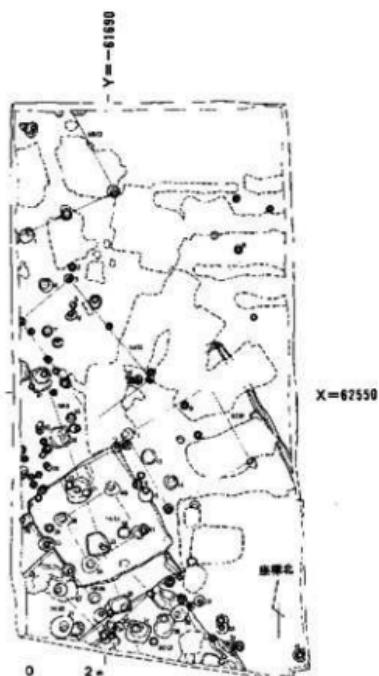


Fig. 32 第159次調査区遺構配置図 (1/200)

4. 遺構と遺物

豎穴住居址

SC01 (Fig. 33, PL.12)

調査区南西部で検出した方形の豎穴住居址でSC02を切っている。3.9×3.5mで南北が若干長く、方位をN-34°Wにとる。北壁の中央部に竈をもうけている。1度建て替えが行なわれており、上面で壁の高さ6cm、下面で12cm程で著しい削平を受けている。

主柱穴は上・下とも4本で、上面で柱間1.95×1.8mでプランとは逆に東西方向が若干長い。柱痕跡は18~25cmで深さは45~50cm。掘り方は径50~60cmを測る。下面是上面より柱間が短かく1.55×1.3mで同じく東西方向が長い。竈との位置関係と思われる。柱痕跡は15~18cmと細い。掘り方も小さく28~35cm程で、よりがっしりしたものに建て替えた様である。南側壁近くに土師器甕が散布している。貼床は6cm程で暗褐色粘土に地山ロームを1/2程含み、よくしまっている。

竈は0.5×1.15m程の方形に暗褐色土と青白色粘土で整形されているが、焚口部分を掘立柱建物SB01に切られている。内部の壁近くに土師器甕が散布している。住居本体の建て替えとともに竈も10~15cm程かさ上げされ、再構築されている。

出土遺物 (Fig. 38, PL.15)

遺物は上下両面から検出されているが量は上面が多い。上下間に大きな時期差はない。

04は須恵器高杯の杯部で受部径15cmで立ち上がりが高く、内傾する。体部中位まで回転ヘラ削りが施される。色調は青灰色で焼成良好。05は同じく須恵器高杯の杯部の小片で立ち上がりが高く、05程は内傾しない。体部中位までが回転ヘラ削りでこれの下半がカキメ調整である。色調は外面灰~黒灰色、内面青灰色で焼成良好。06は須恵器甕の体部の小片で2条の沈線間に波状文が施される。色調青灰色で焼成良好。外面上半に灰がかぶる。07は須恵器広口壺の口縁部で薄手で口唇が若干肥厚する。口径15~16cm程で、内外面ともにヨコナデ。08は須恵器壺の口縁部と思われ、口唇外側が若干突出する。内外面ともにヨコナデが施され、色調は暗灰色で焼成良好。09は土師器高杯脚部で色調明赤褐色。胎土に石英粒を若干含む。器體が荒れ器面調整が不明瞭であるが外面はタテ方向のヘラナデと思われる。上部で径4.3cm。10は土師器甕で竈内出土。復元口径21cmを測る。色調外面暗褐色、内面黄褐色を呈する。胎土に石英粒を多く含む。外面はヨコハケ調整後ヨコナデ、内面はヨコナデで頭部下はケズリ調整である。09は軟質土器系の土師器甕の胴部小片で色調赤褐色、胎土に石英粒を多く含む。調整は外面が木目直交の平行タタキ、内面に平行弧線の当て具痕が残る。

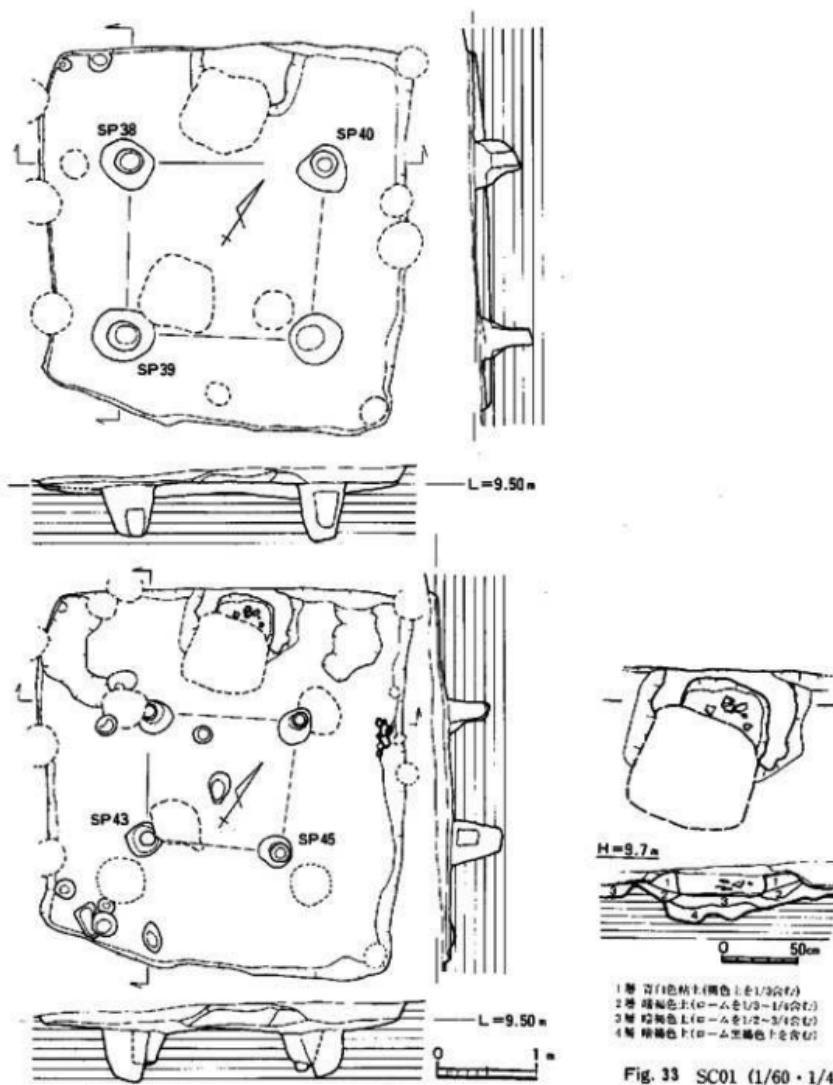


Fig. 33 SC01 (1/60・1/40)

SC02 (Fig. 34, PL.13)

SC02は調査区南西部に位置し、大半をSC01-03に切られ、遺構西半部は調査区外にある。方形の住居址で残存部で4.2×3.1mを測る。復元すると南北5m東西4m程の方形の竪穴住居になると思われる。遺構の残存は悪く深さ10cm前後である。北・東壁にそって浅い幅広のダラリとした壁溝が巡る。主柱穴は4本で、柱間は東西で2.4~2.1m、南北で2.1~2.25mでSC01同様東西に長くなる傾向が有る。軸はN-40°-Wにとる。柱痕跡は20~24cmで深さ30~35cmを測る。床面の大半をSC01に切られているため竈の位置を明確にし得ないが、北側壁溝の中央部で壁溝が離れる部分が有り、この位置に竈が設置されていた可能性が高い。

遺物 (Fig. 38, PL.15)

遺物は少なく、土師器の甕が若干出土しているが図示可能なものは12のみである。

12は北側の壁溝内で検出された。土師器の甕で口唇部と胴下半を欠く。やや薄手の器壁で器面が荒れ調整が不明瞭であるが、外面頸部下は叩き調整後タテ方向のハケ調整が施されている様で、内面はタテ方向のケズリ調整である。頭上半はヨコナデである。色調は外面で黄褐色~灰白色、内面で淡赤褐色を呈する。胎土には石英粒を多く含む。

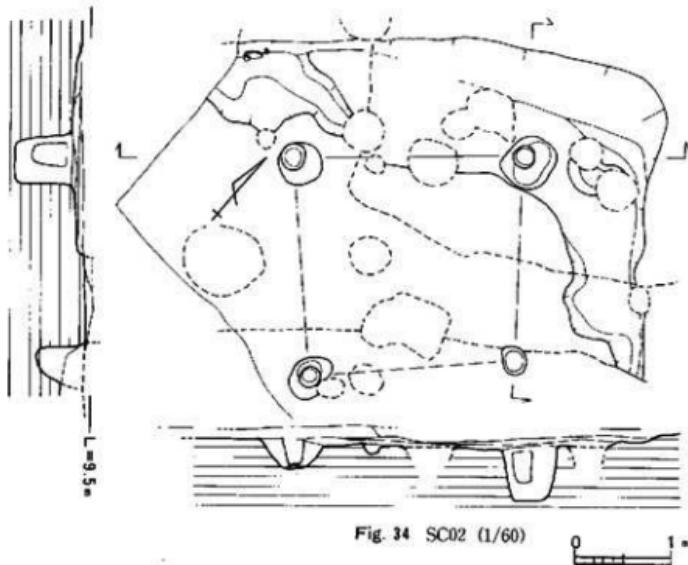


Fig. 34 SC02 (1/60)

SC03 (Fig. 35, PL.13)

調査区南端中央部に位置する。SC02を切っている。遺構全体の1/4程の検出で大半が調査区外であるため全体が把握できないが、東壁南端部の焼土部分が竪と想定し、壁中央に位置すると仮定すれば一辺6m程の方形の竪穴住居址が想定される。軸はN-30°-Wにとる。

調査区南端でIH地形がゆるやかに傾斜する位置で包含層が残存しており、検出時に床面を掘り下げ過ぎたきらいが有るが、床面までの深さは20cmを測る。北壁の西端部と東端部に20cm程高い平坦面をつくる。それぞれ溝もしくは段で中央部と区画される。東端部はSC02の周辺溝を切り下げており明らかにSC03の一部を成しているが、東の壁の立ち上がりと南側の大半を擾乱で切られており、住居の東壁を明らかにし得ない。しかし、東側段は北端の溝の延長から3.1m程延びて内側に屈曲しており、この屈曲部分と住居址の北壁は直角の位置に有り、これを延長して住居の東壁を想定すると、 $1 \times 2.7m$ の三角形の平坦部が復元される。

全体が明らかではないため、主柱穴の認定は難しいが、SC01・02と同程度の大きさで、同程度の壁からの位置で想定するとSP35が適当と思われる。柱痕跡は25cm、深さ65cmと、01・02に近い。

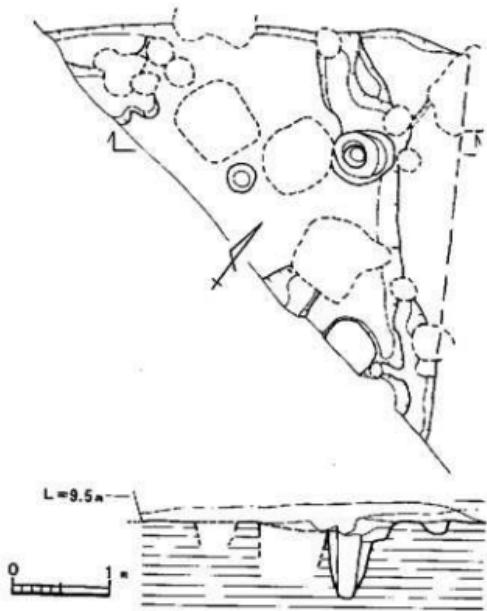


Fig. 35 SC03 (1/60)

出土遺物 (Fig. 38, PL.15)

出土遺物は少なく、土師器蓋の小片と須恵器杯蓋のみである。

13は須恵器杯蓋の小片で口径15cm程度。色調は黒灰～灰白色で焼成良好。口唇内面が若干段氣味にくばむ。14は木目直交のタタキを施す土師器蓋で、内面に平行弧線の当て具痕が不明瞭ながら見受けられる。色調は外面赤褐色。内面淡黄褐色を呈する。胎土に石英粒を多く含む。

SC04 (Fig. 36, PL.13)

調査区中央東側で検出した。残存は著しく悪く、周壁溝と主柱穴が残るのみで、周壁溝も擾乱や地山の削平で東部が残るのみである。

溝は幅18~32cm、深さ4cmで、N-36°-Wの方位をとって北で直角に屈曲する。この屈曲の延長と、SC01・02の主柱穴の位置を参照すると一ヶ所を擾乱で失しているが4本単位の主柱穴が想定される。柱間は東西で3.3m、南北で2.95mと東西方向が長いのもSC01・02に共通する。柱痕跡は径18~22cm、深さ25cmと深い。掘り方も他に比べ小さく径35~40cmである。

この柱穴と周壁溝の関係から住居の規模を復元すると、東西5.7m、南北6.1mの若干縱長の方形の竪穴住居が想定される。遺物はSP11から土師器の甕の小片が検出されたのみで時期を比定する明確な資料に欠けるが古墳時代後期に当たると思われる。

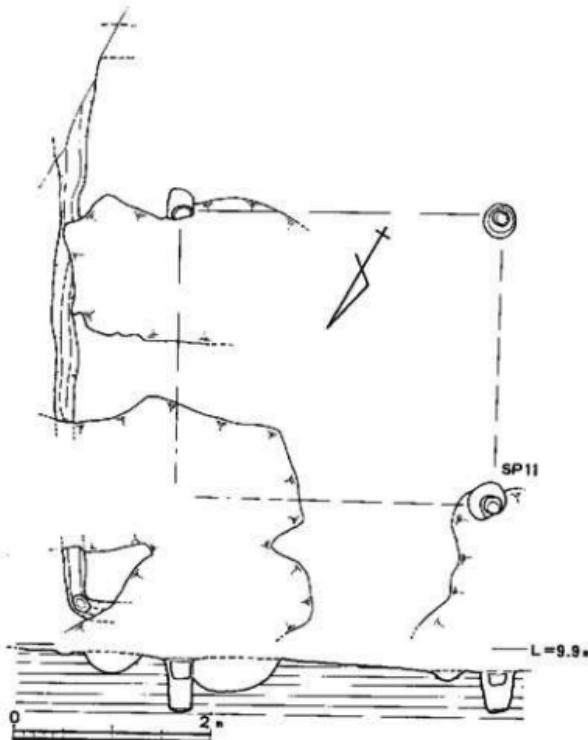
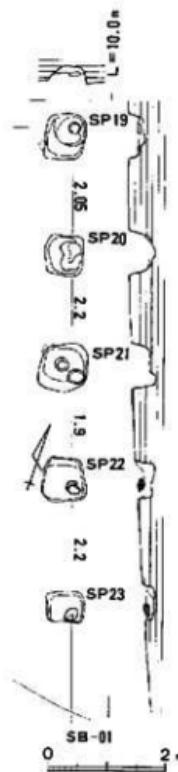


Fig. 36 SC04 (1/60)

**掘立柱建物****SB01 (Fig. 37, PL.14)**

SB01は調査区南西部で検出された大型建物で、SC01・02・03を切っている。建物の東端部のみの検出で南と西の調査区外に広がる。柱間は北からそれぞれ2.05, 2.2, 1.9, 2.2mを測る。方位はN-18°-Wにとる。SP19の延長は、2.5m有るが、これから2m前後の位置に該当する柱穴がなく、同様に東側にも見当たらないため、この位置から西に屈曲するものと思われる。検出当初はSP24がSP23から2.3mの位置に有り、SP23を南端にSP24へ屈曲する様想定していたが、他の掘方が隅丸方形であるのに對しSP24は円形でこれのみ異なっており、断面形もU字形で他の方形のものと異なっており、別個の柱穴と断定し、南端部はSP23の延長上に求めた。東西両方向にも柱穴は延びず側柱建物と思われる。

柱痕跡は径18~22cmで覆土は黒褐色土。掘方底面近くでしか検出できず、廃棄時に振り抜かれたものと思われる。SP22・23は径20~25cm程の河原疊を根石に据えている。

掘り方は65~85cm程の隅丸方形で深さは20~40cmを測る。覆土は上部が黒褐色から暗褐色で地山ロームを含んでおらず柱抜き取り後放置され自然に埋没した可能性がある。

出土遺物 (Fig. 38, PL.15)

遺物は各柱穴で検出しており、15~17は須恵器である。15は杯身の受

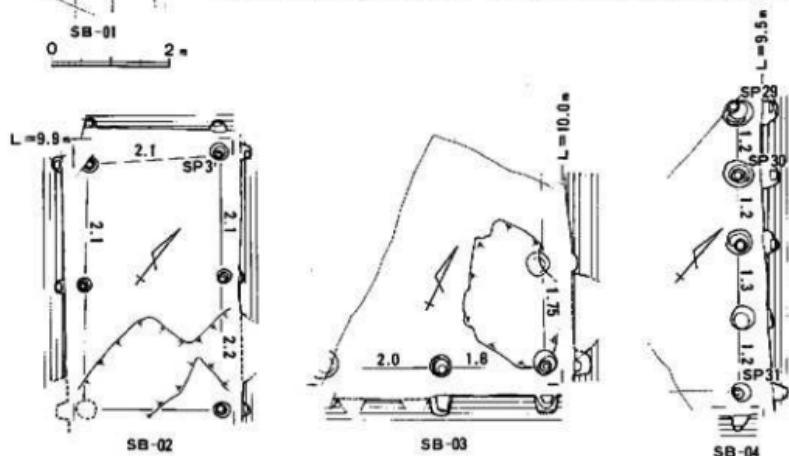


Fig. 37 SB01~04 (1/100)

け部で受け部径で14cm前後に復元される。14も同様で同じく14cm前後に復元される。17は杯蓋で、内外面ともにヨコナデ調整、体部外面上半は回転ヘラ削りが施される。18から20は土師器で、18は杯蓋。SP22の掘り方から出土。屈曲する口縁端を有するもので内外面ともにヨコナデ調整。色調は淡橙色で胎土は精良である。奈良時代である。19は杯の口縁部で内外面ともヨコナデ調整。色調は淡黄色で胎土は精良。20は甕の口縁部で口径は28cm前後と思われる。器面が荒れ調整が不明瞭であるが、口唇外面向下に指圧痕、内面頸部下はナナメ方向へのヘラ削りである。

SB02 (Fig. 37, PL.15)

調査区の中央西部で検出された。軸をN-38°-Wにとる。棟間1間(2.1m)、桁行2間(4.3m)の小型の建物である。

柱痕跡は径14~16cm、削平が著しく深さは15cm前後を残すのみである。掘り方径は22~30cmを測る。

SB03 (Fig. 37, PL.15)

調査区北西端部で検出した。大部分が調査区外に広がるが、2間(3.8m)×2間以上の側柱建物と思われる。軸をN-28°-Wにとる。

柱痕跡は径20~24cmでSB02同様削平が著しく深さは16~30cmである。掘り方径は35~38cmを測る。

SB04 (Fig. 37, PL.14)

調査区南西端部で検出。SC01・02・03を切っている。方位をN-41°-Wにとる。柱間の間隔が1.2~1.3mと狭いのが特徴的である。SP31の延長上と東側に該当する柱穴が無く、西に屈曲すると思われ、4間(4.9m)×1間以上の側柱建物となる。

柱痕跡は径20cm前後で深さは10~35cmを測る。掘り方は円形で径30~55cmを測る。

その他の遺物 (Fig. 38, PL.15)

住居址内及び柱穴から縄文時代遺物を検出している。

01は黒曜石製の鉋形旗で長脚部の一方を欠失する。最大長2.1cm、最大幅復元で1.7cm、最大厚4mmを測る。SC01の覆土中より出土。02も同じく黒曜石製の叫基の三角鉋でSC02の覆土中より出土。最大長1.6cm、最大幅で1.1cm、最大厚3.5mmを測る。03は使用痕を有する黒曜石削片で、SP14出土。左右両側からの剥離を行った後、上方からの一撃で剥ぎ取っている。両側縁に使用痕が有る。最大長2.6cm、最大幅で1.3cm、最大厚6mmを測る。

21は滑石製の白玉でSP42の掘り方から出土。外縁の一部を欠くが、径5mm、厚2mmで中央に径1.5mmの穿孔がなされている。古墳時代後期のものと思われる。

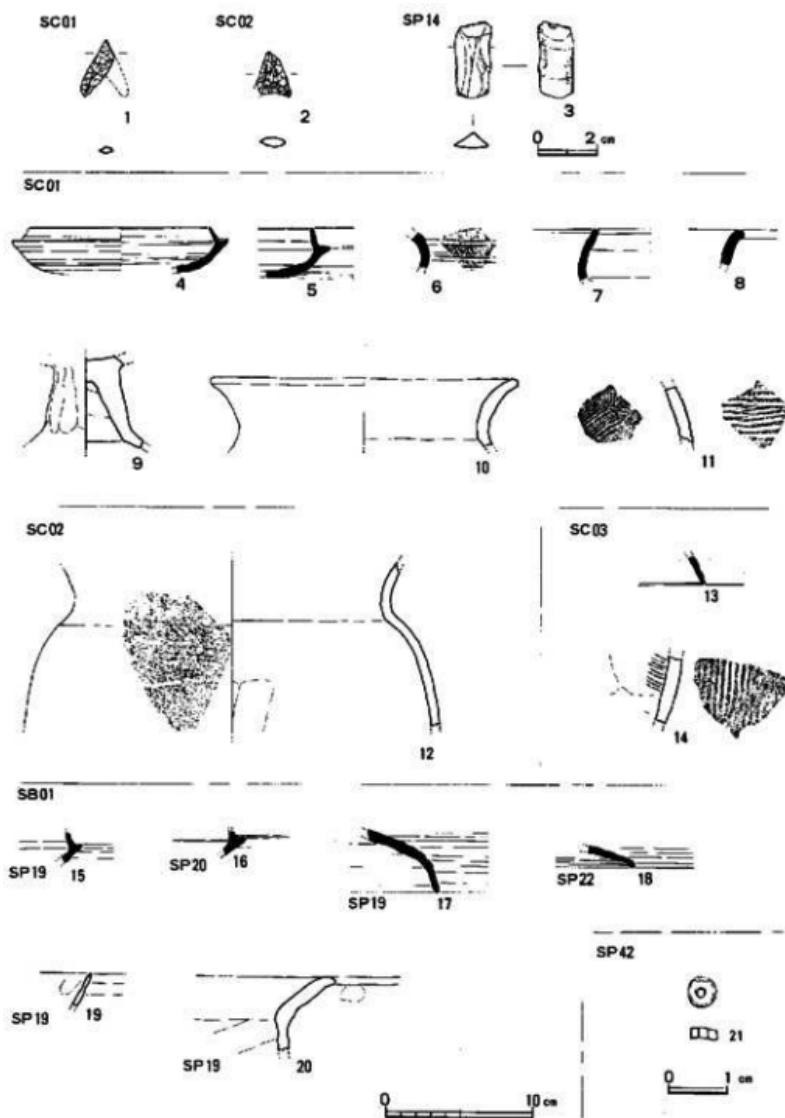


Fig. 38 出土遺物実測図 (1/1 · 1/2 · 1/4)

5. 小 結

1) 造構の検出はないが縄文時代の石器、剝片を検出している。有田台地でのこれに近い造構は第5次・116次調査で中期後半の掘立柱建物様のピット群が有るのみだが、各地点で旧石器時代のポイント・ナイフ型石器とともに多くの石器が検出されており、旧石器時代以来の良好な生活の場となっている様である。

2) 古墳時代後期、主にⅢA期からⅢB古相の時期を示す竪穴住居址を4軒検出した。近在200m程で同期の造構の検出はなく、52次^(註4)・124次^(註5)調査区等の台地陵線の中央の集落の西端がここまで広がっているか、小さな分集落と思われるが、今後の周辺の調査の成果を待ちたい。各住居の方位はN-30°~40°-Eと近似値を示すが、これは地形の等高線に沿ったものである。

3) 掘立柱建物を4棟検出した。いずれも側柱建物で、SB02~04のN-28°~41°-Wの北に方位をとるものとSB01のN-18°-Wの方位を取るものとの2グループに分けられ、前者は竪穴住居の軸とも近く地形の制約を受けたものと思われる。後者は奈良時代の遺物を検出し、方位は磁北に近く、入的な規制を受けたものと思われる。3a次^(註6)・124次・164次^(註7)調査で南北を幅6m程の側溝にはさまれた幅18m程の奈良~平安時代の道路が想定されており、これの規制を受けていると思われる。

4) 周辺の14次・103次・117次調査では18世紀以降の近世造構のみが検出されたが、今回は一つも検出されなかった。

(註1) 福岡市教育委員会「有田遺跡」1979

(註2) 福岡市教育委員会「有田・小田部10集」福岡市埋蔵文化財調査報告書212集 1989

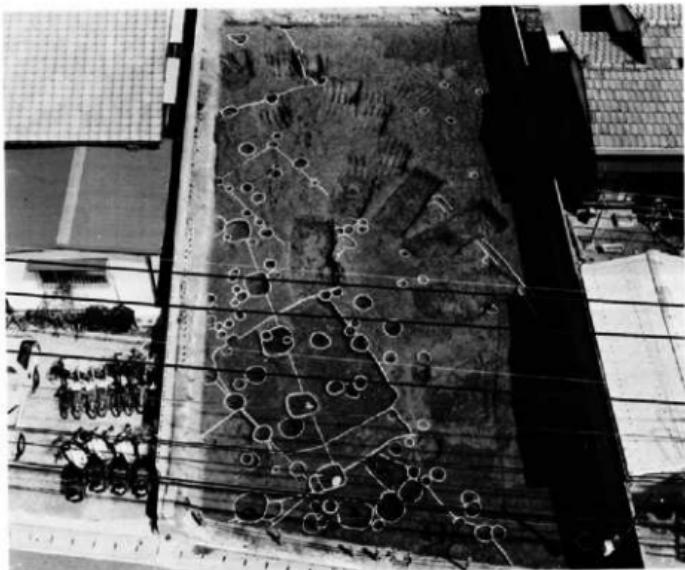
(註3) 福岡市教育委員会「有田・小田部8集」福岡市埋蔵文化財調査報告書155集 1987

(註4) 福岡市教育委員会「有田・小田部7集」福岡市埋蔵文化財調査報告書139集 1986

(註5) 福岡市教育委員会「有田・小田部9集」福岡市埋蔵文化財調査報告書173集 1988

(註6) 註3に同じ

(註7) 1991年調査



(1)第159次調査区全景（南から）



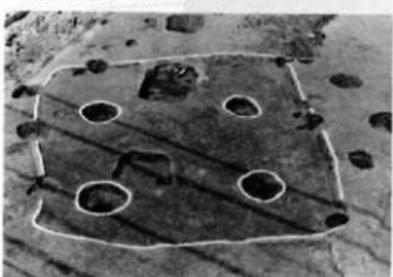
(2)第159次調査区全景（東から）



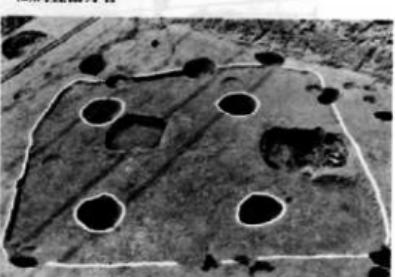
(1) 調査前状況（南から）



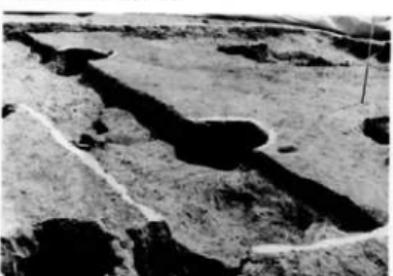
(2) 調査協力者



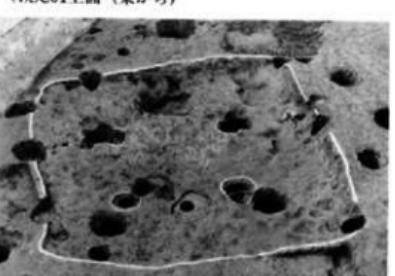
(3) SC01上面（南から）



(4) SC01上面（東から）



(5) SC01貼床断面（北東から）



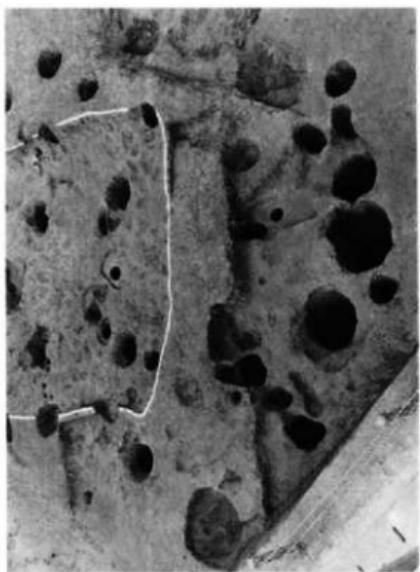
(6) SC01下面（南から）



(7) SC01発検出状況（南から）



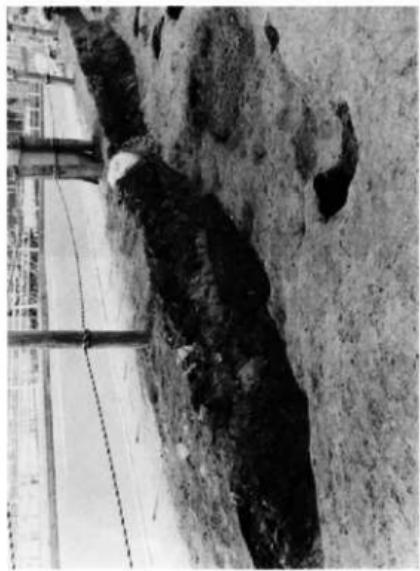
(8) SC01竪横断土層（南から）



(1) SC 02 (南面)



(2) SC 03 (南面)



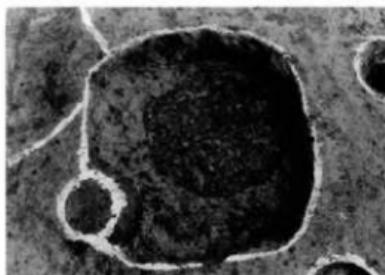
(3) SC 02・03 土壌面 (南面)



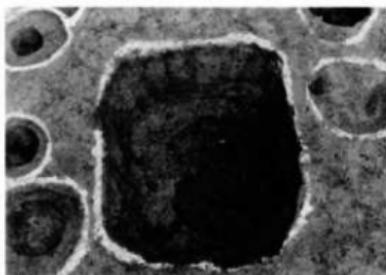
(4) SC 04 (南面)



(1)SB01・04 (南から)



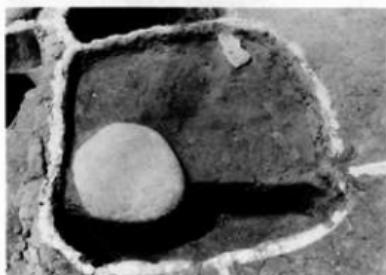
(2)SB01・SP19柱底 (南から)



(3)SB01・SP20柱底 (南から)



(4)SB01・SP21柱底 (南から)



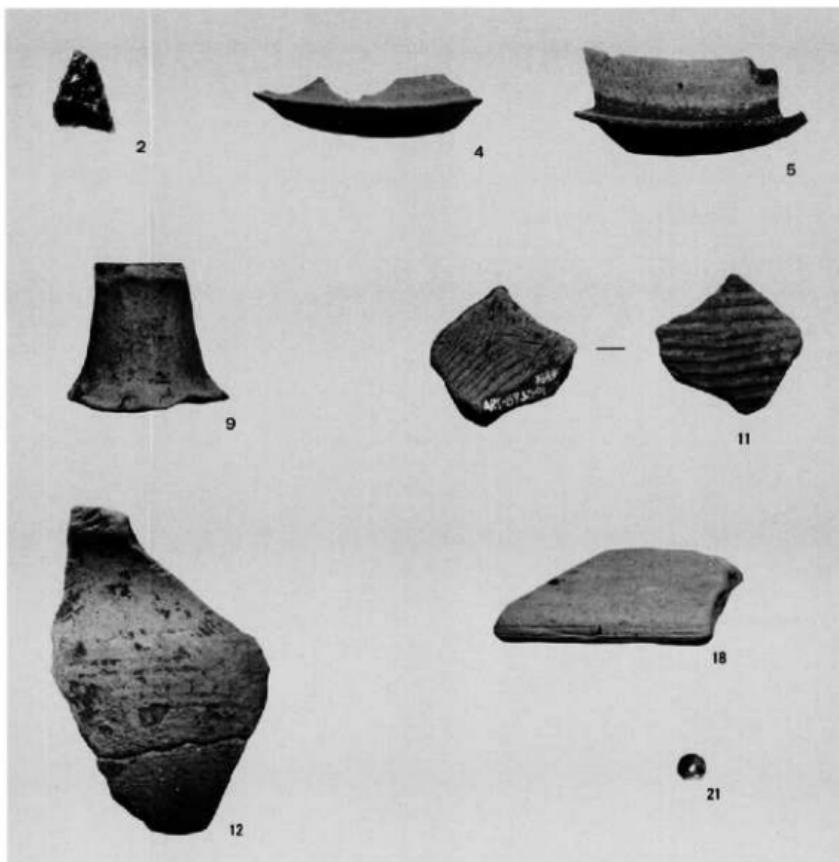
(5)SB01・SP23上層断面 (東から)



(1)SB02 (北東から)



(2)SB03 (東から)



(3)出土遺物

第4章 第163次調査

1. はじめに

1) 調査に至る経過

平成2年6月、近藤熟氏より共同住宅建設のため事前調査願いが提出されたのを受け、埋蔵文化財課で試掘調査を実施した。その結果、中請地の中央部から土壙、柱穴などが検出され、東側ではしだいに地形がドガリローム層上部、黒ボク質上などの斜面堆植物が遺存していた。

有田・小田部の遺跡群の調査は昭和41年の区画整理に伴う調査を契機とし、昭和52年からは個人の住宅建築等の小規模の開発にも対応することになった。また近年の有田遺跡群の調査は開発面積の中で破壊される部分の調査だけに留めている。今回の開発は東側道路部分まで削平を受けるので全面調査することになった。調査期間は平成2年8月16日～9月13日で調査面積は197m²である。

2) 調査区の地形と調査概要

調査地点は福岡市早良区小田部1丁目123に位置し、開発面積197m²のうち調査面積は150m²である。本調査地点は有田遺跡群の北東端にあたり、八手状に延びる丘陵の東傾斜面に位置する。



Fig. 39 調査区位置図

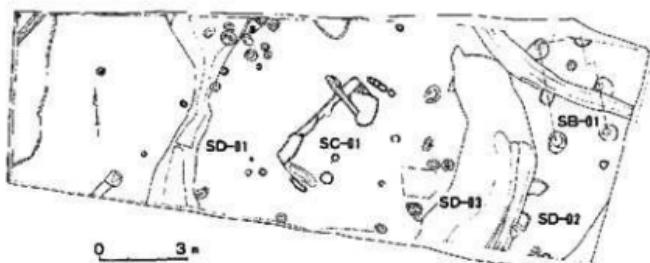


Fig. 48 第163次遺構配置図 (1/200)

標高 8 ~ 9 m を測る洪積台地で東側は深い谷部に面している。

調査区周辺では 3, 34, 99, 160, 162 次等の調査が実施され、古代～中世の遺構が検出されているが、有田遺跡群の他の地点と比べて遺構の在り方は希薄である。調査を行った丘陵には古墳（有田 1 ~ 3 号墳）が占地し東側は深い谷部に面していたと思われ、このような遺構の希薄さは自然地形に大きく左右されたものであろう。

調査区の西半部は区画整理時の削平により鳥居ローム層下部の土壤が露出し平坦になっており、遺構は認められなかった。遺構が存在するのは自然地形が遺存している東側部分の傾斜地である。土層は新期ロームの上に黒ボク質の黒褐色土、茶褐色土、盛土となる。検出した遺構は古墳時代前期の溝 2 条、竪穴住居址 1 棟、掘立柱建物 1 棟、ピット群である。SD01からは肩部に瘤状小突起をもつ初期須恵器の甕が 1 点出土し、SC01からは古式の須恵器壺が数点出土している。他には土師器・須恵器が少量出土しているだけである。

3) 調査の組織

調査委託 近藤 素

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾学 柳山純孝（前任）

埋蔵文化財課第 1 係長 飛高憲雄

調査庶務 埋蔵文化財課第 1 係 寺崎幸男 中山昭則

調査担当 発掘調査 松村道博 試掘調査 吉留秀敏

調査・整理補助 済石正子、入江のり子、撫養久美子

調査作業 山崎吉松、上原チヨ子、野坂三重子、古井モモエ、西田マキエ、森友ナカ、柴田シズノ

整理作業 飯田千恵子、丰田恵子

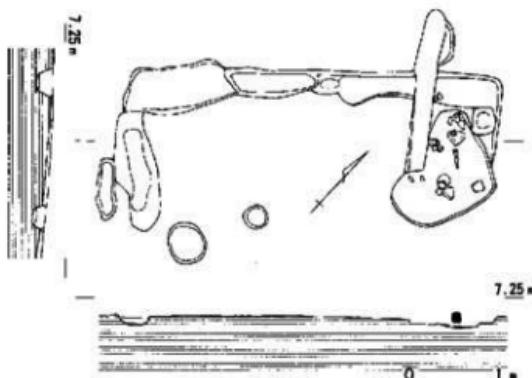


Fig. 41 1号住居址実測図 (1/60)

2. 遺構と遺物

住居址

調査区のほぼ中央に1棟検出した。周溝の一部が遺存する古墳時代前期の方形の住居址である。

1号住居址 (Fig. 41)

SD01とSD03のほぼ中央部に位置する。丘陵斜面に占地するが壁面は区画整理時に削平を受け、丘陵の尾根に近い部分の周溝だけが「コ」の字状に確認できた。現存の住居址は方形一長方形住居址と思われ、計測値は東西3.97m、南北1.65m以上で全体の規模は不明である。溝幅は所により狭広があり0.25~0.5mを測り、深さ0.1m弱を測るに過ぎない。床面は地山面まで露出して本米の床は削平されている。床面にはピット2個があるが深さは0.05~0.1mと浅く支柱穴とは考えられない。住居址の東壁に沿って略三角形の浅い土壙がある。一部壁面の外側に張り出し、さらに住居址床面まで現代の擾乱があり、住居址と関連するものか、別個のものな明確に把握することができなかったが、住居址の周溝とは同一期の遺物を含んでいることから、一応ここでは住居址内土壙とした。土壙の埋土は暗褐色土及びローム土混入土となる。拳大前後の礫と共に古式の須恵器及び鉄器が出土している。

出土遺物 (Fig. 42)

1は陶質土器の壊蓋である。ほぼ半分が遺存しており器高4.3cm、径14.6cmを測る大振りの形

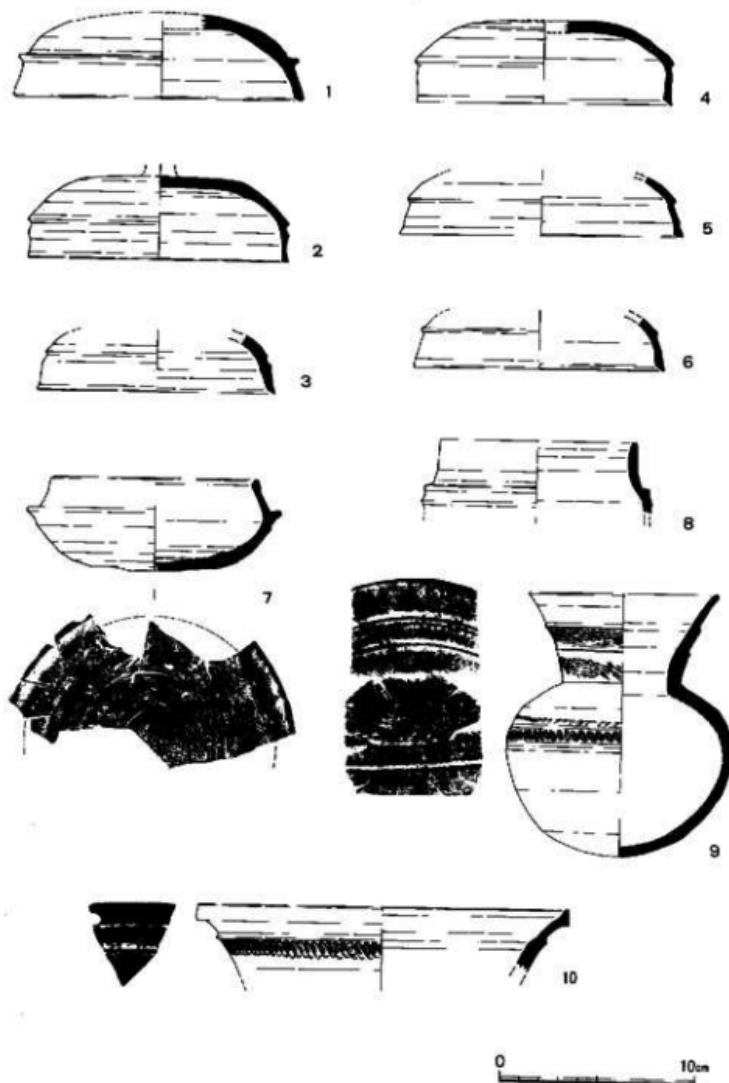


Fig. 42 J-1号住居址出土須恵器実測図 (1/3)

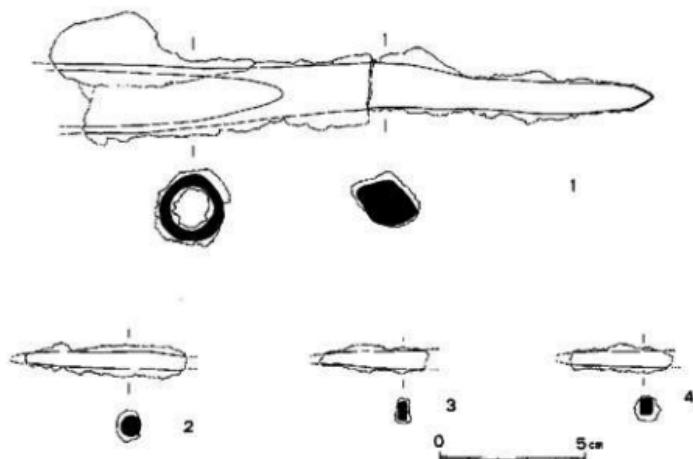


Fig. 43 1号住居址出土鐵器実測図(1/2)

態である。胎上は石英粒を少し含むが精良され、焼成は緻密で外面は濃灰色、内面は灰色を呈する。須恵器に比べ全体に厚ぼったい器壁であるが、器表面は平滑である。天井部は丁寧な回転ヘラケズリ、内面から口縁にかけては回転ナデである。扁平な丸味をもつ天井部から口縁部も同じ曲線で口縁部に至る倒輪状の器形を示し天井部との境に鈎状の大きな削り出しの突帯をもつ。突帯の先端は鋭角で天井部との境は窪み四線状を示す。2~6は須恵器の坏蓋である。2は平坦な天井部でつまみがつくものであろう。器高4.4cm、口径13.4cmを測る。天井部と口縁部との境には鋭角な段をもち、口縁部は中ふくらみをもち直立し、端部は外側に肥厚気味となる。胎土には砂粒を少し含むが良好で色調は灰白色、焼成は良好である。3は口径12.2cmと小振りの坏で口縁部の境を凹線をもって区切っている。端部は内面に稜をもち、外側に引き出される。4は天井部との境の稜から内傾する口縁部となり、端部に明瞭な段を有する。5、6は天井部との境の稜から丸味をもち外傾する。いずれも胎上に小砂粒を含むが精良で焼成は良好、色調は白灰色である。天井部は回転ヘラケズリ、口縁部はナデ調整である。7は坏身である。口径10.6cm、器高4.8cmを測る。胎土は緻密、焼成良好で色調は白灰色である。蓋受け部から口縁部は強く内傾し、端部は内側が少し窪む。底部は回転ヘラケズリで、他は回転ヨコナデ。内底はナデ調整を施す。外底に平行線のヘラ記号が残る。8は有蓋の小壺である。口縁部は内湾気味に直立し、上端部はヘラで面取りする。蓋受け部の下は凹線状に窪み稜をもつ。肩部は欠損するが長胴になるものであろう。胎上には白砂粒を少し含み濃灰色を呈し、焼成良好である。9は長頸壺で、口縁部を一部欠損するがほぼ完形品である。球形の胴部に朝顔状の口縁部で調

部に孔があれば聽と見まがうほど形態が酷似する。口径9.7cm、器高13.3cm、胴部最大径11.4cmを測る。胎土には砂粒を少し含むが精良、焼成は良く濃灰色を呈する。口縁内部から外面上半部にかけて茶緑色の自然釉がみられる。口縁部、胴部上半部は回転ナデ、下半部は回転ヘラケズリの後ナデ調整を施している。胴部中央に浅い沈線を2条めぐらし、その間に櫛状工具による刺突文、その上にヘラ状工具による刺突文をもつ。さらに口縁部にも2条の段状沈線の間及び胴部との間に2ヶ所の波状文を施している。10は小型の甕であろう。朝顔状に開く口縁部では端部は断面三角形を示し、その下に突帯と波状文をめぐらす。

鐵器 (Fig. 43)

1はノミ状鉄器である。莖は円形で袋状となる。刀部は角釘状に先端が尖る。身は断面菱形で先端が細くなる。基部を一部欠損し現存長20.4cm、莖部径2.4cm、身厚1.5cmを測る。2~4は鐵の茎の破片である。断面は2が丸味をもつ四角形で、他の2つは長方形である。

洪武遺稿

1号溝 (Fig. 40・41)

調査区の中央を丘陵に平行に南北に走る溝である。緩やかに蛇行するが、ほぼ直線的である。中央部が浅く幅を狭め、深さ0.25m、幅0.5mを測り、北端では撥形に幅を広め幅2.9m、深さ0.5mとなる。南端は幅1.8m、深さ0.55mを測る。床面には少し凹凸がみられ北側にピットが3個検出されたが溝に伴うかどうか不明である。埋土は上層が暗褐色土で床面近くはローム層混入の軟質な土壤となる。遺物は黒褐色土中より出土し、南壁近くから肩部に突起をもつ陶質系須恵器の破片が一括して出土している。

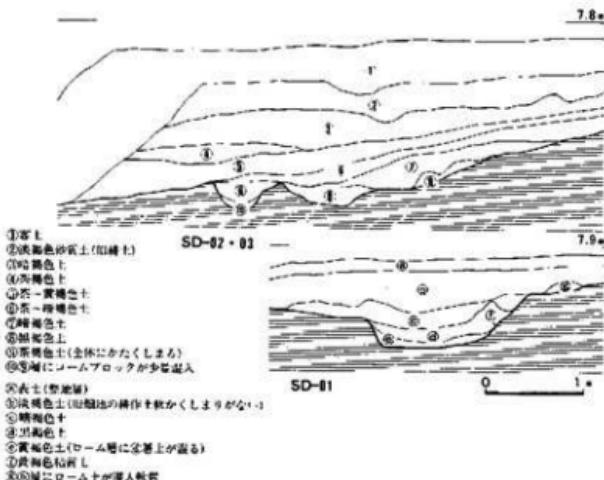


Fig. 44 1~3号满南壁上层火测图 (1/60)

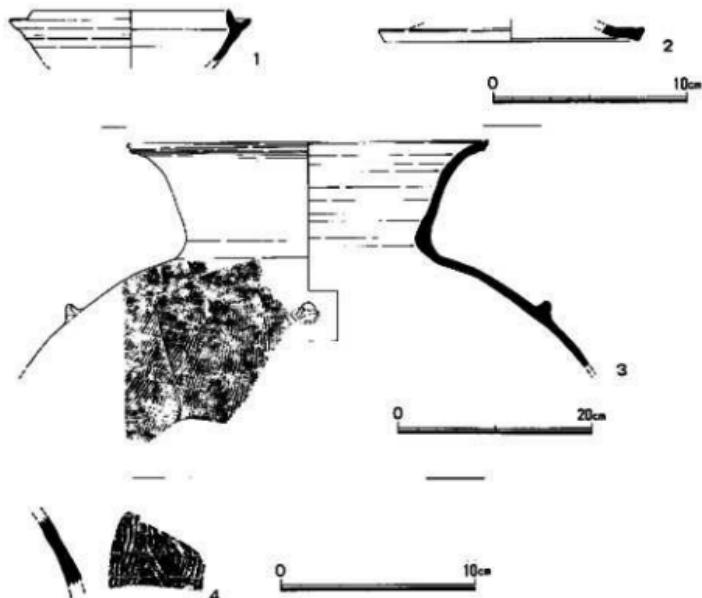


Fig. 45 1・2号溝出土須恵器実測図 (1/3, 1/8)

出土遺物 (Fig. 45)

1、2は須恵器である。1は壺身で口径10.0cmを測る。蓋受け部から口縁は内傾して短く立ち上がる。2は高壺の脚部片で端部は上がり、縁をつまみ出している。3、4は陶質系須恵器である。溝の南端に一括して出土したもので、肩があまり張らない球形に近い肩部で朝顔状に開く口縁部となり、肩部に瘤状小突起を1個有するものであろう。口径36.6cm、残存高22.9cmを測り器高は50~60cmを測るものであろう。胎土には小砂粒が多く含み焼成は堅緻で色調は暗灰~灰黒色を呈する。口縁端部は丸く、その直下に鈍い三角突帯をもつ。口縁部はヨコナデ、胴外面は縱方位の平行タタキ、内面はナテ調整である。4は条帶文をもち、その上から細い4条の沈線をもつ陶質土器の破片である。胎土は緻密で灰褐色を呈し、内面は横ナデである。

2号溝 (Fig. 40・44)

台地の落際に検出した幅0.5m弱を測る細い溝で台地と平行して南北に走る。後に述べる3号溝と重複しているが、前後関係は不明である。断面はU字状を示し埋土は茶~黒褐色を示す。出土遺物は土師器の小破片を出土するだけで時期の詳細は不明であるが古代に属するものであろう。

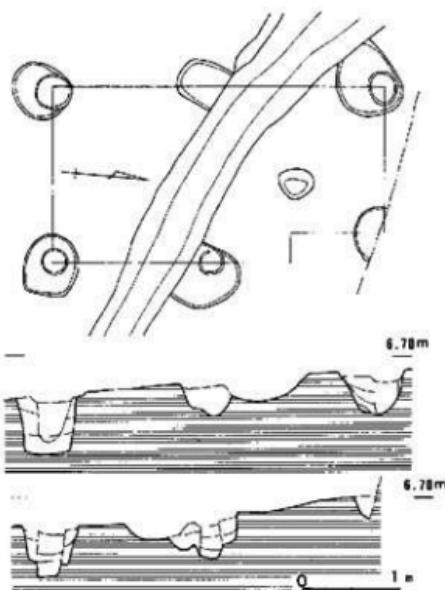


Fig. 46 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

3号溝 (Fig. 40・44)

台地の縁に弧を描くように湾曲する溝状遺構である。台地斜面を削り少しづめられたような状況で北端は徐々に浅くなり調査区内で立ち上がる。南端での深さは0.2m、幅は最大部で2.4mを測る。埋土は黒褐色～暗褐色土であり縮りはない、床面は樹根状の凹凸が著しい。遺物は須恵器、土師器の小片が少量出土しているだけである。

掘立柱建物**1号掘立柱建物 (Fig. 46)**

調査区の北東端、丘陵部から平坦になっている所に、検出した1間×2間の建物である。柱穴は径0.2～0.7mの円～梢円形の掘り込みで、深さは0.2～0.65mを測る。柱は径0.2m前後である。柱間距離は梁行が1.70m、桁行1.60～1.65mを測る。柱穴の埋土は暗褐色と黄褐色の瓦層になっているが土壤に縮りはない。

ピット出土遺物 (Fig. 47)

1は1号ピットから出土した須恵器の小壺である。口縁部を一部欠損するがほぼ完形品であ

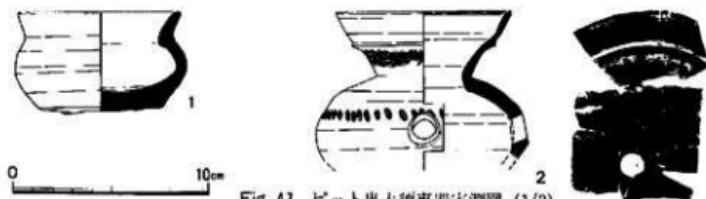


Fig. 47 ピット出土須恵器実測図 (1/3)

る。口徑8.2cm、器高5.1cmを測る。椭球の胴部に外反する短い口縁部となる。底部から胴部にかけてヘラ削りで他はヨコナデである。胎土には小石を混入し、焼成は良く、白灰色ないし灰色を呈する。2は2号ピットから出土した禮である。球形の胴部に中位に段をもつ口縁部となる。口縁端部は内側に段をもち、頸部の上に櫛描波状文をもつ。胴部には径1.2cmの上向きの孔をもち、その上に櫛状工具による刺突文をめぐらす。

3. 小 結

今回の調査で検出した遺構は古墳時代前期の溝1条(1号溝)、堅穴住居址1棟、ピット群の他に時期が不詳な溝3条がある。1号溝は現状で幅約1.2m、深さ0.5mを測るが現地形が相当な削平を受けていることを考えると大きな掘り込みの溝であろう。長さも調査区内では終束せず、さらに南、北へも延びており、集落に付随する溝であろう。溝からの出土遺物は少ないが、注目すべきものとして肩部に瘤状小突起をもつ須恵器の甕がある。胴部外面は平行タタキで、頸部口縁部にかけてヨコナデである。肩部に小突起をもつ須恵器の甕の類例として津屋崎町の宮司井手の上古墳の埴丘出土例があげられよう。しかし、調整、形態を比較すると相違点も多くより後出的要素をもっている。肩部に瘤状小突起をもつ特徴は伽耶系陶質土器に共通する要素とされ、1号住居址から陶質土器の甕が多く出土していることや、有田遺跡群から多くの陶質土器が認められ、古墳時代前期の朝鮮半島との交流も今後検討を要するものであろう。



(1)調査区全景（東から）



(2)調査区西側全景（東より）



(1)調査区西侧全景（東から）



(2)1号溝（北から）



(1) 1号住居址出土須恵器



(2) 1号掘立柱建物 (東から)



各遺構出土遺物 ((1)~(4)…1号住居址 (5)…2号ピット (6)…1号ピット (7)…1号溝)

第5章 第165次調査

1. 調査に至る経過

調査区は早良区有田1丁目21-11に所在する。調査区の状況は荒れた空地であった。

平成2年度に申請番号2-2-171で該地に倉庫兼事務所建設の開発申請が提出された。これを受けて事前審査班が試掘調査したところ、埋蔵文化財の包蔵を確認した。その後、協議を行ない、記録保存の為の発掘調査及び報告書作成作業を、事業者の負担で行なう事となった。

発掘調査は1990(平成2)年12月2日の重機による表土持ち出し作業から、1991(同3)年1月11日の重機による埋戻し作業迄の間実施し、又報告書作成は平成3年度実施した。調査面積は申請面積198m²中184m²である。

なお、申請者の株式会社倉府食品及び施工業者の猛建設には、調査・整理において多大な御協力と御理解を賜った。記して感謝の意を表す次第です。

2. 調査体制

調査委託 株式会社 倉府食品

調査主体 福岡市教育委員会教育長 井口雄哉

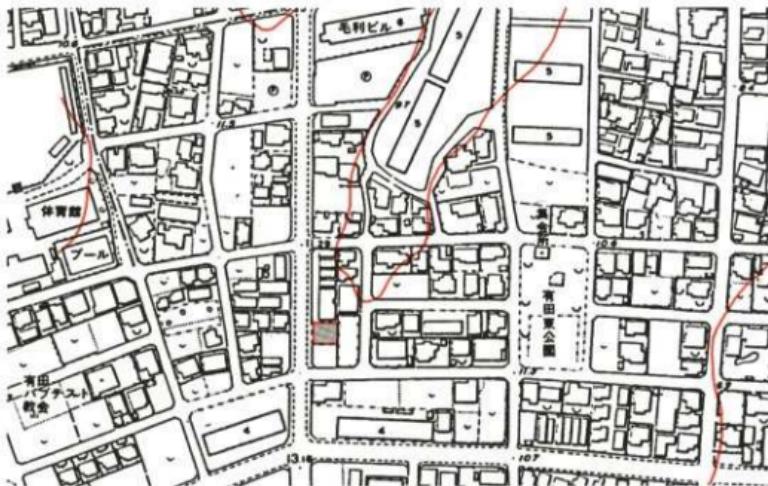


Fig. 48 調査区位置図

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾勉（現任）、柳田純孝（前任） 同課第1係長 飛高憲雄

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 中山昭則、吉田麻由美

調査担当 埋蔵文化財課第1係 山崎龍雄

調査・整理作業 平川敬治（九州大学）、井上加代子、吉村哲美、有富温子、諸方マサヨ、清原ユリ子、佐藤テル子、柴田勝子、庄野崎ヒテ子、土斐崎初栄、平井和子、堀川ヒロ子、松井邦子、宮原邦江、吉岡田鶴子、池田礼子、井上マツミ、内尾トミ子、中原尚美、松下節子、吉田祝子

3. 調査の記録

1) 調査の概要

調査区は、有田・小田部台地で最も標高が高く、かつ広い平坦地を持つ地域の、北から入る深い谷を臨む斜面上にある。標高は造構面で11~11.5m前後を測り、南が高く北が一段低くなる。造構面迄の深さは南側が浅い。造構面は南側で表土10cm、黒色粘土に橙色ローム土混入土10~15cm、黒色粘土20~25cmの40~45cmの深さの褐色ローム粘土上面、北側がそれより40cm前後段落ちした黄褐色ローム粘土上面である。造構は調査区全域で検出した。主な検出造構は溝3条、土坑5基、井戸2基、段落状造構1基、ピット群である。ピットは南側に集中していたが、建物としてはまとめ得なかった。また南側には不定形状の浅い上坑があったが、地山の汚れか、明確な造構として把握出来なかった。遺物はSX01を中心にコンテナ21箱出土している。

2) 遺構と遺物

土坑

SX05 (Fig. 50, PL21)

調査区北側境界にかかる不整方形を呈すと思われる土坑。SX01掘り下げ後検出した。一部が未掘の為、全容はわからないが、形態から2つ以上の造構の重複も考えられる。確認規模は東西2.0m、南北2.0m以上、深さ63cmを測る。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色粘質土、地山ローム土、黒色粘土の混合土が主体で、人為的に埋められた状況で、填圧して埋めたためか、固く締っていた。

出土遺物 (Fig. 51, PL24)

須恵器や土師器の小皿・杯、明の染付・中世の瓦などの小片が少量出土している。ここには図示していないが、上層から須恵質の綠釉陶器碗の小片も1点出土している。

1は染付碗？底部細片。「錢頭心」系の碗であろうと思われる。見込みに唐草文様らしきものが吳須で描かれる。明代のものか。2・3は土師器。2は小皿1/2片で、復元底径3.3cmを測る。

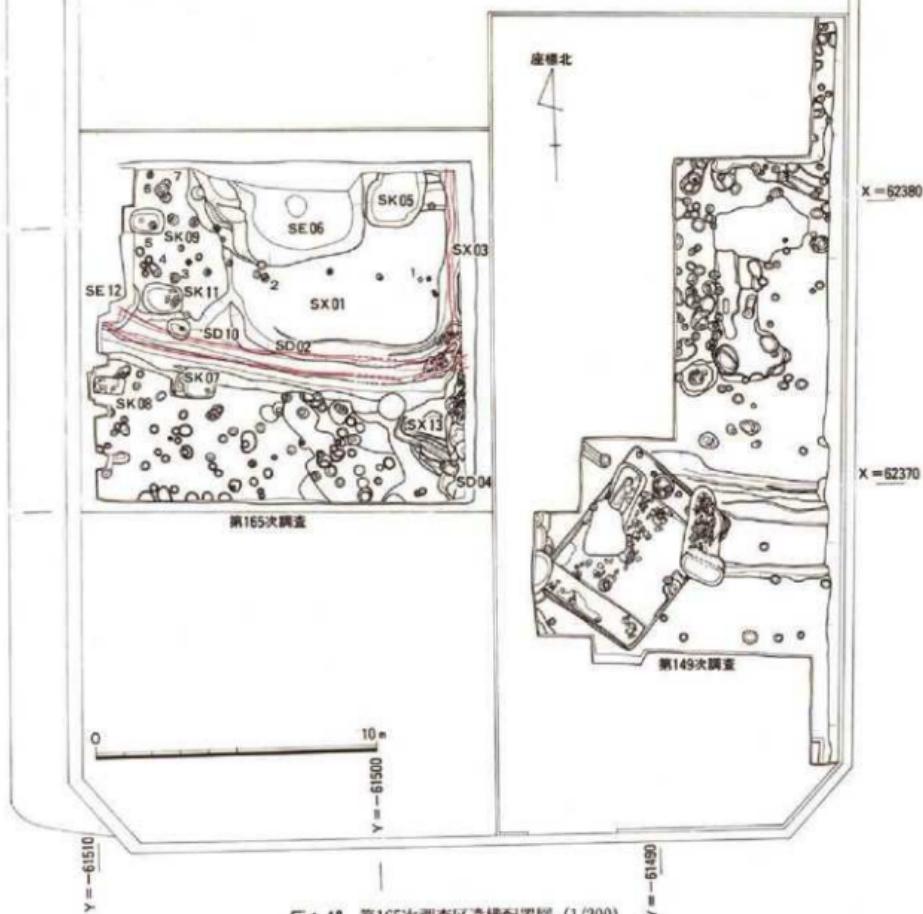


Fig. 49 第165次調査区遺構配置図 (1/200)

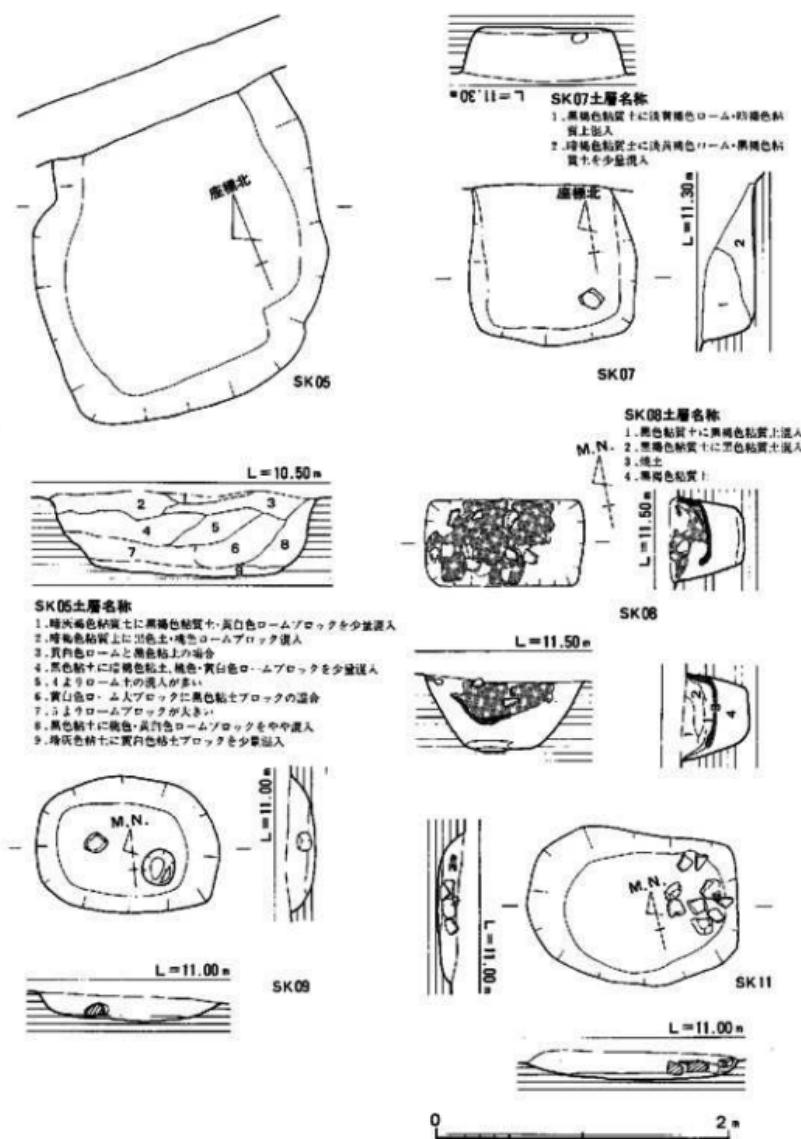


Fig. 50 SK05・07・09・11 (1/40)

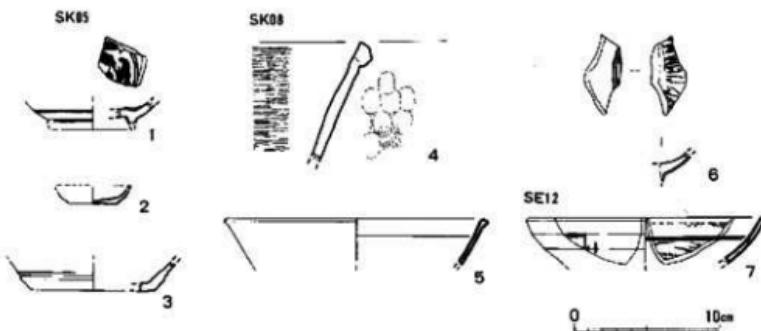


Fig. 51 SK05・08・SE12出土遺物 (1/4)

磨滅がひどく、調整は不明。3は杯の底部1/4片。復元底径8.4cmを測る。底部は糸切り痕が残る。

SK07 (Fig. 50, PL21)

中央段落部で検出した長方形状を呈す土坑。北方は削平されているが、南側残存部の規模は東西1.15m、南北1.15m以上、深さ36cmを測る。断面は逆台形を呈すが、壁の立ち上がりは急である。底面は平坦である。埋土は大きく2層に分かれる。上層は黒褐色粘質土、下層が暗褐色粘質土で、それぞれ黄褐色の地山ロームブロックを含む。

出土遺物

弥生土器・土師器・黒曜石の細片が1点ずつ出土している。

SK08 (Fig. 50, PL21)

西側境界地で検出した長方形の土坑。長さ1.07m、幅0.6m、深さ52cmを測る。底面は上面に對して大きくせばまり、そこに浅いピット状の落ち込みがあった。埋土は黒色及び黒褐色粘質土を主体とするが、内に多量の焼土ブロック、炭化物が西と南北方向から中位の深さまで流れ込むような形で堆積していた。焼土・炭化物はそれより下では検出されていない。遺物も焼土・炭化物混合層より多く出土する。

出土遺物 (Fig. 51, PL24)

弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・白磁・染付・平瓦片などが出土している。大半が細片で、量はそれ程多くない。

4は土師質土器の鍋口縁部小片である。口縁部に三角形状の突帯が付く器形。体外面は指おさえにタテ刷毛を部分的に施し、内面はヨコ刷毛。体外面には煤が厚く付着する。5は白磁碗口縁部1/10片。復元口径18.0cmを測る。口縁部がやや端反る器形である。6は染付椀の細片で

第165次調査

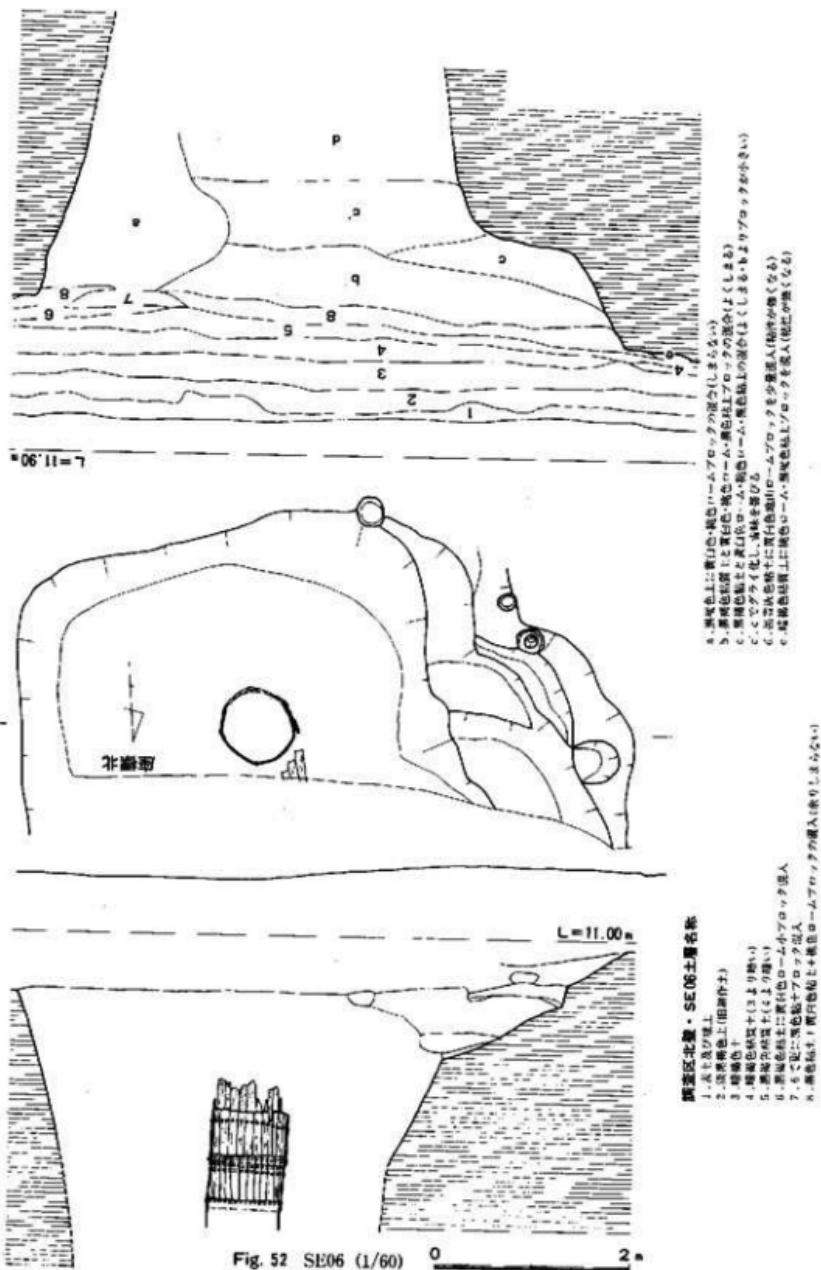


Fig. 52 SE06 (1/60) 0 2 m

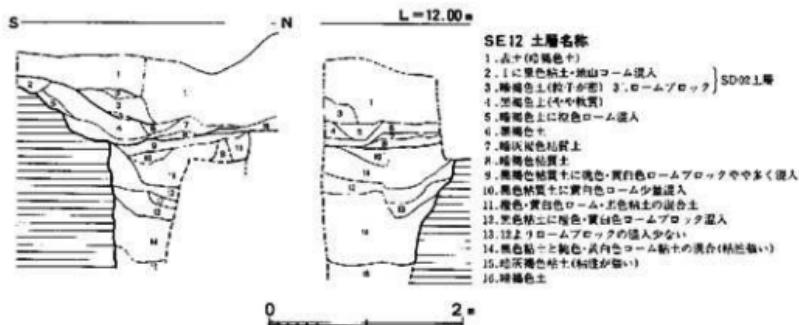


Fig. 53 SE12 (1/60)

ある。明代のものであろうか。

SK09 (Fig. 50, PL21)

調査区北西側で検出した梢円形状の上坑。規模は長さ1.34m、幅0.94m、深さ20cmを測る。残りは悪く、断面は浅い皿状を呈す。底面には直径15cm位の角転砾がある。埋土は明るい黒褐色粘質土に黄白色ロームを少量含む。

出土遺物

図化不能の弥生土器・須恵器・瓦の細片が合わせて4点出土した。

SK11 (Fig. 50, PL22)

調査区西側で検出した梢円形状の上坑。規模は長さ1.48m、幅1.04m、深さ19cmを測る。断面は浅い皿状を呈し、底面は中央部がわずかに深くなる。東側に10~15cm前後の角礫が集中していた。埋土は暗褐色粘質土と黒褐色粘質土と黄褐色地山ローム上の混合土である。

出土遺物

図化不能の土器・須恵器・瓦の細片が4点出土している。

井戸

SE06 (Fig. 52, PL23)

北側境界地にかかる大形の井戸である。SX01掘り上げ後検出した。掘方平面形態は隅丸方形状を呈すと思われる。確認規模は東西長で6.0m、南北長で3.3m以上を測る。井筒は植

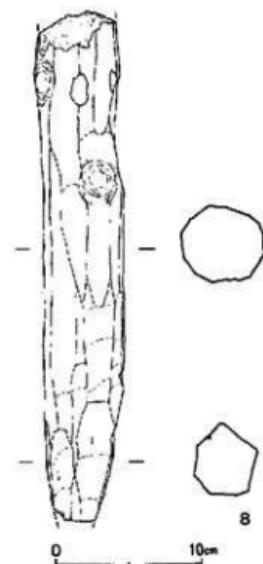


Fig. 54 SE06出土遺物 (1/4)

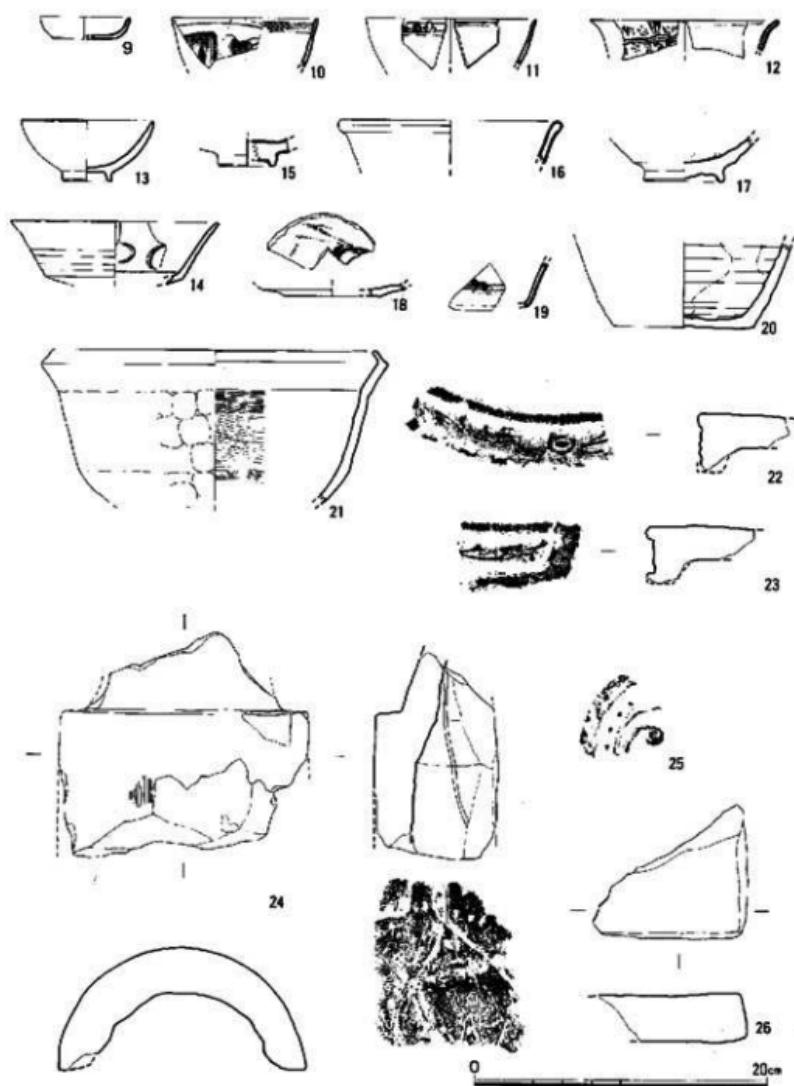


Fig. 55 SX01出土遺物 (1/4)

を用いており、井戸上端から90cm程の深さで、掘方のやや西寄り北壁沿いで検出した。桶は長さ53cm前後、幅10cm前後の杉の板材32枚を1単位として、竹のたがで繋縛している。井筒は桶を下から被せるように積み上げている。3段分迄確認したが、湧水がひどいえに、井戸内の上が軟弱であり、しかも、北側調査区壁の崩壊の恐れがあった為、井戸底迄の光掘を断念した。しかし、最後に重機で部分的に深さを確認したところ、遺構面から3m以上はある。井戸埋土は大きく上下2層に分かれる。上層は黒褐色粘土・黄白色ローム・桃色ロームの混合土で、全体によくしまり、下方程、グライ化している。下層は黒青灰色粘土で、黄白色地山ロームブロックを含む。この層は粘性が強く、軟質である。上層の土はSK05埋土と類似している。掘方内に井戸の板材が落ち込んでいることから考えて、井戸が一度深さ120cmの第C層上面迄、掘り上げられ井筒が露呈していた時期があり、その時井戸材が外へはずれて落ち、その後、SK05と同時期に埋めたものと考える。

出土遺物 (Fig. 54, PL24)

掘方・井筒内から造物の出土はほとんどない。掘方内から、弥生土器・平瓦の網片が17点、掘方内から同安窯系の青磁小片が出上している。

8は掘方内から出土した丸太杭である。現存長34.7cm、太さは5.2~5.6cmを測る。表面は削りで面取りするが、節目がある。先端部は欠失するが削って尖らせている。

SE12 (Fig. 53, PL23)

調査区西側境界地の段落下で検出した井戸。大半が調査区外で、狭い範囲であった為、底迄完掘出来なかった。平面形は円形を呈すと思われる。確認規模は直徑1.45m以上、深さ1.3m以上を測る。掘方埋土は地山ローム粘土と黒色粘土のブロック土を主体とする。全体にかたく締っていた。井筒の有無は不明である。

出土遺物 (Fig. 51, PL24)

遺物の出土は同安窯系の青磁片が1点出上している。

7は青磁碗1/6片で、復元口径16.2cmを測る。体部内外面に描き文様が入り、オリーブ灰色の釉が施されている。

段落状遺構

SX01 (Fig. 56, PL20)

調査区中央北側で検出した、平面形態が隅丸方形を呈す土坑状の遺構。東側は近代の池SG03に切られる。確認規模は東西長で8m以上、南北長で8m以上、深さ70cm前後を測る。南側の壁は階段状を呈し、南西限には浅い溝状遺構のSD10が流れ込む。底面はほぼ平坦である。埋土は上・中・下3層に分かれ、上層は暗褐色粘質土、中層は上層よりやや暗い層、下層は暗灰褐色粘質土を主体とする層である。上層には後世の溝SD02が巡っている。

出土遺物 (Fig. 55, PL25)

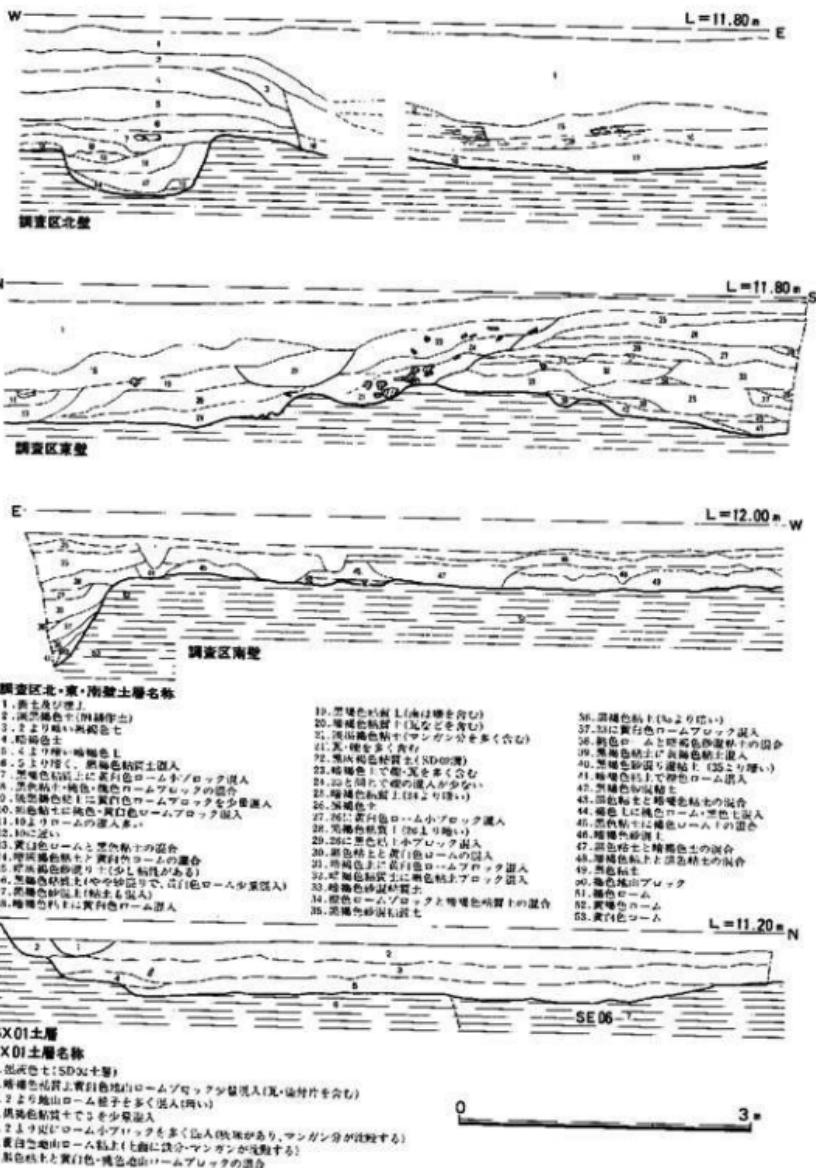


Fig. 56 調査区北壁・東壁・南壁土層・SX01上層 (1/60)

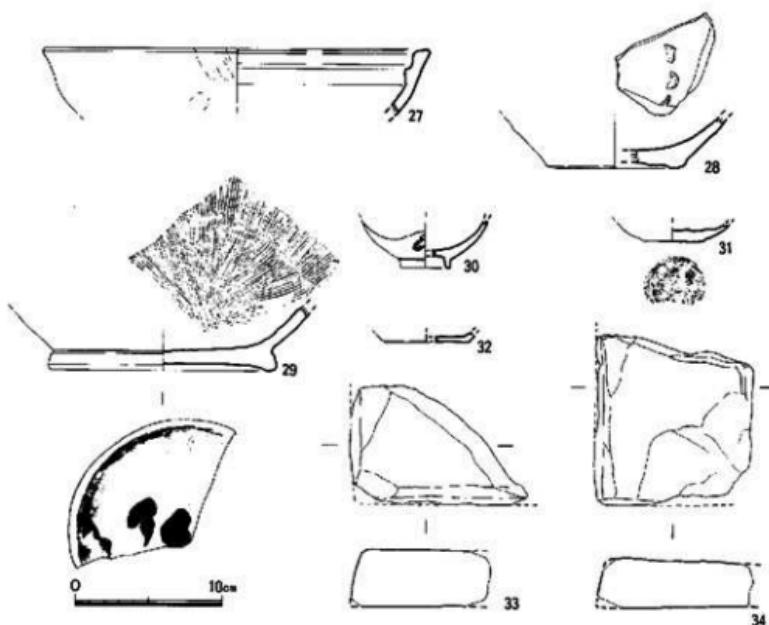


Fig. 57 SD02・04出土物 (1/4)

弥生土器から古墳時代の土師器・須恵器・中世の瓦・土師器・陶器・白磁・青磁や黒曜石の
剝片・鉄滓などが出土している。

9は上師器の小皿1/2片。復元口径6.0cm、器高1.5cmを測る。全体に磨滅し、調整は不明。10~12
は染付磁器。10は口縁部1/6片。復元口径9.8cmを測る。江戸中期以降の肥前磁器の広東椀に似
る器形である。11は椀の口縁部1/6片で、復元口径11.6cmを測る。口縁部外面に文様、内面に2
条の圈線が具備で描かれる。12は1/8片。復元口径12.8cmを測る。体部外面には梅らしき文様が
描かれている。11・12とも明代のものであろう。13は白磁の小椀1/2片。復元口径9.0cm、器高
4.2cmを測る。器形から江戸時代以降のもの。14は白磁の深底の皿か椀1/8片。復元口径14.2cm
を測る。見込みにはヘラ片彫りによる雲文が入る。15~19は青磁である。15は椀底部片である。
釉の発色が悪く、色調は灰白色を呈すが、底部の器形から青磁と考える。16は椀の口縁部1/8片
で、復元口径15.2cmを測る。灰味がかった緑色釉が厚目にかかる。明代のものである。17は李
朝の椀底部1/2片。復元高台径5.5cmを測る。見込みと高台内面に砂目痕が残る。19は香炉と思
われる小片。体部外面は緑がかった灰色釉がかかるが、内面は施釉されていない。18は皿の1/

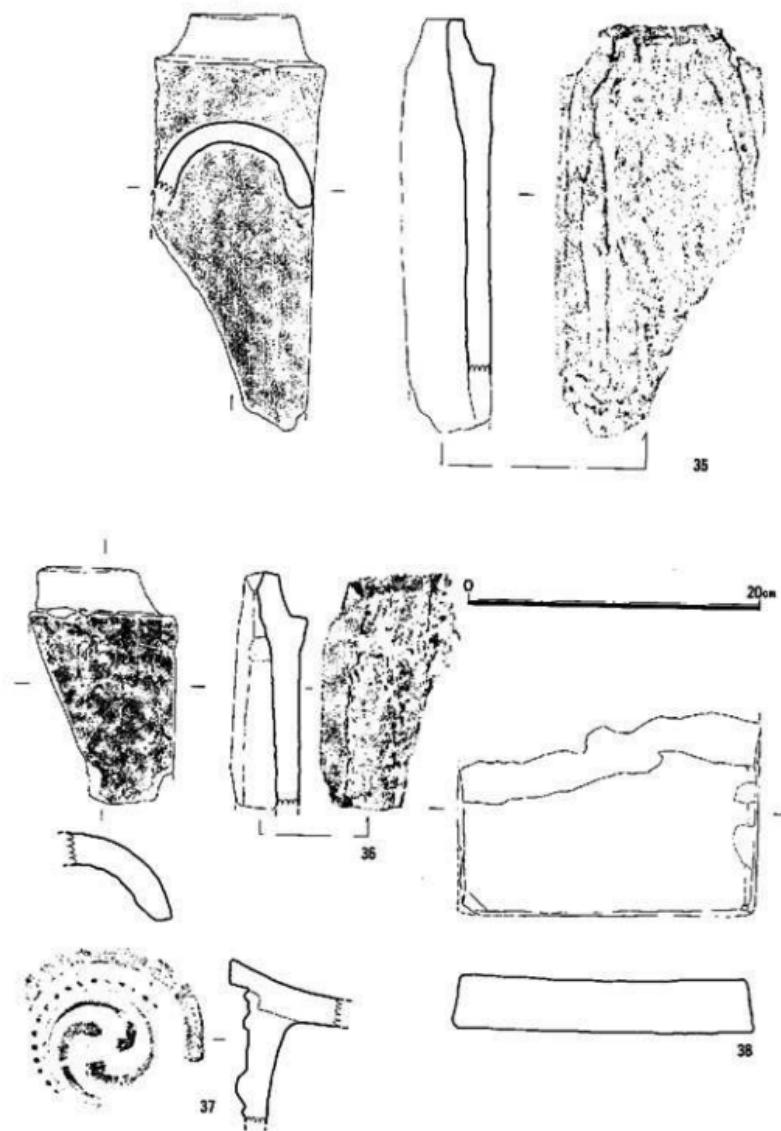


Fig. 58 SD10出土遺物 (1/4)

3片。復元底径6.4cmを測る。同安窯系である。20は陶器の瓶底部片。復元底径9.6cmを測る。外底部には輪状に窯道具痕が残る。外面には褐色釉がかかり、内面にも釉がたれている。体外面上部に一部へこむところがあり、布袋徳利の可能性もある。21は瓦質土器の足錐口縁部1/8片。復元口径22.0cmを測る。体部外表面は指おさえ調整、内面は粗いヨコ刷毛調整である。外面には煤が厚く付着する。22~25は瓦。22・23は軒平瓦の瓦当片である。いずれも頸はヘラナデで曲線を呈している。22は残存瓦当幅15cm、瓦当幅は復元で約21cmを測る。中心飾りは退化した宝珠形で、左右の唐草は退化しているが、蔓草は6回転させている。全体に磨滅が著しい。23も22とほぼ同一文様のもの。24は軒丸瓦の玉縁から筒部片。筒部幅は17.1cm、筒部高8.4cmを測る。筒部の背部には細かい刷毛目が残り、谷部には細かい紐状の痕跡と布目痕が残り、周辺部はヘラ削りによる面取りを行なう。他に比べて大型である。25は丸軒瓦の瓦当小片。内区には巴文、外区には珠文が配される。26は方形の壇の小片。厚さ3.9cmを測る。全面に磨滅が著しく、調整は不明。

9~13・15・18~20・22~26は上層出土、16は中層、21は下層底面出土である。

溝状遺構

全部で3条検出した。1条は近代、2条は中世末の溝である。

SD02 (Fig. 56)

調査区中央の段落ち沿いを略東西方向に延びる、最大幅1.25m、深さ40cmを測る溝である。埋土は單一で、黒灰褐色粘質土である。

出土遺物 (Fig. 57, PL24)

中世の瓦・陶器・古墳時代の土師器・須恵器などが出土している。大半が細片である。

27は褐釉陶器の盤口縁部小片。復元口径26.4cmを測る。内面に2重の段が付く。体内面を中心に褐色釉が施釉されている。28は越州窯青磁の碗底部1/6片。内外面オリーブ色の釉がかかるが、疊付き部分は釉をかき取る。見込みと疊付き部分に目痕が残る。29は擂鉢底部1/3片。内面に密な条線が入り、外底部には鉄漿で文字?が描かれている。条線の目は密で、時期は新しい。

SD04 (Fig. 56, PL22)

調査区東側境界で検出した第19次調査地点から続く溝の一部分である。確認長は5mである。東側の第149次地点では、西側境界地に東壁上端をかろうじて検出しており、それから推定して、幅は3.5m前後と考えられる。溝の断面は第19次地点では箱型研堀を呈し、幅は4.5mと当地点より若干広くなっている。埋土は暗褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 (Fig. 57, PL25)

土師器・須恵器・陶器・青磁・平瓦・丸瓦などの細片が出土しているが量は少ない。

30は赤絵磁器の碗1/2片。復元高台径3.5cmを測る。31は東海系と思われる灰釉陶器の皿底部片である。復元底径4.3cmを測る。底部は糸切りで、他はナデ仕上、胎土は精良、色調は灰色を

第165次調査

呈す。32は土師器の皿底部1/3片。復元底径6.0cmを測る。外底部には板目痕が残る。33・34は方形壇の一部分である。器厚は33が4.0cm、34が3.5cmを測る。全体に磨滅するが、各側縁部は削り面取りしている。

SD10

調査区段落下で検出した小溝。段落下を東西方向に走り、SX01に合流すると思われる。溝幅は1.1~1.4m、深さは30cmを測る。埋土は暗褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 (Fig. 58, PL25)

須恵器・土師器・平瓦・丸瓦・軒丸瓦・壇などの小片が少量出土している。比較的残りのよいものもある。

35・36は丸瓦。34は現存長28.1cm、筒部後端部幅11.6cm、筒部高6.4cm。玉縁尻部幅7.2cmを測る。筒部背部には縄目の叩き模、谷部には糸切り痕と組織痕が残る。色調は灰褐色を呈す。36は現存長16.2cm、復元筒部後端部幅12.4cm程を測る。背部には細かい縄目の叩き模、谷部には目の粗い布目痕が残る。37は軒丸瓦の瓦当片で、復元瓦当径は約14cmを測る。内区に三巴、外区に珠文を配している。瓦当部は貼付けしており、調整はヘラナテしている。38は方形壇の1/2片、一边20.6cm、厚さ3.6cmを測る。全体に磨滅が著しいが、側辺は少し斜めに切りとり、上面には砂が付着する。

池状遺構

SX03 (Fig. 56)

区画整理時に埋めたてられた池である。調査区東側で検出した。池の西岸部分と考えられ、護岸用の杭や横板などがあった。また調査区東側境界側で、中世の瓦や土師器・陶磁器類を交えた礫群が、池に流れ込むような状況で検出された。これは池の埋没に伴うものと考える。

この池は本来小田部地区の谷水田に供給する為の池であったが、区画整理時にはかなり埋まって用をなさず、どぶ池状を呈していたという事である。

出土遺物

弥生土器・須恵器片から、中世から近世の土師質土器・陶器・磁器・平瓦・丸瓦・壇、ガラス片、不明鉄製品などがある。

その他の遺物 (Fig. 59, PL25)

39は耕土中から出土した三角形状の石鏃、石質は黒曜石である。先端部は欠失する。現存長2.9cm、基部幅2.2cm、厚さは0.4cmを測る。

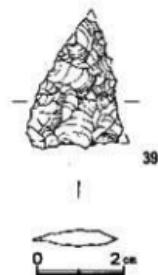


Fig. 59 表土出土遺物 (2/3)

4. 小 結

当調査区は、中世の遺構を主に検出した。ここでは各遺構毎に再度整理を行ない、まとめとしたい。

土坑については5基検出した。遺物が少なく、時期比定が難しいが、比較的遺物が出土したSK05・08について言えば、SK05は出土した明代の染付皿片や、土師器皿の形態から、16世紀代が考えられる。しかし遺物は人為的な理上からの出土で、埋った時期を示すものであろう。SK08も土師質土器の鍋や16世紀代の瓦などの出土から、ほぼ同時期。SK09、11も同様の瓦片が出土しており、概ね同時期と考える。

溝は3条検出した。SD02は近世以降、SD04は南側の第19次地点では、出土遺物から16世紀前半から中頃とされている。SD10もSD04とは同種類の瓦類が出土しており、同時期である。

井戸は2基検出した。いずれも境界地にかかり未掘である。遺物の出土もなく、時期の比定は難しい。SE06は桶組の井筒を持つ大形の井戸である。博多遺跡群では中世以降、桶組の井戸が出現するが、有田でも第100次地点で出土している。東側のSK05と、同質の土で埋っており、同時期に埋められたものと考える。SE12は12世紀代の同安窯系青磁碗片の出土と、上面の16世紀代SD10から考えて、その間の時期としておく。

SX01は方形状を呈す段落状の遺構である。性格はよくわからないが、下層の遺物から見て、周辺に検出されている方形に巡る濠状遺構と、関連するものであろう。南側壁が階段状を呈していることから、何らかの目的で昇降を意図しているのかも知れない。15~16世紀のものが多いが、埋没時期は埋上層の江戸中期以降の染付磁器によって決められる。

尚当地点では、少なからずの16世紀代の瓦が出土したが、当地周辺の第19次・77次・113次地点などでも多量の瓦が出土している。中世城郭では城郭内的一部に墓地・寺院を作り情況が通用にあり、当遺跡群でも、中世の後半代に当地周辺に寺院もしくは墓地が存在した可能性が強い。

尚、巻末のFig. 60とTab. 2で、有田遺跡群内における各時代の井戸の分布と一覧を示した。井戸は弥生時代中期後半から出現し、各時代のものが検出されている。古代迄は素掘りのものが多いが、中世以降は桶組・石組の井筒など、内部施設を伴った井戸が出現する。立地は谷部を臨む斜面など水脈に恵まれた地域を選んでいるようである。

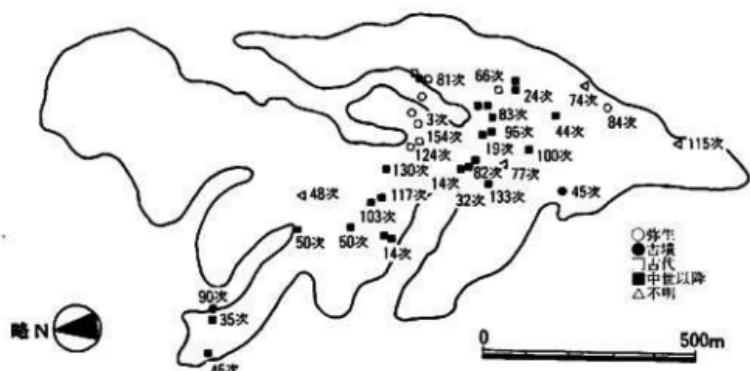


Fig. 60 有田道路井戸分布図

Tab. 2 有田遺跡群共47出土撲克一組

※①板井は彌太・井辺太・曲物を含む。

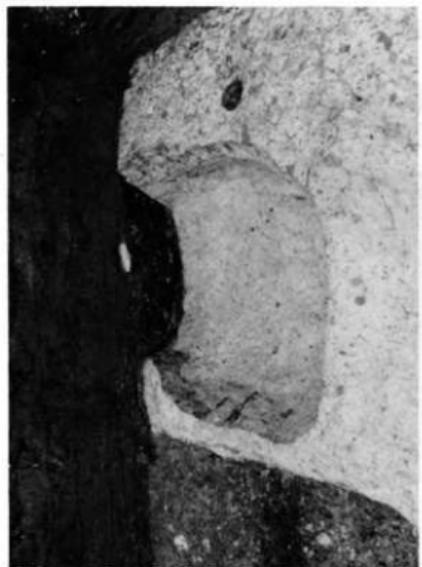
②古代は奈良・平安時代



(1)第165次調査区全景（南から）



(2)同打ち返し後（南から）



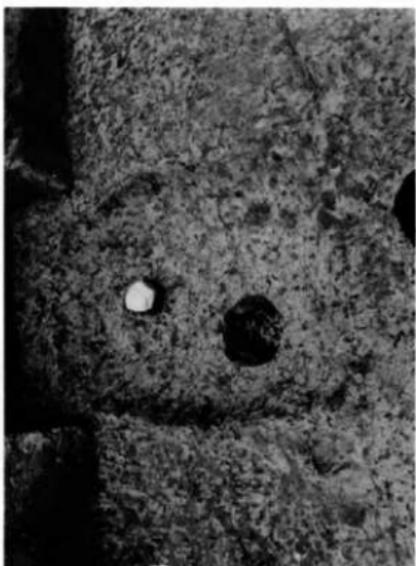
(1)SK05 (南から)



(2)SK07 (南から)



(3)SK08 (南から)



(4)SK09 (東から)

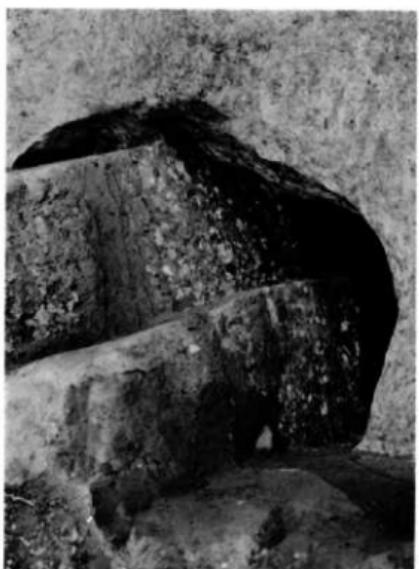




(1)SE06 (南から)



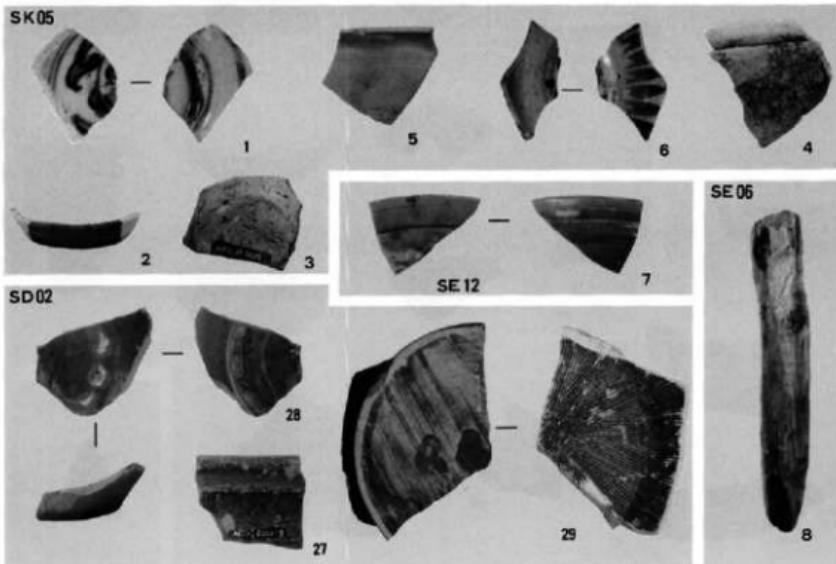
(2)同井筒 (北から)



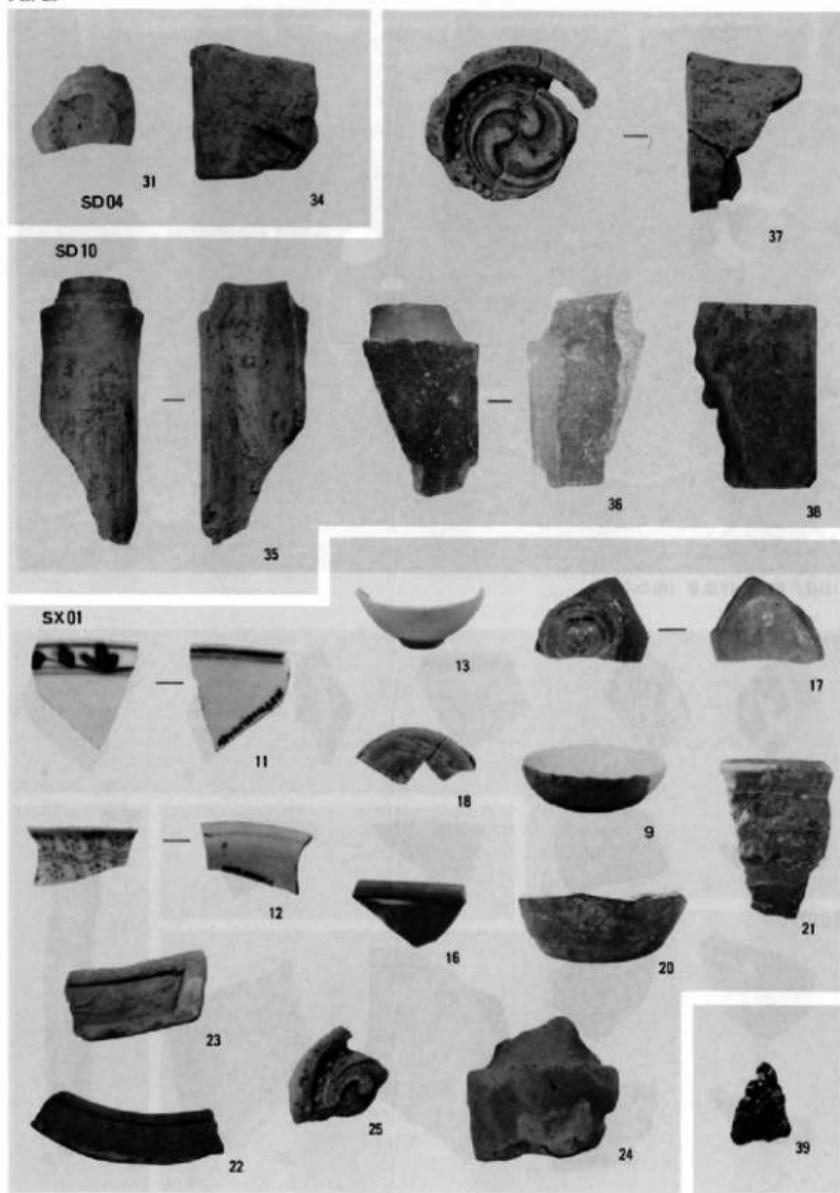
(3)SE12 (南から)



(1)井戸掘り上げ風景（南から）



(2)出土遺物 I



出土遗物II

有田・小田部 第15集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第307集

1992年 (平成4年) 3月13日

発 行 福岡市教育委員会

〒810 福岡市中央区天神

1丁目8の1

印 刷 赤坂印刷株式会社

